

# 長野県史跡『八丁鎧塚』

— 史跡公園整備に先立つ範囲確認調査報告書 —

平成12年3月

須坂市教育委員会

# 長野県史跡『八丁鎧塚』

—— 史跡公園整備に先立つ範囲確認調査報告書 ——

平成12年3月

須坂市教育委員会



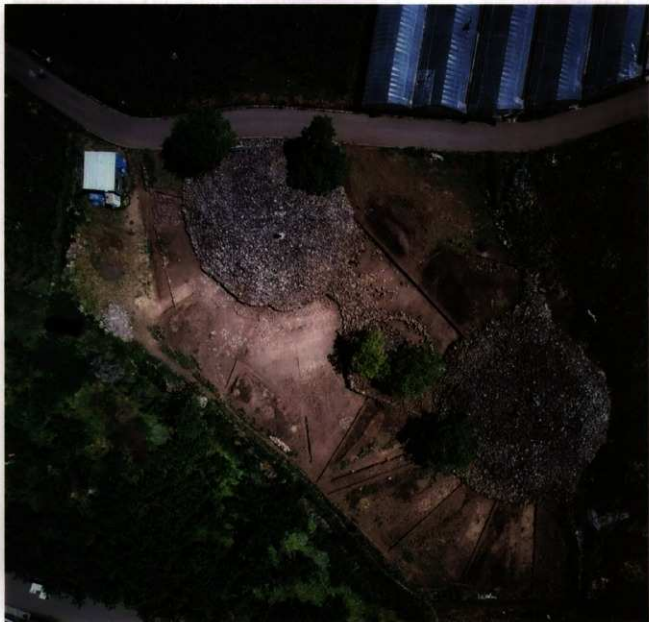
昭和32年当時の1号墳



昭和32年の調査風景



昭和32年貝罎出土状況（永塚光一氏提供）



上 八丁鑑塚古墳全景（上空から）

右 八丁鑑塚古墳全景（南から）







2号墳全景写真



2号墳墳丘裾部敷石の状況



2号墳張出部分全景



2号墳填丘張出部箱式石棺



6号墳全景



スイジガイ貝 (昭和32年出土)



スイジガイ貝の列点文



ゴホウラ貝 (昭和32年出土)



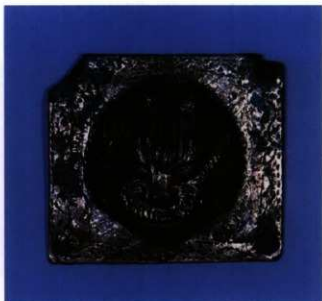
ゴホウラ貝 (昭和32年出土)



ゴホウラ貝 (昭和32年出土)



ゴホウラ貝 (平成6年出土)



2号墳出土鍍銀銅製獅喙文銅板



方格規矩四神鏡片

## 発刊にあたって

長野県史跡『八丁鎧塚』は、善光寺平を見下ろす鮎川扇状地の中ほどにあり、その出土品から大陸文化の香りが特に強い古墳と言われております。

昭和32年『上高井誌』編纂事業の一環として、國學院大学の太場巖雄先生をはじめ、永峯光一・亀井正道両先生ご指導のもと、上高井教育会の手によって初めて学術調査が行われました。以来38年が経過しておりますが、河原石だけを積み上げた2つの大きな塚は今も特異な景観を見せています。

平成9年度には地権者の方々のご理解により、県道長野須坂インター線からのアクセス道路の整備が行われ、古墳公園としての整備事業が完成しました。

現在は、須坂市における最も重要な史跡として、近年の古代史ブームも手伝って、市内外から多くの方々が見学に訪ずれ、学習とともに大きな印象を与えております。

平成6年に行われました今回の発掘調査は、範囲確認調査という限定的な調査ではありましたが、古墳の規模、形状、また新たな埋葬施設の確認、これまで知られていなかった6号墳の発見等大きな成果を上げることができ、また、新たな課題を生み出すことになりました。

これらの成果は、日本の古墳文化史研究上、重要な発見も多いとお聞きしており、本報告書の発刊により、日本の古代史説明が一步でも進展することとなれば望外の喜びであります。

本報告書の発刊にあたり、発掘調査にあたられましたみなさま、報告書の作成にあたり多大なるご指導、ご助言をいただきました諸先生方に心からお礼を申し上げますとともに、発掘調査、史跡公園整備事業にご協力を賜り、さらに八丁鎧塚古墳の保存整備に現在もご尽力をいただいております、上八町区の皆さまに深く感謝申し上げます。

平成12年3月

須坂市教育委員会  
教育長 宮本 経祥

## 序

元國學院大学教授 永峯光一

私が八丁鎧塚古墳にはじめて接したのは、昭和27年のことであつた。信濃史料調査の一環として、仁礼小学校校長故興津正朔氏の東道を得、考古資料の記録に郡下をあまねく歩いた時のことである。夏の暑い日であつた。当時は交通が殊のほか不便で、上八丁まで重い暗箱写真機のケースを肩に鮎川に沿った細い上り道を歩かねばならなかつた。数十分もたったであろうか。荒地の中に川原石が累々と積み重なり、樹木一本、草叢一つ生えていない鎧塚の二墳が白日のもとに姿をさらしているのを目のあたりにした。まだ周囲のブドー畑はなく、従つて随分突兀とした感じであつた。それまで各地で積石塚を見てきたが、こんな大規模で、しかも石だけのものには、めぐり会つたこともない。これが本当の積石塚だと思つた。

それから数年。当時、飯山南高等学校教諭であつた桐原健氏は上高井教育会が行う郡誌の編纂にかかわつてゐたが、その資料として鎧塚の発掘調査を要望された。意を受けた私は國學院大学助手の故亀井正道氏に加勢してもらい、発掘に臨んだのである。

発掘する側には誰も積石塚の発掘を経験したものはいない。それだけにこの発掘に際して緊張感を覚えたことは確かである。発掘に取りかかると、スコップを必要としないことには違和感を覚えたが、人頭大あるいはそれ以上の川原石を一つ一つ手渡して取り除くことによって、主体部があつたと考えられる中心部を探つていった。そして川原石と川原石の隙間に散らばつてゐた数々の遺物を拾集していったのである。そのような状態によって、両墳とも既に盗掘の厄に遭つてゐたのは明らかとなり、私たちが氣落ちしたのは確かであるにしても、両墳の遺物の質の良さは、補つて余りあるものであつたのだ。

発掘以来四十余年がたち、手持ちの資料も何時しか散佚してしまつて、残るのは揭示する写真一葉のみとなつた。また、記憶もすっかり薄らいで、現にどういふ発掘生活を送つたか思い出せない。ただ、國學院大学の故佐野大和氏が見学にみえた時のことだけが、妙に印象に残つてゐる。

このたび、「八丁鎧塚古墳群調査報告書」の計画が具体化し、序文を求められた。だが既に定年を過ぎ、今はその任に堪えないので、私の鎧塚との出会いと、発掘について若干の思い出をしるし、以てその責を果たすことにしたのである。

新しい報告書ではより広汎な、より詳細な事がらが記述されることになるだろうし、積石塚の歴史的背景についても、それぞれの専門家によって語られるであろう。そして、さらに嘗て考古学雑誌に載つた私たちの報告も再録されるという。喜ばしいこととして受け止める反面、再評価がどう出るか、氣になつて仕方がないでゐる。

## 例 言

- 1 本書は、史跡公園整備事業に先立つ、長野県史跡「八丁鐘塚」の範囲確認調査報告書である。
- 2 調査は、須坂市教育委員会が須坂市遺跡調査会に委託し、調査会は須坂市八丁鐘塚古墳群範囲確認調査団を組織して実施した。調査団の組織は、次のとおりである。

調査顧問	石野 博信 (徳島文理大学教授)
調査顧問	岩崎 卓也 (東京家政学院大学教授)
調査顧問	泉森 皎 (奈良県立橿原考古学研究所付属博物館長)
調査顧問	中村 登 (故) (須坂史談会)
調査団長	宮川 孝男 (須坂市文化財審議委員会委員)
調査主任	小林 宇彦 (須坂市立博物館学芸員)
調査副主任	青山 ひろみ (平成6年度)・永沢 叔子 (平成7～9年度)
調査員	千葉 剛成・網島 正道
作業員	小林ふじ代、越さく、岡田稔、長原原雄、北沢昭、清水昭三、廣田修年、荒井慶作、 森山春男、和田照雄、小林縁、出川信美、神林昌子、斎藤静、伝田伊代三、岡村政美、 青木茂男、町田肇、関野勝仁、松沢征樹、鈴木知紀 (順不同)
協力員	須坂市上八町区、上八町史跡保存会
事務局	須坂市教育委員会事務局社会教育課 (現生涯学習課)

- 3 発掘調査は、平成6年3月7日から同年7月15日まで実施し、その後、平成12年3月20日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。

- 4 本書の編集は、小林宇彦が行った。

- 5 執筆分担は、次のとおりである。

調査顧問	石野 博信	第5章第2節
調査顧問	泉森 皎	第5章第1節
調査団長	宮川 孝男	第6章
調査主任	小林 宇彦	第1章・第2章・第3章

なお、第4章については次のとおり、専門の研究者に依頼し、玉稿を賜った。記して謝意を表します。  
東京国立文化財研究所保存科学部 平尾 良光・榎本 淳子・小林 直子 第1節  
熊本大学文学部 木下 尚子 第2節

- 6 写真及び図は、次を除いて、小林宇彦が担当した。

調査副主任	永沢 叔子	一部遺構実測図の製図
各執筆者		第4章

- 7 八丁鐘塚の過去の調査研究報告を、執筆者の了解を得て、付章として転載させていただいた。

- 8 本調査による出土遺物、実測図、写真等すべての資料は、須坂市立博物館に保管されている。

- 9 現地調査及び整理作業において、次の方々からご指導、ご助言を賜った。記して謝意を申し上げる次第である。

また、本報告書の発刊にあたり、昭和32年に発掘調査を指導され、研究報告を学会に発表された永峯光一先生から序文を賜った。深くお礼を申し上げます。

現地調査 桐原 健、樋口 昇一、土屋 積 (整理作業共)、小林 秀夫、西山 克己、山口 明、  
飯島 哲也、矢島 宏雄、宮下 健司

整理作業 金 基雄 (故)、車崎 正彦、田中 新史

(敬称略)

# 目 次

巻頭図版

発刊にあたって

序

例 言

目 次

第1章 範囲確認調査の概要——調査の目的と経過——	1
第2章 八丁鎧塚古墳の概要	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 鮎川流域古墳の概要	6
第3章 八丁鎧塚古墳の調査	9
第1節 これまでの発掘調査の概要と出土遺物	9
第2節 範囲確認調査——手法と概要、出土遺物——	16
1 1号墳の調査	16
2 2号墳の調査	19
3 6号墳の調査	30
第3節 検出遺構の検討	33
第4章 出土資料の分析	37
第1節 長野県須坂市の八丁鎧塚2号墳から出土した帯金具の自然科学的研究	37
第2節 八丁鎧塚1号墳スイジガイ・ゴホウラ鋼について	49
第5章 考 察	64
第1節 八丁鎧塚古墳の二・三の考察	64
第2節 東北アジア横石塚の中の八丁鎧塚古墳群	77
第6章 結 語	85
付 章	86
第1節 長野県須坂市鎧塚古墳の調査……永峯光一・亀井正道（考古学雑誌45-1、昭和34年）	86
第2節 「鎧塚第2号古墳」……須坂市教育委員会（昭和60年）	108

巻末図版

付 図

- 1 発掘調査全体図・平面図（含む等高線図）
- 2 各古墳測量図



# 第1章 範囲確認調査の概要

## —調査の目的と経過—

長野県のみでなく、全国的にも極めて著名な積石塚である「八丁鎧塚1・2号墳」（以下八丁鎧塚という）は、西日本の古墳時代前期積石塚、高知県高松市石清尾山の猫塚等の積石塚を彷彿とさせる東日本唯一の古墳時代中期前半の積石塚として、古墳時代史特に積石塚古墳の被葬者論争の中心的存在である。

今回の範囲確認調査は、「須坂市八丁鎧塚古墳周辺整備事業」（史跡公園整備事業）に先立ち、古墳規模、および古墳のあり様を把握し、遺跡整備の方針を決定することを目的に発掘調査を行った。

平成4年、国の施策である「地域文化財保全事業」及び須坂市文化財取得基金により個人所有の2号墳および1号墳を含めた周辺用地を取得。平成5年には調査団顧問、総括指導者として東京家政学院大学教授 岩崎卓也先生、徳島文理大学教授 石野博信先生、権原考古学研究所付属博物館長 泉森 皎先生、須坂史談会長 中村 登氏（故）をお願いし、調査団長に須坂市遺跡調査会 宮川孝男氏をお願いし、「須坂市八丁鎧塚古墳群範囲確認調査団」が組織された。

翌平成6年3月4日に調査前の慰霊祭を行い、同年7月15日までの54日間現地における範囲確認調査をおこなった。

調査日誌は下記のとおり。

平成6年

- 3.4 市議会議員、収入役、教育長、教育次長、社会教育課長、同課長補佐、団長、調査員、作業員、上八町史跡保存会会員が出席し、慰霊祭を行う。  
プレハブ設置。午後から機材運び込み。
- 3.7 現地調査の実質的初日。  
事前に設定したトレンチ設定計画によりトレンチ設定。2号墳の墳裾をとらえる。  
表土下30cmで墳丘基底の敷石を確認。  
2号墳から1号墳にのびる積石の性格確認のためさらにトレンチを設定、調査。
- 3.9 新たにBトレンチを調査開始。墳丘の近くで裾を確認する。周溝は確認できない。  
Cトレンチを拡張し周溝、墳裾の確認をさらに広げる。
- 3.12 調査は休み。畑の灌水管敷設替え立ち会い。  
前所有者から下記の点を聞き取り。
  - ① 明治末から大正初めにかけて2号墳を開掘。それまでは墳丘はなだらかで、周囲は芝を植えたようだった。
  - ② 現在、道になっている部分でとっくりのような土器を見つけた。（現在は不明）
  - ③ 2号墳のBトレンチあたりにキッチと積まれた部分があった。
  - ④ 2号墳と1号墳の間にある平坦部は後から畑にしたもので、ここから石室がみつかった石は橋板に持ち出した。
  - ⑤ 墳丘には六角石と言われる仁礼権の沢の石が入っている。  
1号墳と2号墳との間にある石積みの性格にヒントを得る。
- 3.14 トレンチ内の配石を精査、確認。Sトレンチを拡張する。  
長野県教育委員会文化課 百瀬新治指導主事来訪、指導を受ける。

- 3.15 長野県埋蔵文化財センター 土屋 積氏来訪。細部の指導、助言をいただく。  
福井県松岡町教育委員会視察来訪。
- 3.16 Pトレンチ内に立位の板石を確認。石棺の可能性が高い。
- 3.17 降雪により午前のみ作業。  
石棺周辺の配石状況確認を進める。
- 3.18 2号墳から1号墳に続く石積みの上層（石棺上部）は耕作による石積みと確認。撤去。
- 3.20 地元対象の中間現地説明会を開催。上八町区民約60名参加。  
長野県立歴史館 宮下健司氏、調査団顧問 泉森 敏先生来訪、指導いただく。
- 3.24 2号墳張出部の石棺を全検出。
- 3.28 長野県埋蔵文化財センター-佐久調査事務所来訪。指導助言をいただく。  
岩崎、石野、泉森顧問来訪。調査方針検討会開催。
- 3.29 後、八丁鑑塚6号墳となる配石の基底部出始める。  
長野市立博物館 山口明氏来訪。
- 3.31 配石の基底部、石棺、2号墳張出部について土屋 積氏より現地で指導いただく。
4. 4 配石の基底部を確認。円形の広がりか明確になる。
4. 5 配石が芯を土で築いた古墳の基石であることがわかる。磨滅した埴輪片、土師器片いずれも小片が出土。遺物はいずれも石の外側に検出される。
- 4.11 1号墳の墳丘裾確認のためトレンチ調査開始。
- 4.15 1号墳の墳裾を確認。周囲に礫はなく地元では「のぼつち」と呼ばれる暗褐色の火山灰を多く含む土層が古墳の基底部まで1m程つく。
- 4.18 から  
各遺構の写真撮影、遺物の平面測量のため精査。
5. 7 から  
検出遺構の清掃、墳丘上の草等の航空測量に先立つ清掃を開始。
- 5.26 委託による航空測量。
- 5.30 から  
墳丘基底部の状況把握のため、2号墳の一部に1mのトレンチを入れる。
6. 9 から  
墳丘トレンチの見通し図取り。
- 6.26 一般市民向け現地説明会開催。参加者 400名。
7. 4 埋め戻し開始。
- 7.15 機材撤去。埋め戻し完了する。現地における調査終了。

平成8年

8. 5 報告書作成のため第1回 検討委員会を開催。

## 第2章 八丁鎧塚古墳の概要

### 第1節 地理的環境

須坂市は長野県の北東部に位置する、人口約55,000人の都市である。東には急峻な山地、上信越火山帯をはさみ群馬県と接し、西と南には新潟県に至って信濃川となる千曲川を隔て、県庁所在地である長野市に接している。

市域の上信越高原国立公園には、四阿山を最高峰として浦倉山・土鍋山などの山脈が連なっている。これらの山々は急峻で深いいくつもの谷を形成し、それらは山麓に至ってそれぞれに複雑な扇状地を形成し、複合扇状地となって、標高500m付近の扇頂部から扇端部の標高350m付近までの、きわめて大規模な扇状地を形成している。八丁鎧塚古墳のある上八町地区は、四阿山から流れ出る宇原川、梯子山から流れ出る仙仁川が合流し鮎川となり、この扇状地上に位置しており、八丁鎧塚古墳はこの鮎川が形成する扇頂部に位置し、河川による河岸段丘状の崖のごく近接地に位置している。

扇状地の扇頂部に位置するため、北に流れる百々川との距離は2kmにも及ばず、鮎川の南側には妙徳山が迫り、6km西には千曲川が流れ、市域北側の松川・八木沢川扇状地に比べ小規模な扇状地を形成している。八丁鎧塚古墳が位置する鮎川扇状地扇頂部の東、南、北側は上信越火山帯から迫り出した山地と川が迫り、西に千曲川という大河が流れ、さながら自然要害とも言うことができる。

この扇状地は、須坂市域の全ての扇状地がそうであるように地下水位が低く、山林、原野になっていたが江戸時代以降急速に開拓され、明治から昭和初期にかけては、旧須坂町に発展した製糸業を支える繭の生産地として桑が植えられ、戦後の灌漑事業によって、良質な果樹生産地として全国的に評価されている。また、鮎川の流域は河川の運ぶ土と水利から水田が営まれ、江戸時代には下流の八町地区を含め、600石を越す石高が記録されている。

千曲川は幅1.5kmの沖積平野を形成し自然堤防を形成し、微高地は集落や畑地として、後背湿地は水田として、須坂市域の一大水田地帯となっている。



図1 須坂および上高井郡地質図

## 第2節 歴史的環境

現須坂市域で最も古い歴史的痕跡を確認できるのは、須坂市仁礼地区の旧石器時代の尖頭器が出土した「宇原遺跡」である。この地区の宇原川上流には、学史上著名な微隆起線文土器を出土した「石小屋洞穴遺跡」がある。縄紋時代の遺跡は縄紋時代草創期、早期を経て八丁鍾塚から扇状地を西に700m程下った三入道遺跡に縄紋時代中期から後期の遺跡があり、大規模ではないが集落が営まれていたことが明らかになっている。

弥生時代の遺跡は、鮎川扇状地内には現在のところ確認されていない。しかし須坂市内においては弥生時代中期の土器を出土した「須坂園芸高校校庭遺跡」が知られており、さらに鮎川下流域では上信越自動車道の開通に伴い、長野市若穂綿内地区に弥生時代から古墳時代に至る遺跡が知られている。

八丁鍾塚の位置する鮎川流域には、須坂市域において確認することのできる約100基の古墳の内、約半数があり、いわゆる「鮎川古墳群」と称されている。八丁鍾塚はそのほぼ最上流域に位置しており鮎川流域を含めた須坂市域で最も古い古墳として知られている。

「鮎川古墳群」はその分布域から3つに分けることができる。

1つは八丁鍾塚を中心とする「鍾塚古墳群」。下流に下り袈裟懸けの女性を象った「人物地輪」を出土したことで知られる「天塚古墳」、「塚の越古墳」を一同として「塚の越古墳群」。さらに須坂市大字野辺、米持地区に至り、昭和51年に農道改良工事に先立ち、須坂市教育委員会によって発掘調査が行われ、冢形埴輪、棒形埴輪などの形象埴輪が出土し、上円下方墳とされる「天神1号墳」を代表とする「天神古墳群」がある。

八丁鍾塚古墳群は周辺の古墳を含め6基から成っている。6基の内3基は八丁鍾塚1号墳から約100m上流に位置し、2基は後世の開墾等によりその姿は明らかでないが、1基は横穴式石室を観察することができ、須坂市域における典型的な後期古墳の様相を見ることが出来る。さらに、八丁鍾塚の対岸妙徳山の山麓には、横穴式石室の角礎を積んだ10m程の、長野県内では数少ない珠文鏡が出土した（須坂市では本郷大塚古墳に続き2例目）「戸谷古墳」がある。

須坂市域内にはこの鮎川流域古墳群の他に、松川扇状地上に位置する日流原古墳群がある。この古墳群には昭和56年に「須高地区広域営農団地農道整備事業」に先立つ発掘調査が行われ、圭頭大刀、三輪玉、珠文鏡、馬具、太刀等多くの遺物を出土した「本郷大塚古墳」があり、後期古墳の追葬形態や実用的な馬具の出土で注目されている。

さらに、市街地にほど近い坂田地区には、「扇の入古墳群」「大星古墳群」があり古墳から見下ろす低湿地には、古墳時代前期の土器を出土した「坂田遺跡」があり、集落の営みを確認することができる。

須坂市域の古墳時代遺跡を概観すると、扇状地の扇部部に古墳が造られ、その扇端部に集落が営まれる傾向がある。扇端部の最も大きな集落は「塩川遺跡群」であり、弥生時代後期から奈良、平安時代まで途切れることなく生活の痕跡を確認することができる。この地域は扇状地扇端という水利的な好条件と、千曲川の沖積地を背景とした稲作に支えられた地域である。

八丁鍾塚からは距離にして4km離れ、標高差は約150mある。八丁鍾塚周辺に古墳時代前期から中期にかけての集落跡が発見されておらず、扇状地の扇部部に位置する同時期の「塩川遺跡群」は、八丁鍾塚と集落との関わりを考える「鍵」になるかもしれない。



遺跡群



1. 小河原遺跡群
2. 塩川・須坂・小山遺跡群
3. 米持遺跡群
4. 井上・幸高遺跡群
5. 坂田遺跡



- A. 船川古墳群  
(未持・野辺・八丁)
- B. 坂田古墳群
- C. 行人塚・塚原  
立石塚・本郷大塚古墳
- D. 松川古墳群



- 千曲川の  
自然堤防上集落

図2 須坂市古墳時代遺跡分布図

### 第3節 鮎川流域古墳の概要

八丁鎧塚が鮎川流域古墳の一つとして認識されてきたことは、第2節で述べたが、いわゆる「鮎川流域古墳群」の時間的な普遍性については必ずしも明らかではない。

江戸時代から明治時代の開墾によって、小規模の古墳は撤去され、昭和に入って当地方で「やつか」「やつくら」と呼ばれる積石塚状の石積みはコンクリート骨材として採取され、現在残る古墳のみでこの流域古墳の時間的な普遍性を説明するには躊躇せざるをえないが、扇状地扇側部、鮎川流域の古墳について概観してみたい。

現在鮎川流域古墳最上流部に認識されているのは、標高約520m付近の「八丁鎧塚5号墳」であり、最下流部に位置するのは、標高約370m付近の「大塚畑2号墳」である。これらは、大小43基の古墳で構成されている。

その標高差は150m、距離は約1.8km離れている。須坂市遺跡詳細分布図によれば、古墳の規模は現在確認されている大きさと最小5m、最大32mで多くが10m前後の比較的小さな古墳である。

それぞれの古墳の属す時代は、調査例が少なくほとんど明らかでないが、概観するとそのほとんどは後期古墳に属すと考えられる。

これらの古墳のほとんどが、鮎川によって扇状地扇側部が削り取られた段丘崖の直上付近に位置している。さらにこれらは時間的な差異はあるが、外観上すべて積石塚と言われており、段丘崖直上の古墳を構成する礫は、石室を除いて例外なく鮎川の河川敷から採取した川原石である。

扇側部に位置し礫を直下に広がる河川敷から採取していることは、積石塚の成立を環境自生説とする考えかたに一見ヒントを与えているように考えることもできる。

しかし、現状で残されている鮎川流域の古墳群は、前述したようにそのほとんどが後期に属する古墳であり、厳密に言えば積石塚と言っても、土と石とが混在する「土石混合墳」であり、時間的な変遷も考慮する必要がある。

さらに、注目すべきは鮎川流域古墳を仮に大別すると、上流の鎧塚古墳群には八丁鎧塚2号墳が、中流域の塚の越古墳群には、袈裟懸けの人物埴輪を出土したと伝えられる天塚古墳が、下流域には野辺、米持地域の古墳を一括して天神古墳群があり、そこには米持天神1号墳がある。

大別すれば、それぞれの古墳群中に必ず1基の中期古墳が存在していることに気づく、鮎川流域古墳全体の時間的な流れをとらえることは容易ではないが、さらに大別するとそれぞれの属性が明らかになってこないだろうか、個別に古墳の時代、構造を細かく検討する必要はあるが、一つの見解として指摘しておきたい。

また、この流域古墳が鮎川の右岸に集中している点も注視すべきである。いくつかの左岸に位置する古墳があるが、鮎川流域全体からすれば少ない。後述する米持天神1号墳の墳丘構造を観察すると、西側の側面が2段ないし3段の構築状況を最も良く示している。他の側面が耕作等によって破壊されていて現状が残っていないと単純に考えるだけでなく、古墳の築造当時から意識的に西側だけに段築しているとすれば、古墳の正面観を意識したとも考えられ興味深い。

鮎川流域古墳が鮎川右岸に位置し、左岸にほとんど見られないことは単に開墾や耕作による消滅ではなく、墓域と住域、集落と墓の関係を示すのではないだろうか。

また、3つの中期古墳を核とするブロックは、さらに各集落の関わりを示すものと言えるのではないだろうか。

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
88	藤山古墳	井上・藤山	尾根上	円墳(径15.0・高2.0)	95-5	大明神	野辺・大明神	庭側	円墳
89	北高古墳	米持	扇 尖	円墳(径15.0・高2.0) 遺方・埴輪勾玉・管玉・小玉・金釧・銀釧(2)	95-6	大明神	野辺・大明神	庭側	円墳
90-1	大塚原 第1号古墳	米持・小塚原	扇 側	横石(7)・方墳(長14.0・高1.6)(?)	95-7	大明神	野辺・大明神	庭側	円墳
90-2	大塚原 第2号古墳	米持・小塚原	扇 側	方墳(長16.0・高1.5)	96-1	藤原山 第1号古墳	八町・蛇塚山	尾根上	円墳(径9.0)
90-4	大塚原 第4号古墳	米持・小塚原	扇 側	円墳(径14.0・高2.0)	96-2	藤原山 第2号古墳	八町・蛇塚山	尾根上	円墳(径15.5・高2.5)
91-1	天神 第1号古墳	米持・天神	扇 側	上下方墳(長32.0・高4.0) 埴輪(冢形・器形・円筒)	97-1	塚の橋 第1号古墳	八町・花田北	扇側	方墳(長16.0・高3.0)
91-2	天神 第2号古墳	米持・天神	扇 側	横石・円墳(径10.0・高2.0)	97-2	塚の橋 第2号古墳	八町・花田北	扇側	円墳(径6.0・高1.8)
91-3	天神 第3号古墳	米持・天神	扇 側	円墳(径13.0・高1.5) 横穴石室(長4.0・巾1.5) 須恵器	97-3	塚の橋 第3号古墳	八町・花田北	扇側	円墳(径16.0・高3.0)
91-4	天神 第4号古墳	米持・天神	扇 側	円墳(径9.0・高1.7) 横穴石室(長2.0・巾1.5) 須恵器	97-4	塚の橋 第4号古墳	八町・花田北	扇側	円墳(径5.0)
92	十三塚古墳	野辺・十三塚	扇 尖	円墳	98-1	天塚	八町・花田北	扇側	円墳・人物埴輪
90-1	野辺天神 第1号古墳	野辺・天神	扇 側	横石・円墳(径10.0・高2.0)	98-2	天塚	八町・竹村	扇側	(44×18・高2.0)
90-2	野辺天神 第2号古墳	野辺・天神	扇 側	横石・円墳(径11.0・高2.0) 円筒埴輪	98-3	天塚	八町・花田北	扇側	円墳(径6.5・高1.5) 横穴石室(巾1.3)
90-3	野辺天神 第3号古墳	野辺・天神	扇 側	横石・円墳(径12.5・高3.0) 円筒埴輪	98-4	天塚	八町・花田北	扇側	円墳(径17.0・高2.2)
90-4	野辺天神 第4号古墳	野辺・天神	扇 側	横石・円墳(径28.0・高3.0)	99	野辺 三人遊古墳	八町・三人遊	扇側	円墳
94-1	桑市場 第1号古墳	野辺・桑市場	扇 尖	円墳	100-1	野辺 第1号古墳	八町・桑塚	扇側	横穴(径23.0・高2.5) 円筒埴輪・方筒埴輪・西神鏡・石鏡・貝鏡・直刀・鉾・刀子・鉄釧・龜・勾玉・管玉・八咫
94-2	桑市場 第2号古墳	野辺・桑市場	扇 尖	円墳(径10.0・高3.0)	100-2	野辺 第2号古墳	八町・桑塚	扇側	横穴(径15.0・高3.0) 家形埴輪・器形埴輪・円筒埴輪・直刀・鉄釧・金銅製等金具・小玉・鈴宮塞・壺
94-3	桑市場 第3号古墳	野辺・桑市場	扇 尖	円墳	100-3	野辺 第3号古墳	八町・桑塚	扇側	円墳(径8.0・高2.0)土師器・須恵器
94-4	桑市場 第4号古墳	野辺・桑市場	扇 尖	円墳	100-4	野辺 第4号古墳	八町・桑塚	扇側	円墳(径11.0・高1.5)
94-5	桑市場 第5号古墳	野辺・桑市場	扇 尖	円墳	100-5	野辺 第5号古墳	八町・桑塚	扇側	円墳(径14.0・高2.5)
95-1	大明神 第1号古墳	野辺・大明神	扇 側	横石・円墳(径9.5・高1.2) 横穴石室(長7.0・巾1.65)	100-6	野辺 第6号古墳	八町・桑塚	扇側	円墳(径12.5・高不詳) 土師器・円筒埴輪
95-2	大明神 第2号古墳	野辺・大明神	扇 側	円墳	101	野辺 第7号古墳	八町・戸谷	山麓	塚文鏡1・須恵器
95-3	大明神 第3号古墳	野辺・大明神	扇 側	円墳					
95-4	大明神 第4号古墳	野辺・大明神	扇 側	円墳					

表1 鮎川流域古墳地名表

### 米持天神1号墳

鮎川流域の古墳群中で最も興味深いのは、古墳時代中期に属すと報告されている「米持天神1号墳」である。

この古墳は、昭和51年に農道整備事業に先立ち確認調査が行われ、東西約30m、南北約35m、高さ3mの方形の基石工法による墳丘を持つ古墳であることが報告されている。最も注目されるのは、椅子形埴輪・蓋形埴輪、家形埴輪、器形埴輪の出土である。中でも家形埴輪は装飾性に富み、現在高28cm、梁間幅30cmを測る。埴輪の構成は八丁鑑塚2号墳に共通している。

さらに、推定上円下方墳である点は再考の余地を残しているものの、八丁鑑塚とはほぼ同時に構築された古墳としてその意義は大きい。

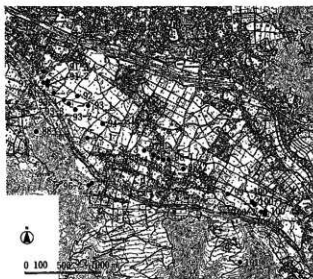
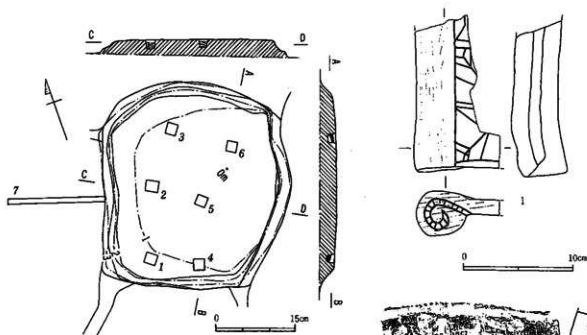
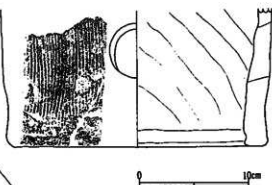
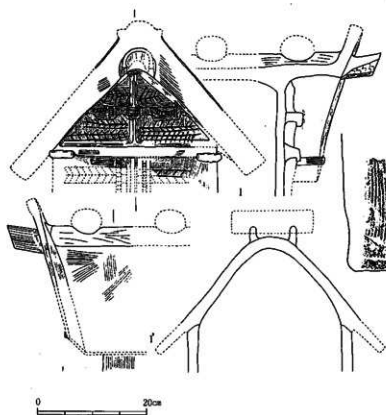


図3 鮎川流域の古墳分布



米持天神1号墳実測図



- 1. 家形短輪
- 2. 椅子形地輪片
- 3-4. 円筒地輪片

图4 米持天神1号墳出土遺物



### 第3章 八丁鎧塚古墳の調査

#### 第1節 これまでの発掘調査の概要と出土遺物

八丁鎧塚古墳が、中央の研究者によって調査されるのは、大正12年11月上高井教育会の依頼で上高井農学校(現 須坂園芸高校) 遺跡や臥竜山・井上村の古墳、若穂・小布施の古墳を調査した鳥居龍藏らによるものである。

この時鳥居らは、八丁鎧塚1号墳上で記念写真を残している(右写真)、調査とはいっても現地踏査的なのであるが、残された写真を細かく見ると、すでに墳丘の一部が倒平されていること畑地から1m程の墳丘途中に平坦面があるようにも見える。



上高井古墳写真帖より

また、現在の墳丘は墳頂部がなだらかだが、心なしか碗状を呈しているようにも見える。

#### ●昭和32年の発掘調査

本格的な発掘調査は、昭和32年上高井教育会と上八町誌編纂委員会の協力で、主として上高井教育会が上高井誌編纂のため、上八町の人々の協力を得て、当時、長野県文化財臨時調査員永峯光一氏と國學院大学助手亀井正道氏によって、1・2号墳の墳丘調査を行ったのが最初である。

この調査は、墳丘のほぼ真ん中に1号墳では、長さ8m、幅3mのトレンチを設け、基底部まで石積みを除去した。2号墳では、長さ11m、幅5mのトレンチを設け1号墳と同様基底部まで調査している。

いずれの古墳でも出土した遺物は散逸的で、石室等埋葬施設は検出されていない。つまり出土した遺物は古墳の主体部に属していた可能性は高いが、原位置にはないという考察が加えられている。

この調査では1号墳及び2号墳についてその実測図を提示し、下記のように述べている。(付章 参照)

#### ◎1号墳

東西径約23m、高さ2.5m、墳頂部は径10mが平坦になっている。これは和算銅彰碑が建てられているためと考える。

墳丘そのものは大きな変化はない。

円形の積石墳とみる。

墳丘には全く土を混じえない。礎は人頭大またはその数倍に及ぶ川原石ですべて構成されている。

墳丘下50cmから散発的に遺物が出土。

トレンチ北西側から、碧玉製銅片1個。北東部のやや離れたところから水字貝製銅残片(後にゴホウラ貝製銅3片を含むことが分かる。第4章第2節参照)。

石銅(径3.7cm・径3.6cm 2片)の下から碧玉製管玉、小型勾玉2、管玉1、小玉2。

鉄鏃、鉄銚、直刀片、方格規矩鏡片1、

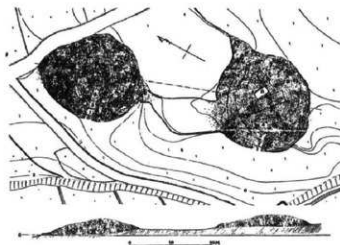


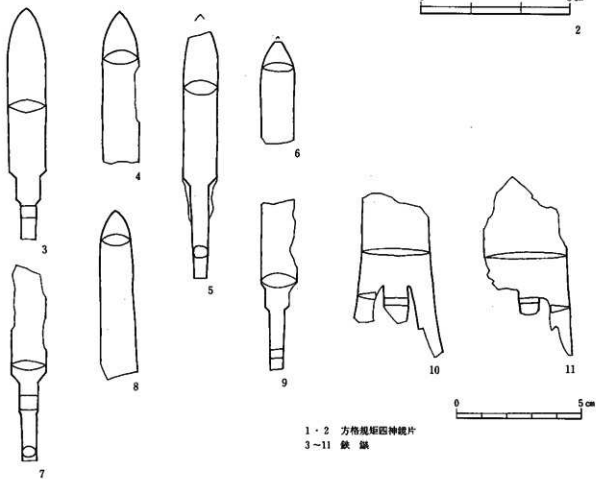
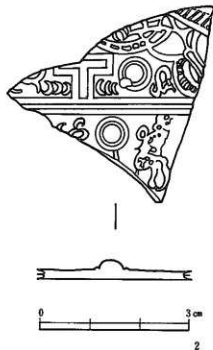
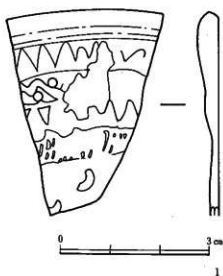
図5 昭和32年調査実測図

仿製鏡1片、(後に方格規矩四神鏡2片と判明、第5章第2節石野論文所載、車崎氏私信参照)

土師器片出土。東南側から家形埴輪。円筒埴輪片。

いずれも散逸的で60cmから1mの深さに多く出土している。

埋葬施設は確認できない。



1・2 方格規矩四神鏡片  
3-11 鉄器

図6 八丁鎧塚1号墳出土遺物

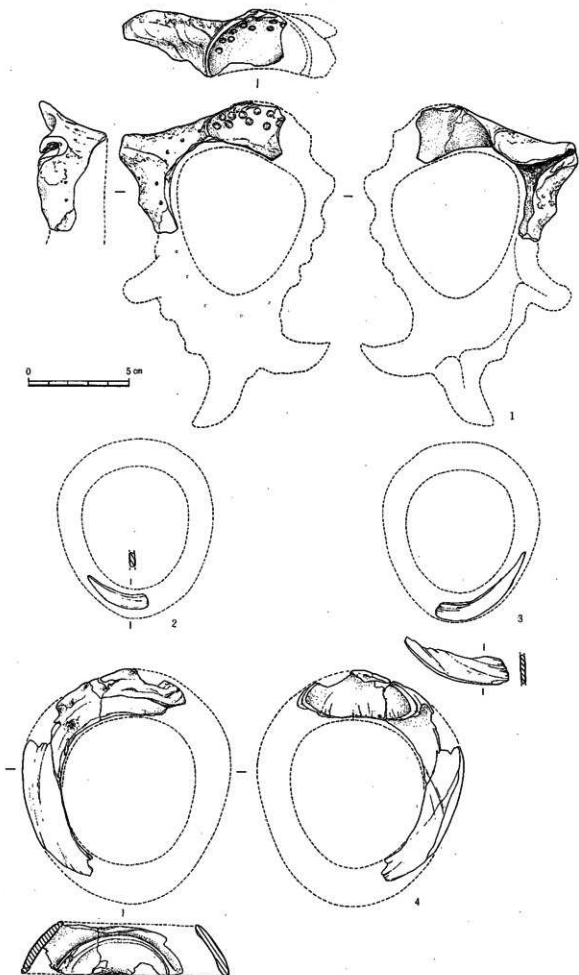


图7 八丁窰1号填出土遺物

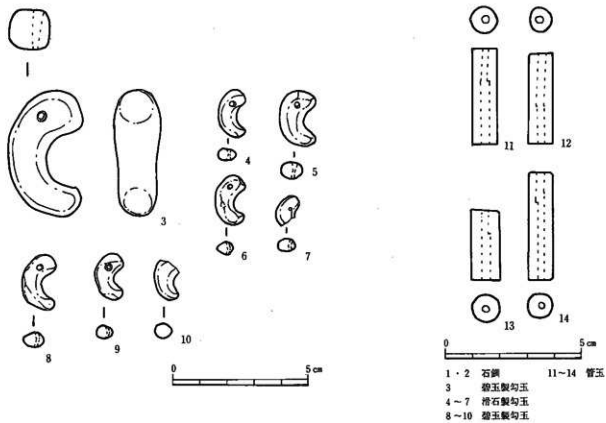
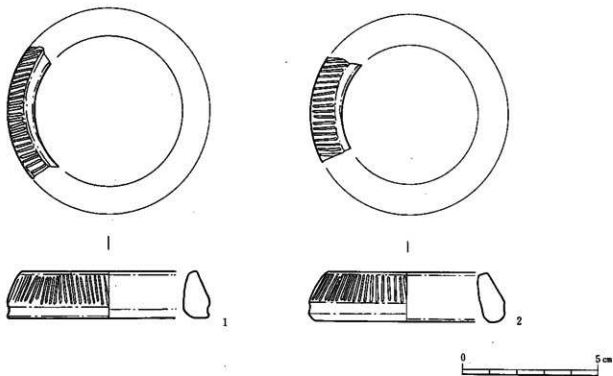


图8 八丁鉾塚1号墳出土遺物

◎2号墳。

東西径約20m、南北径約25m。元来は径約25mを有していたと考える。

高さ3.6m、北西部では5mに及ぶ。墳頂部は径4.5mが平坦になっている。一蓮塔が建てられているためと考える。

円形の積石墳とみる。

墳丘の構造は1号墳と同様である。

調査区中央、墳丘下1mから集中的に遺物が出土する。

金銅舞甕文鈿板（鑄造）3（銅製、鍛造と判明。第4章第1節参照）。ガラス小玉5（地盤土から出土）。

刀剣小片。鉄鏃。鈴杏葉。罌。家形埴輪。器財埴輪。円筒埴輪。土師器。

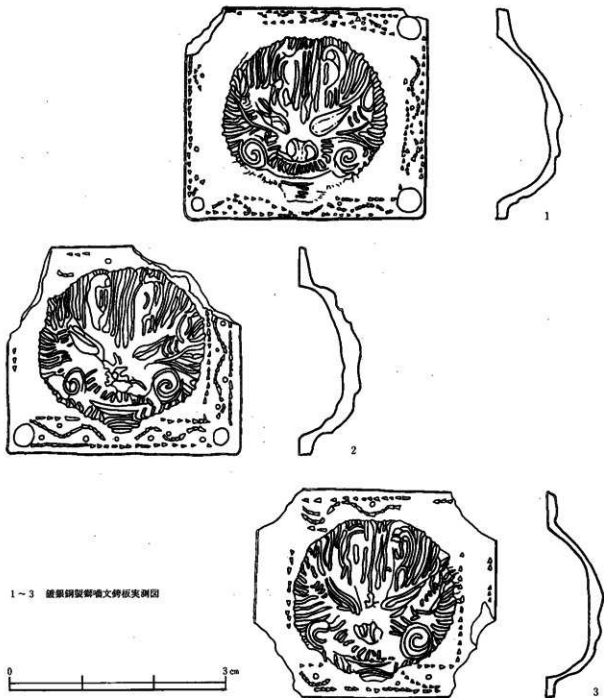


図9 八丁鎧塚2号墳出土遺物

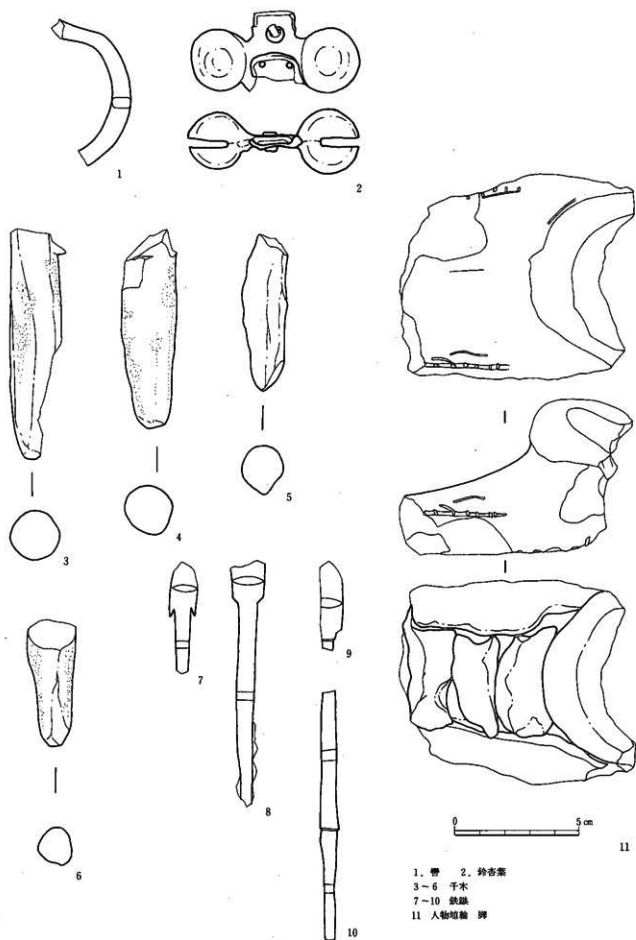


圖10 八丁鎗塚2号墳出土遺物

●昭和60年の発掘調査

「市道横松原鍬塚1号線」の拡幅工事のため、これに先立ち2号墳の発掘調査が昭和60年3月15日から同年3月18日まで行われた。

この調査は農道の敷設を前提に、2号墳の北東側の墳裾を確認する結果になった。

これにより墳丘規模が約24mであることがわかり、昭和32年の調査では古墳の主体部の検出を中心に行われたのに対し、結果として墳丘規模を明らかにすることになった。

遺物は器材地輪、円筒地輪片が出土し須恵器片も出土したが、昭和32年の調査結果を大きく変える事実は見いだされなかった。

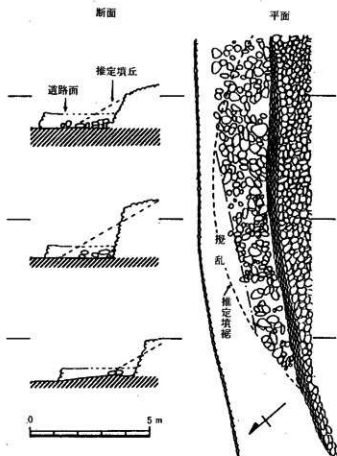


図11 調査区域詳細図

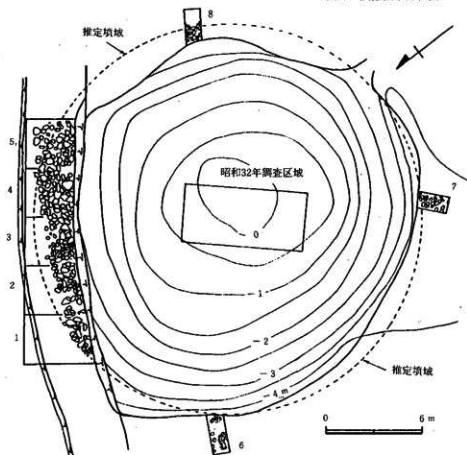


図12 鍬塚第2号古墳全体図

## 第2節 範囲確認調査

### —手法と概要、出土遺物—

#### 1 1号墳の調査

##### 手法

1号墳の調査は範囲確認と周溝の有無、2号墳に延びる石積みの性格把握に重点をおいて行った。長野県指定史跡であり墳丘の現状を保全するため、その指定範囲である墳丘への調査は遺構保存のため行わないこととした。

##### 詳細

本調査によって、1号墳の直径は25.5m、高さ3.5mと確認した。

墳丘に対し10本のトレンチを設定し、Qトレンチは2号墳との関係を明らかにするため2号墳と共通するトレンチとし、北東方向に延びる石積み部分についてはその性格把握のため、Nトレンチを設定した。1号墳西側のトレンチでは、配石等の遺構は検出できず、墳丘の裾も確認できなかった。これは、現況の墳丘が築造当時の墳裾位置に近いか、あるいは石積みの崩落によって築造当時の墳裾が隠されていることも考えられる。しかし、東側トレンチによって墳裾が明確になり墳裾を推定すると、現墳丘裾をほぼ築造当時の墳裾位置と考えることができよう。

東側のJ・K・L・Mの各トレンチでは調査区が限定されたものの、明確に墳丘の裾を確認することができたが、耕作等による攪乱のためか、墳丘の石積みか壁状に積まれていたのか、規則性の無い石積みなのかを確認することはできなかった。

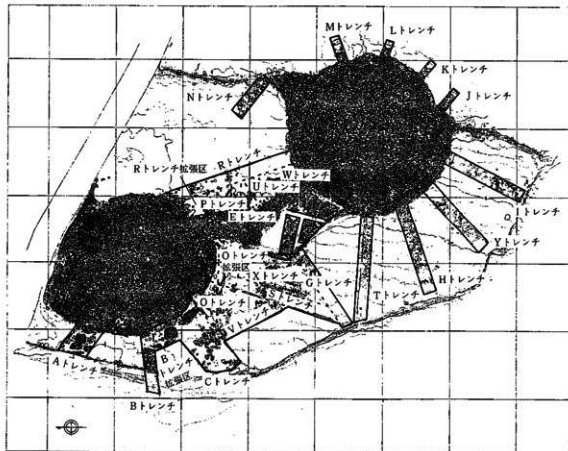


図13 八丁館塚範囲確認調査トレンチ配置図



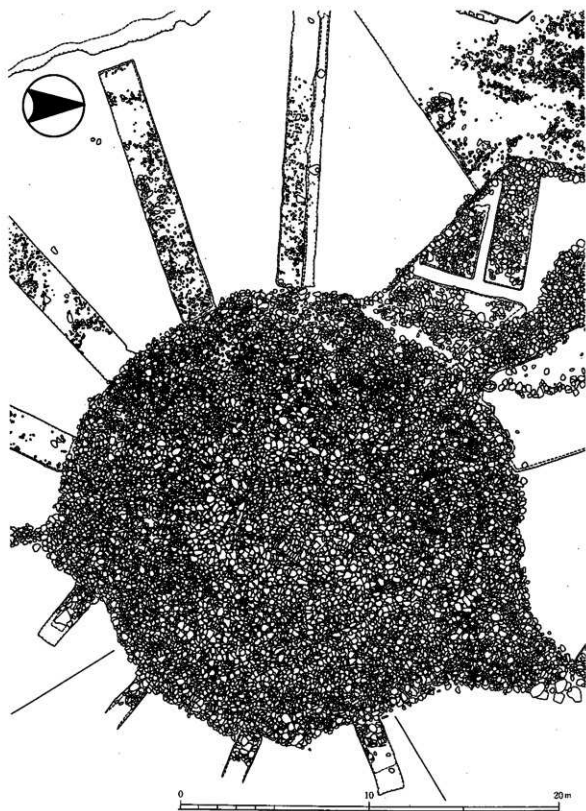


図14 八丁館塚1号墳 墳丘実測図

しかし、墳丘全体を確認すると墳丘測量図によって墳丘に段築の痕跡が認められる。昭和32年に墳丘へのトレンチ調査が行われていること、あるいは伝承されている中世の戦場地としての火葬地等の使用や墳形の変更を考慮しても、少なくとも1段の段築が墳裾から墳頂部にむかって、2mないし3m付近にテラス状に段築を認めることができる。

しかもJ・K・L・Mの各トレンチでは、墳裾と接する地山はほとんど礫を含まない火山灰土であり、墳裾は明確に識別することができる。

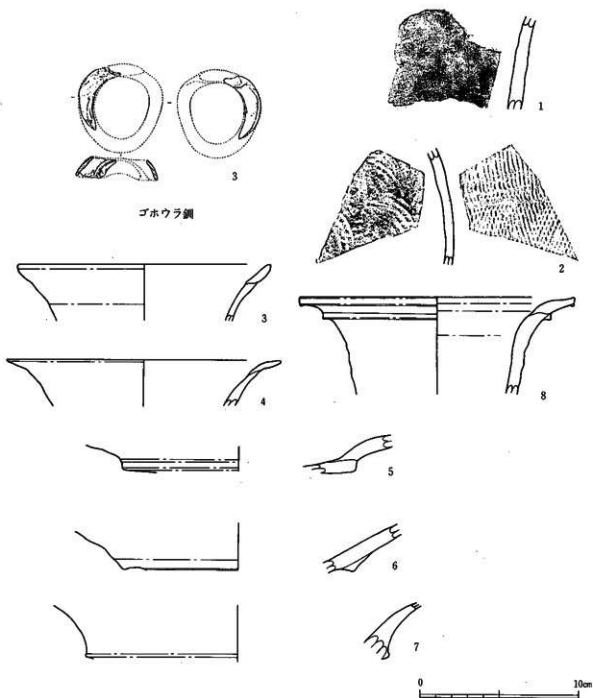


図15 八丁館塚1号墳出土遺物

段架の可能性を強く認め、墳裾が壁状に積まれていた可能性を強く指摘しておきたい。

Nトレンチについては、遺物の出土はなく遺構も確認できず、築造当時の積石ではなく耕作による石積みであると確認した。

1号墳の築造年代は、出土土師器から4世紀後半(末)とした。

出土遺物 (図15・写真図版15)

T・H・Y・Iトレンチでは遺物は確認できなかった。

J・K・L・Mの各トレンチでは、少量であるが須恵器片、土師器片の出土は認められるが極めて少ない。ゴホウラ剣1点が1号墳北側の平坦部(昭和前期に畑地として造られたもの)より出土したが、表土下15cm礫積み直上からの出土であり、1号墳所産の遺物と考えられるが原位置を保っているとは考えられない。

図15の1は、須恵器壺底部片である。2は内外面にたたき目を残す須恵器片である。3は口径16.2cmを

測り、4は口径17.3cmを測る。いずれも土師器壺形土器口縁部片である。5～7は二重口縁をもつ壺形土器片である。8は口径17.3cmを測る、長頸壺の口縁部片である。3・4はMトレンチ出土。5・6はJトレンチ出土。7はKトレンチ出土である。1・2・8は1号墳南側トレンチ付近での表面採集資料である。

## 2 2号墳の調査

### 手法

基本的な考え方は1号墳と同様であるが、1号墳に延びる石積みの性格把握についてはより綿密なものとし、1号墳同様県指定史跡の範囲内については、墳丘への調査は基本的に行わないものとしたが、墳丘構造把握のためCトレンチの延長線上に1mのみトレンチを設定し、墳丘構造を確認した。

2号墳の西側黏土側を主に調査し、次いで1号墳に延びる石積みについてその性格を確認すべく調査した。

2号墳の西側については、当初A・B・C・Sトレンチを設定し調査を行ったが、敷石帯状の配石や段丘崖に向かう平坦面から、小礫により構成されるブロック状の広がり把握するため、各トレンチに拡張区を設け2号墳の周溝の有無や築造当時の墳丘裾である最下層の配石状況について確認した。

また、調査前の検討会において最も重要な課題として、2号墳から1号墳に延びる石積みについて、O・Pトレンチでその広がり及2号墳との関係を明らかにし、さらにE・U・W・G・Xトレンチでその広



図16 八丁館塚2号墳 墳丘実測図

がりと性格を確認することとした。ここにおいても果史跡の範囲内については調査対象外とした。

詳細

本調査によって、2号墳の直径は25.5m、高さ3.5mと確認した。

①2号墳西側（段丘崖に向かう平坦地、A・B・C・S・V・Xトレンチ）

〇トレンチによって墳裾の配石状況を観察すると、1mから2mの幅でいくつかのブロックに分けることができる。これは築造当時においてその作業をいくつかのブロックに分けて行ったものであり、作業者

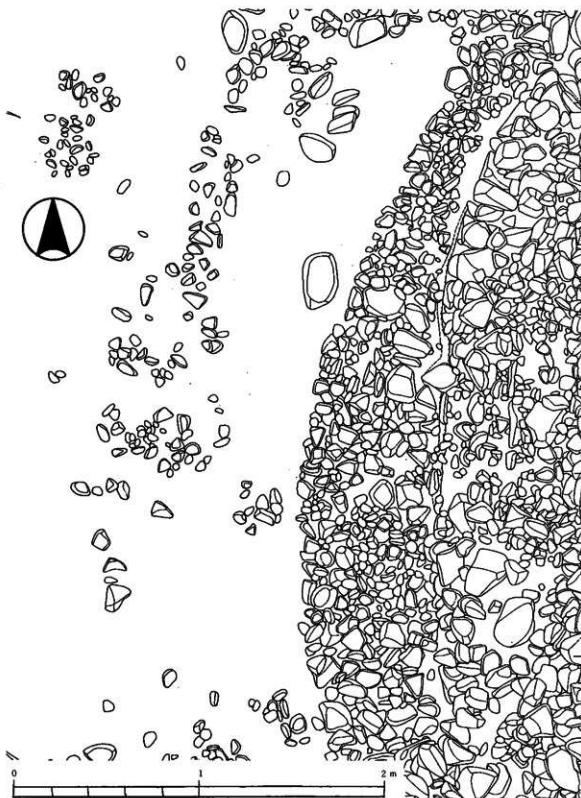


図17 2号墳西 〇トレンチ墳裾最下層配石平面図

の違いなのかあるいは築造時の微妙な時間差なのかは明らかでないが、配石中の礫の大きさや配石方法から、作業者の違いではないかと考える。この配石が、礫の面を揃え平坦な面を造りだしている点を見ると、現在の墳丘が後世の積みなおしによってかなり形状が変わっているにせよ、礫の積み方は一見して乱雑に見える。しかし墳丘の基礎部分では平坦面を造るなど、計画的、土木的な点で考慮されていることが推測できる。この点は後述する墳丘内トレンチにおいても同様の点が指摘できる。

この敷石の中で注目すべきは、墳丘が人頭大の円礫で構成されているのに対し、基礎工である最下層の敷石では、人頭大の円礫ではなくむしろそれよりかなり小さく、また大きさにこだわらない石材の選択をしている点である。このことは最下層においては墳丘構築のために平坦面を造ることに重視したものと考えられる。

各トレンチから段丘崖に向かい、トレンチ内に小角礫で構成されたいくつかのブロックが確認できた。墓前祭などの可能性も考慮したが、1号の西側トレンチでも配石とは全く考えられない小礫のブロックが見つかり、段丘崖での観察また墳丘本体を構成する石は人頭大の円礫であること、また遺物を全く伴わないことから、遺構として認めることはできない。

周溝については、段丘崖のぎりぎりまでトレンチにより調査したが、全くその形跡は認められず、1号墳同様周溝はないものと判断した。

墳裾の配石が途切れているのは、配石が現地表面から15cmと浅く、耕作等によって配石礫が抜かれたものと考えられる。

2号墳の築造年代は、張出部も含め5世紀後半とした。

#### ②2号墳から1号墳に延びる石積み(2号墳張出部、O・Pトレンチ)

調査前においてもまた調査中でも最も疑問の多かった部分であり、困難を究めた部分である。Pトレンチの調査によって、トレンチの覆土観察断面から板石が検出され、全く手測していなかった石棺を確認することになった。この石棺は、幅50cm、長さ2.2mを計り、方位はN-64°-Eを計る。

頭位は南西側、川原石を敷いた側と考えられ、南東側は石材が抜かれている。蓋石は確認できなかったが、石棺の石材と同様の石材で造られた板石が石棺北側に検出されており、蓋石の可能性も考えられる。また、石棺上部の石積み(後世の積みなおし)から、鉄弁1点が、石積みを取り除く際に出土している(図18)。

この石棺に伴うかどうかは、出土状況から判断することはできない。

なお、石棺中の土壌は全て持ち帰ったが、覆土が少なく、耕作による攪乱が深刻であるため、化学分析は断念し水洗、ふるいかけしたが、遺物は全く検出されなかった。

石棺の検出は、結果としてそれを囲む礫の配石状況にも注意を払うことになった。

しかし、西側では高低差があり耕作による積み替えが著しく、Xトレンチによる精査によっても築造当時を推測する事さえできなかった。しかし、前述の2号墳の

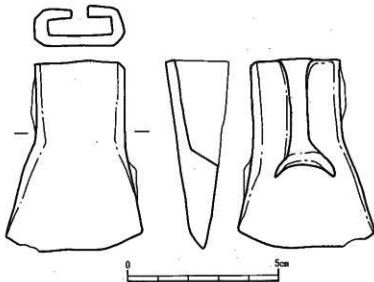


図18 出土鉄弁実測図

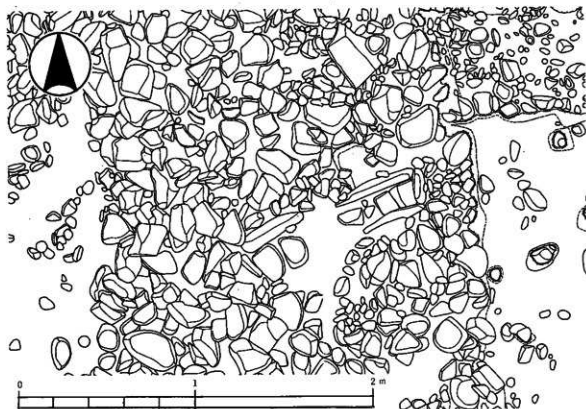


図19 組合式石棺実測図

〇トレンチ配石平面の最も張出部側、東側の敷石部分は張出部の最下層となる可能性を指摘しておきたい。また、東側でも耕作による攪乱があり張出部の東辺の確認はできなかった。しかし、礫の配石状況、2号墳との石積み関係から、2号墳の張出部として考え、築造時における工程上の時間差は認められるが、2号墳とほぼ同時期のものと判断した。

#### ③2号墳東側の調査（P・Qトレンチ）

石棺の検出とともにPトレンチを拡張し、Qトレンチで周溝確認と1号墳との関係について調査したが、Pトレンチ拡張区においては墳丘裾最下層、基礎部分を確認し、Qトレンチでは周溝の無いことを確認した。

Pトレンチ拡張区において、地山確認と西側との高低差確認のためサブトレンチ1本を墳裾部分に入れ調査した。

#### ④墳丘トレンチの調査（Cトレンチ延長）

墳丘トレンチは、墳裾の敷石状況の墳丘内部での様子を中心に、墳丘の段築（テラス）などの墳丘構造を確認するために設定した。

墳丘最下層から1.5mほどから埴輪片が比較的集中して出土した。また、地山の削平なしに石積みが行われていることを確認した。築造前からある傾斜を利用し、墳丘を構築することによって墳丘東側と西側での視覚効果が大きく異なる。古墳の正面を意識した構築方法と言えよう。

#### 出土遺物

2号墳の出土遺物は、埴輪片（円筒埴輪、朝顔形埴輪、器材埴輪、形象埴輪）、土師器片が出土している。

埴輪の大型破片は、そのほとんどが墳丘トレンチからの出土である。

なお、出土遺物は積石塚の物理的な要因や、耕作等を視野に入れ、全て何らかの要因で移動した可能性を考慮すべきである。

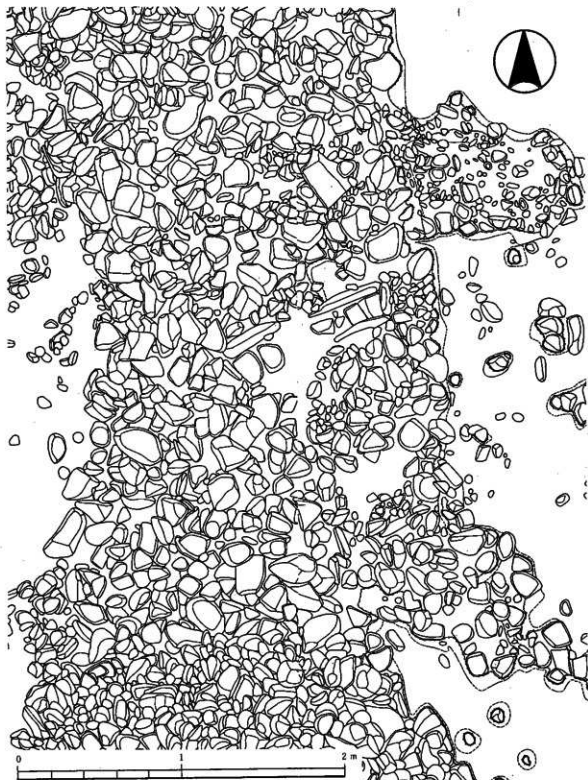


図20 張出部平面図

A・B・C・O・P・Rトレンチ出土遺物 (図22写真図版15・16・17・18)

1～4は、Aトレンチ出土遺物である。1は須恵器高杯頸部片、2は土師器高杯口縁部片である。2は内外面ともヘラミガキが施されている。3は円筒埴輪底部片であり、内面はヘラによる粗い整形、外面にはタテハケ整形が施されているが、いずれも粗雑であり底部には粘土貼り付けによる成形を明瞭に観察することができる。

5～11は、Bトレンチ出土遺物である。5は須恵器壺口縁部片である。6～8は円筒埴輪片。6・7は円筒埴輪口縁部片である。9～11は形象埴輪片であり、9には朱彩が認められる。10-11は家形埴輪片で、

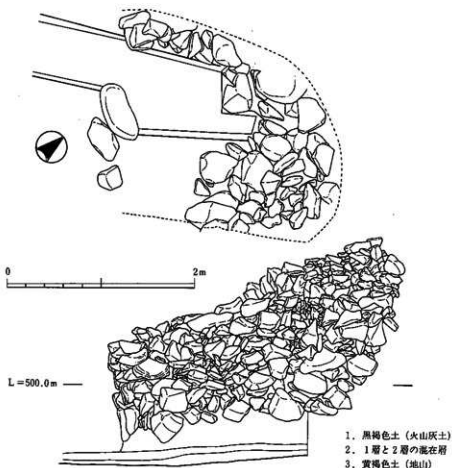


図21 墳丘トレンチ見通し図およびトレンチ平面図

11の格子目状の痕跡は、部材接合に係わるものと考えられる。

12・13は、Cトレンチ出土遺物である。12は円筒埴輪底部片である。外面にヨコハケが認められ、内面はヘラにより粗い整形が施されている。成形は粗く、粘土の接合状況を明瞭に観察できる。13は形象埴輪片である、外面には朱彩が施されている。

14～18は、Oトレンチ出土遺物である。14は埴輪口縁部片である。15～18は円筒埴輪片である。19～25は、Pトレンチ出土遺物である。19は朝顔形埴輪片で、一見アナガマ焼成と思わせるが後世の2次焼成の可能性が高い。円形の透孔の一部を観察することができる。内面にはユビナデ、外面はミガキが施されている。20は円形の透孔を観察することができる。19と同様に2次焼成を受けている。外面はヨコハケの後、磨かれている。21は外面にヨコハケを観察できる。朝顔形埴輪であろう。22は外面に朱彩が認められる朝顔形埴輪である。23は円筒埴輪片である。突帯が他に比べ細く、脆弱な印象を受ける。24・25は形象埴輪片である。

26・27は、Rトレンチ2号墳側出土遺物である。26は形象埴輪片。27は須恵器壺片である。

#### 2号墳墳丘裾(敷石帯)出土遺物(図23・24 1～4 写真図版18・19・20)

1・2は円筒埴輪口縁部片である。1は外面にヨコハケ整形の後ミガキを施している。2の内面にはヨコハケが施され、外面ではヨコハケ整形の後ミガキが施されている。3は円筒埴輪片である。突帯は欠損しているが、低く細い突帯が貼り付けられていたと考えられる。風化し内外面とも整形方法は不明であるが、内面は粗くナデ整形のみと考えられる。4・5は朝顔形埴輪片である。4は頸部片で、頸部突帯部での径は21.6cmを測る。5は朝顔形埴輪口縁から頸部に至る破片である。突帯部での径は28.5cmを測る。4・5とも外面に朱彩が認められ、ミガキによる整形が施されている。4においては一部にクテハケによる整形が確認できる。6は円筒埴輪片である。内面はヘラによる粗い整形が施され、外面にはクテハケが施



され突帯が貼り付けられている。7～14は円筒埴輪片である。8・9・11・13・14には円形透孔が認められ、9は外面に朱彩の痕跡がある。8・12・13の突帯は他の埴輪に比べて脆弱な印象を受ける。さらに焼成も所謂“焼きが甘い”印象を受ける。図24 1・4は形象埴輪片である。1は2つに朱彩され塗り分けられており、器材埴輪の可能性も否定できない。4は貼り付けられた突帯が欠損している。2・3は円筒埴輪底部片である。2・3とも底部に棒状工具?の圧痕が認められる。3の底径は20.8cmを測る。

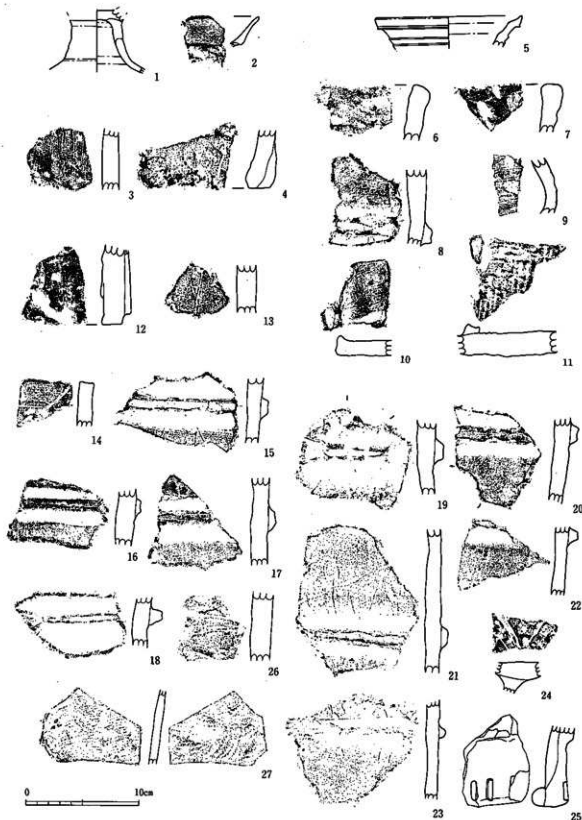


図22 2号墳出土遺物実測図 (A・B・C・O・P・R・Tレンナ出土遺物)

2号墳填丘トレンチ出土遺物 (図24・25・26 写真図版20・21・22・23)

図24の5は須恵器片、6は土師器坏片である。7~10は埴輪口縁部片であり、7・8は外面に朱彩が認められる。9は一見してアナガマ焼成と思わせるが、2次焼成の可能性が高い。

11~13、15~18は朝顔形埴輪片である。これらは内面にヘラ整形を施し、外面は磨いている。14は形象埴輪片である。

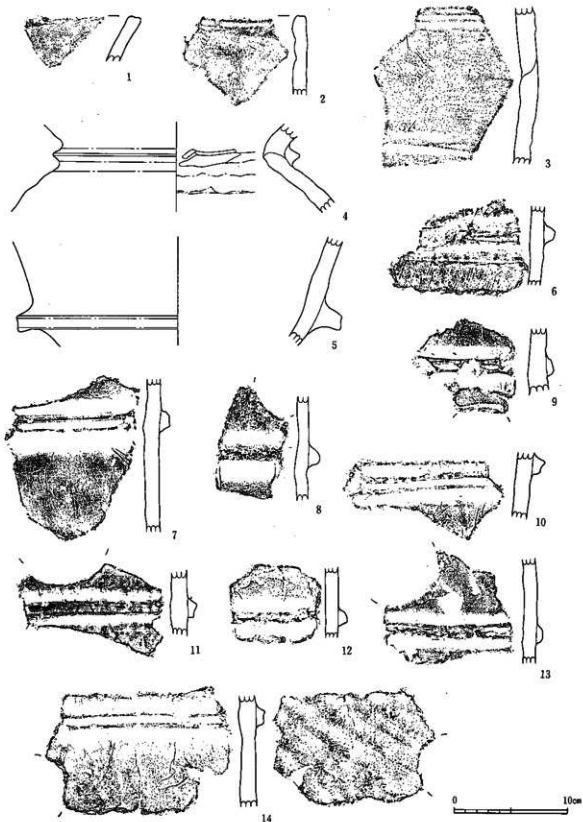


図23 2号墳填丘裾(敷石帯)出土遺物

図25の1は朝顔形埴輪頸部片である。頸部突起部径21.4cmを測る。外面に朱彩が認められる2は朝顔形埴輪片である。3・4は円筒埴輪片、5は朝顔形埴輪片である。外面はヨコハケ整形後ミガキが施され、内面はへら状工具による粗いナデ整形が施されている。輪積みの状況を明瞭に残した成形が行われている。6・7は埴輪底部片である。いずれとも内面はタテ方向の粗いナデ整形が施され、外面は、6はヨコ方向のナデ整形、7はタテ方向のナデ整形が施されている。8～13は形象埴輪片である。8は円筒状を呈する。

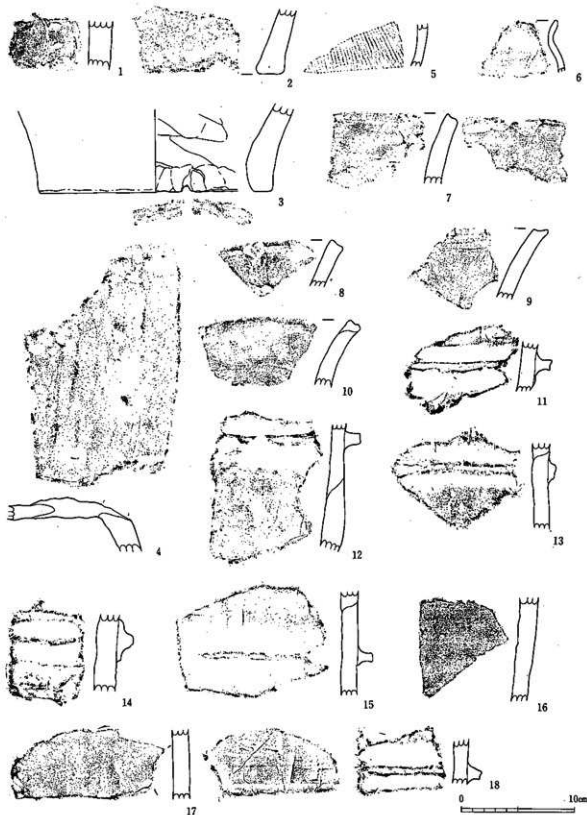


図24 2号墳丘裾出土遺物(1~4)・2号墳丘トレンチ出土遺物

9は四角刺突文を有する部材、10は外面の3分の1を欠損しているが、人物埴輪片であろうか。11は人物埴輪。武人の鎧草摺の部分である。円形の貼付文で表現された鋸で留められた鎧が表現されている。12は円筒形部材である。人物埴輪の部分か。13は家形埴輪片であろう。

図26の1は人物埴輪の腕部分である。2は人物埴輪の手である。2点は胎土等が酷似しているので同一固体の可能性がある。2の人物埴輪の手は、表面が荒れているが衣服か鎧の袖、親指が表現されている。

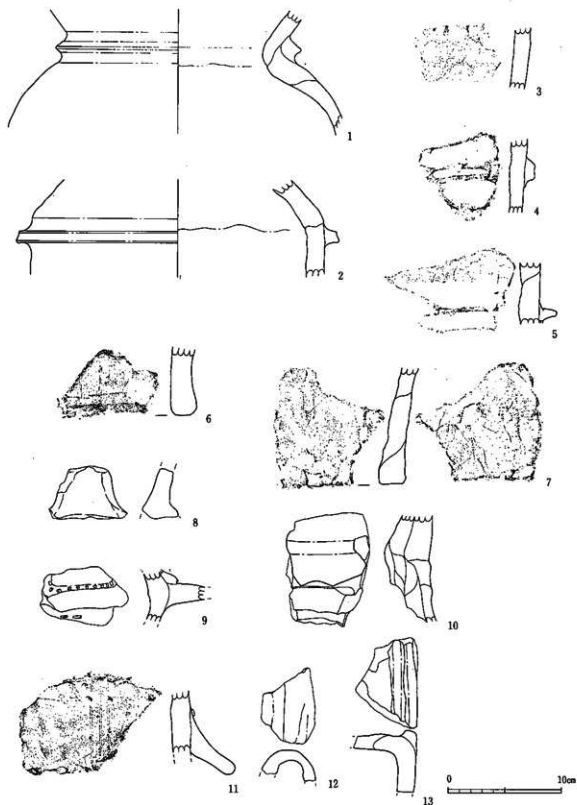


図25 2号墳丘トレンチ出土遺物

3は埴輪馬の尻尾であろう。4・5は蓋形土製品のツمامミ部分である。6は家形埴輪の部材と考えられる。  
7は器材埴輪片の可能性もあろう。

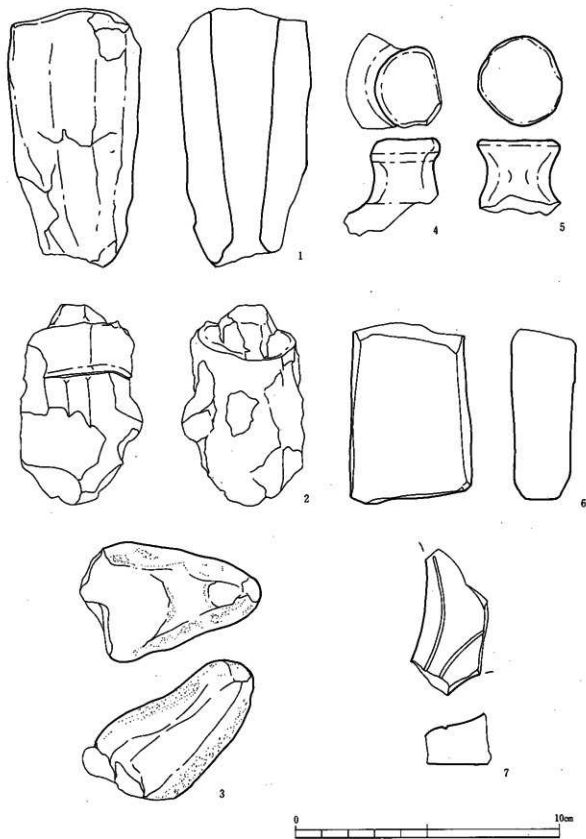


図26 2号埴輪丘トレンチ出土遺物

### 3 6号墳の調査

#### 手法

6号墳は、1号墳と2号墳を結ぶ形で積まれていた石積みの性格確認に伴い偶然に発見した。

U・Wの両トレンチを調査する過程で配石を確認し、さらにその墳丘外側にかなり磨滅し、小片化した埴輪片の土師器を確認した。このため各トレンチを拡張し、墳裾の配石状況把握と墳丘内部状況について確認することとした。また、さらにこの墳丘が西側にどう延長するのか、またこの古墳の西側での状況、墳丘全体の大きさについて確認するため、昭和前期に畑地利用のためにつくられた平地を4つに分け調査した。



図27 6号墳平面図

## 詳細

6号墳は直径12.5mの芯部に盛土し、墳丘面に葦石を施した古墳である。

本調査では、石室等埋葬施設は確認できなかったが、伝承として墳丘西側の平坦地を造る際、石棺が見つかり、その石材と思われる板石を用水の橋板に使用するために持ち出したと伝えられている。石室の形態等は全く不明だが、考慮すべき伝承である。

墳丘に葺かれた礫は、1号墳、2号墳の礫と蓋はない。墳丘の墳裾最下層及び2段目付近のみを確認することができた。これは耕作によって墳丘上面が削平されたものであろう。

2号墳とは、その張出部の南側一辺を壊して構築されている。

1号墳との関係は、平坦部D区で確認に努めたが明確な把握はできなかった。しかし、東側での墳裾の配石状況から、1号墳の墳裾を壊すことなく築造されているのではないかと判断した。

6号墳の築造年代は、6世紀中ごろ以降とした。

### 出土遺物 (図28 写真図版24)

磨滅が進み器形の判断および図化できる遺物は極めて少ない。

1は口径18.3cmを測る円筒埴輪片である。2は径23cmを測る円筒埴輪片。3は径21.3cm。4は底径21.5cmを測る円筒埴輪底部片である。5は円筒埴輪片で円形の透孔を確認できる。6は円筒埴輪片。7は口径12.9cmを測る坏片である。内面には粗いナデ整形が施されるが、内外面とも風化、磨滅が進み細かな整形技法は不明であるが、内面にヨコハケ整形をかろうじ認めることができる。8から12は6号墳の出土埴輪中突帯部に特徴のあるものである。特に8・9は6号墳の裾にめぐらされた埴輪片中突帯が大きく、他の埴輪が風化していることを考慮しても特異である。9は円形の透孔を確認することができる。10~12は風化が進んでおり、突帯の形状が明瞭ではないが、円筒埴輪のそれとは異なった形状を呈している。

全体に劣化し器面が粉化しているため、整形技法を観察することはできない。

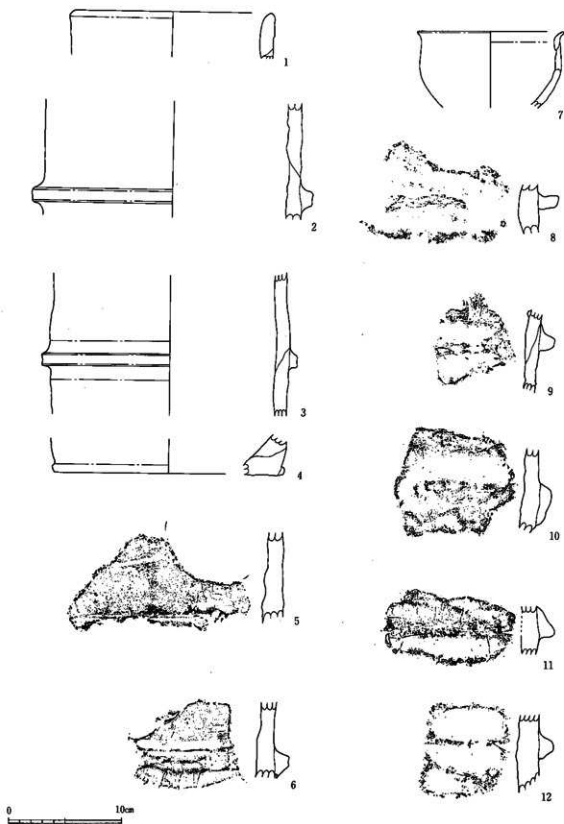


图28 6号填出土遗物



### 第3節 検出遺構の検討

須坂市遺跡詳細分布調査によれば、八丁鎧塚は5基の古墳群で構成されている。本調査において新たに6号墳が発見されたことで、詳細分布調査の手法によれば、全部で6基の古墳が認められることになる。しかしこれらの古墳を群としてとらえ、歴史的な普遍性を考えるには3・4・5号墳についての情報が少なく、現況で古墳を外観すると今後その情報が多く得られるかどうかとも明らかではなく、3・4・5号墳については、八丁鎧塚古墳群としてとらえることについては古墳の立地状況等についてはその普遍性を認めるが、群としてとらえるのには一定の距離をおいて見たい。

本項では、八丁鎧塚を今回調査対象とした検出した、1号墳・2号墳・6号墳について検討することとする。

本調査はあくまで範囲確認調査の域をでないが、墳丘の大きさが1号墳、2号墳ともほぼ同一であること、純然たる石積みで構築された積石塚であることを再度確認することができ、さらに地輪の樹立方法についても成果を得ることができた。

1号墳、2号墳とも石のみで構築された「積石塚」である。戦前、戦後を経て現在も「積石塚」とはという定義については、一定の結論を見ていないのが現状である。しかし土石混合墳や葦石といった古墳は別として、八丁鎧塚は河原石を積んだ「積石塚」として、異論を押し余地は全くない典型的かつ、代表的積石塚である。

墳丘構築方法は、原地形をほぼそのまま利用し川原石の平坦面を最下層に造り、その上に人頭大の川原石を積んでいる。初期段階で墳裾についてのみ平坦面を地山の削平を伴い構築し、そこに敷石を施している。それらは幅1.2mでそこから墳丘内部については、傾斜地を削平することなく一定の大きさの礫を敷き、さらに上部に礫を積んでいる。その積み方は規則性を持たないが、石材は人頭大の円礫を用いている。この石材は段丘崖下の鮎川から採取したと考えられる(図29)。

墳丘構築にあたり、自然傾斜を利用していることから墳丘構築の省力化や正面意識をうかがうことができる。

さらに少なくとも1段のテラスを持ち、2段目のテラスの存在を墳丘実測図から読み取れことも考慮すべきであろう。

墳形は明らかに円墳を基本とし、本調査では全くその存在を知る資料はないが、伝承等を考慮すると、墳丘裾に至っては石垣状の構築を考慮すべきかもしれない。

墳裾については現状ではなだらかな形状であるが、1号墳・2号墳とも壁状に積み上げられた高知石清尾山古墳4号墳に見られる石垣状の形態を持つ可能性を指摘しておきたい。

2号墳墳丘トレンチにおいて、地輪の出土量が地山上約90cm～1mから多く出土している点を考慮すれば、テラス部に地輪が配置されていたことが推定できる。

ただし、基本形態が全く同じであっても、2号墳の墳丘構築方法には大きな差が認められる。

これは、張出部の構築である。5世紀後半の積石塚としては全国的にも例がない。

2号墳南側に設けられた張出部は、耕作等によって構築当時から大きく変形しその全容を把握できないが、1号墳にむかって造られた張出部には石櫓が設けられ、2号墳主体部の状況を図ることのできない今

日にあっては、昭和32年の発掘調査で指摘されている、組み合わせ箱式石棺の存在を側面的に裏付けるものと言えるかもしれない。

しかし、主体部と墳丘周辺の埋葬形態が異なることは、多くの古墳で見られることであり、張出部での箱式石棺の存在を持って主体部のそれとする事はできない。

昭和32年の発掘調査報告を検討すると、1・2号墳のほぼ中央に調査を行っている。これによって多くの遺物が出土したが、主体部については盗掘による破壊等から、全く確認することはできなかったとされている。しかしこの調査において、大室古墳群における合掌式石室の可能性が想定され、報告においては組み合わせ箱式石棺の可能性が強く指摘されている。さらに、木棺の使用については否定的な見解が成されている。

しかし、昭和32年の報告にも述べられているが、板材を全く検出することが無かったと指摘されている点は注意しておきたい。埋葬施設に板材を使用しているとするれば、全くその痕跡が見られない点には疑問が多く残る。石材の搬出や借りの民話なども板材を使った埋葬施設を想像させる。しかし八丁鎧塚の周辺には、横穴式石室を持つ古墳が現在でも10基程度は確認することができ、鎧塚に比べ小さく、伝承が伝わる内に塚の代表的存在が八丁鎧塚であり、他の古墳(塚)からの出土品や情報についても、八丁鎧塚のものとして誤認され伝えられている可能性も考慮すべきである。

石積みという構築方法では、横穴式石室でなければ物理的に墳丘下部に石室を築くことは大きな板石を使った、大室古墳群に見られるような埋葬施設を築かない限り不可能である。八丁鎧塚においては板石の使用が確認できておらず、また墳丘下部でも石室や石材が確認されていないことを考慮すれば、石室等の埋葬施設は墳頂から比較的浅い場所に造られていた可能性が高い、この点は昭和32年の報告でも指摘されている。

したがって後世に板石を運び出すことは容易であったとしても、板状石材が全く確認できないまま木棺の可能性を否定することはできない。むしろ木棺による埋葬施設の可能性は捨てることはできない。2号墳張出部の箱式石棺の存在を考慮しても、1号墳はもとより、2号墳における埋葬施設のあり方として、木棺を中心とする埋葬施設の可能性は強く指摘しておきたい。

6号墳については、土地所有者の記憶が昭和に入ってからのものであることから、石材として板石を用いた埋葬施設を推定したい。またその石室形態については推定の域を出ることはできないが、葦石墳であることから横穴式石室あるいは竪穴系横穴式石室に準じた形態を推測したい。

埴輪の樹立方法については、墳丘を構築している人頭大の川原石を使用していたと考える。土によって構築された古墳では、掘りくぼめることで安定した埴輪の樹立を得ることができるが、石積みによる場合、掘りくぼめることは不可能であり、埴輪の樹立はテラスのような平坦面を得た上で、そこに石を用い安定させることになる。しかし、土の場合よりはるかに不安定であるため、補う方法として埴輪内部に石を詰める方法が考えられる。ただしこの方法は円筒埴輪などの筒状の埴輪には極めて有効な方法であるが、器材埴輪や形象埴輪には安定という点では器材・形象と言った埴輪が筒形の台座を持っていたと仮定しても、それほど有効な方法とは言えない(図30)。

木製用具等を考慮しても、積石塚状に立てられた埴輪はかなり不安定な様子だったと考えられる。

本調査で、埴輪の底部が築造当時を推定できるような状態で出土したものはなく、あくまで推定の域を出るものではない。しかし積石塚における埴輪の樹立は盛土墳の場合の安定した状態とは異なり、言わば「単に置かれている」と言った状態に極めて近いのではないかと考える。

墳丘構造、地輪の樹立方法について述べたが、八丁鎧塚の場合、昭和32年の調査によって「銅鍔文の帯金具」が出土したことにより、その文化的属性について注目されてきた。

このことについては、後に記される各先生方の論文によられたいが、須坂市域という範囲に限って、八丁鎧塚の特徴を立地、構造、墳形から考えたい。

八丁鎧塚は前述したように、鮎川流域に位置する古墳であり、この鎧塚と時間的な同時性を持つ古墳が、鮎川の下流域にある「米持天神1号墳」である。この古墳は立地、時間から極めて鎧塚と関係が深いと考えられることができる。

米持天神1号墳は、墳丘一辺約30mの周溝を持つ2段構築の方墳であり、上部に円墳が乗せられた上円下方墳とも言われている。上円下方墳については再考の余地があるが、方墳であること葦石工法によって築かれた古墳であることは明らかである。

現在その時間的位置づけは、5世紀中頃とされ、八丁鎧塚1号墳と2号墳のはば中間の時間に位置づけられている。

また、地理的には鮎川の扇状地内の最下流域にあたり、鎧塚が上流域にあたるのに対し場所位置している。

八丁鎧塚1・2号墳を、1つの集団あるいは関係深い集団と仮定すれば、米持天神1号墳は墳丘の構築技術や、立地という点で明らかに異なっている。同時期に八丁鎧塚に近い集団が、全く別の技術や場所で埋葬施設を造るのとは考えにくく、自然に文化や習慣の違いを考えることになる。米持天神1号墳の位置づけは、1号墳、2号墳、6号墳の時間的、形態的変遷を文化的属性の変化に置き換える1つの鍵となるのではないだろうか。

立地から見ると、八丁鎧塚に対し米持天神1号墳は水田を育てていたであろう千曲川氾濫原の低湿地近くに位置している。対して八丁鎧塚周辺は扇状地の扇頂付近に位置し、水田としての耕地は築造当時も少なかったと考えられる。食料の確保という点で、その立地に大きな差が認められる。

これを文化的な差と短絡的に考えることはできないが、同じ水系、扇状地の扇頂という点での共通点から、古墳の築造方法の違いは極めて注目すべきであろう。

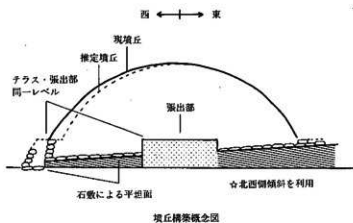


図29 墳丘構築概念図

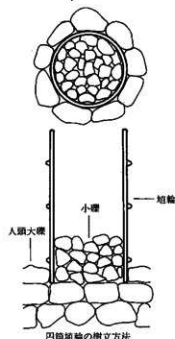


図30 円筒地輪の樹立方法 (推定)

従来論ぜられてきた、純然たる石積み墳が大陸の要素の強いものとすれば、それとは対峙した位置づけが米持天神1号墳には与えられるであろう。

しかし積石塚とは、の問いに対して明確な回答を持たない現在、外観して石積みと見られる古墳を積石塚から除外してしまうことには多くの方から疑義を生じるであろう。

昭和43年の日本考古学協会長野大会において、森浩一氏が指摘されている点も考慮しなければならない。ただ正確にあたったわけではないが、葦石墳を積石塚の範疇に入れた場合、東日本において積石塚はいくつあるのか。膨大な数を数えることになるであろう。

この点から、まず原点の「石積みによる築造」に帰り、時間的な分析を行う必要がある。

この場合、まずA墳丘を持つもの、B墳丘を持たないものの2つに分け、さらに①石積みのみで造られたもの、②葦石によって造られたもの、③石と土とが混在するものの3つに大別すべきであり、さらに詳細に検討する必要があるであろう。

平成11年1月31日開催された、山梨県考古学会主催のシンポジウム「東国の積石塚古墳」における飯島哲也氏の分類は一つの成果であり、今後の研究の起点となるべきものである。

八丁鐘塚における、文化的属性については時間的な検討を詳細に加え、さらに北信濃の弥生時代後期の遺跡や北陸、日本海側との関わり、大和との関わりを視点に入れ、単に須坂という狭い範囲で考えるべきではないし、また八丁鐘塚はそのような存在のものでもないであろう。

## 第4章 出土資料の分析

### 第1節 長野県須坂市の八丁鎧塚2号墳から出土した

#### 帯金具の自然科学的研究

平尾 良光

榎本 淳子

小林 直子

#### 1 はじめに

長野県須坂市教育委員会の小林孝老氏から、同市八丁鎧塚2号墳から出土した獣面付金銅製帯金具3点について、自然科学的な調査の依頼があった。本調査は当研究室における「弥生時代・古墳時代青銅器の研究」の一環として、研究協力する価値があったので、資料の材料に関して化学組成の測定、および産地の推定を行った。

#### 2 資料

資料は写真1で示されるように3点あった。それらは類似した正方形で、一辺の長さが3~4cm角で、厚さが約2mmの金属板である。そして凸面状に丸い膨らみがついており、獣面が浮き彫りにされている。獣面は獅子増文である。表面は銀色に光った部分で覆われているが、錆もかなり吹き出ている。類似資料は奈良県真弓獅子塚古墳や韓国の宋山里2号墳でも出土しているという。資料の3点は図1で示されるように当研究室で便宜上、A・B・Cと区別した。

資料が出土した古墳は5世紀末葉に築造された横石塚であり、このような古墳の形式はわりあい珍しい形式と言われる。盗掘を受けてはいるが、共存遺物は鈴付杏葉・髷・鉄鏝・鉄刀・埴甲小札模鉄片・ガラス小玉が出土している(\*1)。

資料の化学組成の測定は3点のうち2点について、獣面部分および裏の平滑な鍍金部分で行った。

鉛同位体比測定用の試料は資料3点の裏面部分の錆をこそげおとすように全体的な部分から採取した。

#### 3 調査法

本調査においては資料の化学組成の測定には非破壊で測定できる蛍光X線分析法(\*2)を利用した。また、金属の錆の状態あるいは鍛造・鍛造の状態を見るためにX線による透過写真を撮影した。産地推定には鉛同位体比法(\*3, 4, 5)を利用した。

##### 3-1) X線透過写真

資料の材質、構造を理解する上で、X線透過写真の撮影は有効な方法である。錆の進行程度、資料の構造を把握する上で重要であるため、専用の機器が販売されている位である。使用機器は東京国立博物館所蔵のソフテックスで、この資料に関しては90kV、5mAを照射した。利用したフィルムは富士フィルムのフジ工業用X線フィルム1×100で、現像は自動現像機を利用した。

##### 3-2) 化学組成の測定法

資料の化学組成は材質を判断する上でもっとも基礎的な要素である。例えばそれが金でできているのか、

真鍮（銅-亜鉛合金）なのか、あるいは有機物なのかによって、資料の歴史的価値や意義、修理方針、保存方法等が異なる、また青銅（銅-スズ合金）と称する一群は金属として古代においてよく利用されたが、そのスズと銅の量比の違いによって利用する場合の性質は著しく異なる。それ故、化学組成を明らかにすることは文化財を自然科学的に取り扱う第一歩である。

化学組成を測定する方法として、資料の一部を採取でき、消費してもよい場合には、ICP分析法（\*6）、原子吸光分析法、放射化分析法（\*7）などがある。また資料を採取できない場合には、X線を照射するだけで測定できる蛍光X線分析法（\*2）がある。化学組成を結晶化学的に調査する場合にはX線回折分析が有効である。

### 3-2-1] 化学組成の測定

本調査において化学組成の測定には非破壊で分析できる蛍光X線分析法を用いた（\*2）。蛍光X線分析法による化学組成の測定はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSで行われた。本機器の資料測定室は間口80cm、奥行60cm、高さ60cmあり、かなり大きな文化財資料でもそのまま測定できるよう設計されている。

機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV、50mAで一次X線を発生させて、資料に照射した。資料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でX線を角度毎に分散させ、シンチレーションカウンターおよびガスフローカウンターで分散角度におけるX線強度を測定した。

### 3-3] 産地推定

#### 3-3-1] 鉛同位体比法による産地推定の原理

材料の産地を推定するために鉛同位体比法を利用した（\*3、4、5）。一般的に、鉛の同位体はウランとトリウムから天然の放射壊変で生成されるので、鉛が岩石中でウラン・トリウムと一緒に存在していれば、鉛の同位体比は岩石の年齢、および岩石中のウラン・トリウムと鉛の濃度比によって異なった値となることが知られている。ある時岩石から鉛が絞り出され、鉛鉱山が形成されたとする、その鉛鉱山は岩石が持っていた同位体比のまま鉛鉱山を形作る。鉛鉱山を形成する岩体が違えば、それぞれの鉛鉱山毎に異なった鉛同位体比を持つこととなる。それ故、鉛は産地によってそれぞれ異なった値となることが期待される。例えば、古い年代を示す大陸地殻である中国本土と、大陸の周辺部の朝鮮半島と、大陸から離れ、わりあいに新しく形成された島嶼地域の日本とは異なった鉛同位体比を示す。そこで、鉛の生産地の違いが同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の生産地を示すと推定される。

古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれているので、鉛同位体比測定をほぼすべての青銅製品に應用できる。

鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また資料は青銅の金属部分でも錆部分でも、同位体比は変わらないと示されているので、資料からは錆を微量採取するだけで十分である。これはほとんど非破壊といて差し支えない。そこでこの方法を本資料の原料産地の推定に利用することを試みた。資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した（\*8）。

#### 3-3-2] 鉛同位体比の測定

資料から微量（1mg以下）の錆を採取して、鉛の同位体比を測定する試料とした。錆試料を石英製のピッカーに入れ、硝酸を加えて加熱、溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流電圧2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、この溶液の鉛濃度を測定し

た。0.4 $\mu$ mの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

#### 4 測定結果

##### 4-1) X線透過写真

透過写真を写真5~7で示した。これによるとB、A、Cの順に厚さが変わっているように見受けられる。これが本当だとすれば、それぞれの金具はかなりバラバラな厚さの材料を利用している。それ故、材料は同一ではない可能性がある。

しかし、X線透過写真を撮影するときX線の中心からずれて資料が置かれていたとすれば、X線強度の変化とも見られるので、前述の厚さのことは全く言えないこととなる。この点もう一度注意深く、透過写真を撮る必要がある。

厚さの問題以外とすると、組で留めるための穴があり、また円形彫りみの周囲に模様が描かれている。また、保存、修復上問題となるようなクラックや錆による特別な浸食を受けているようには見えない。

##### 4-2) 化学組成

##### 4-2-1] 蛍光X線測定の結果

表面に錆が少なく、鍍金が残っている部分として、C資料の嵌面部分と、A資料の裏面の留金具周辺(写真2)を測定した。測定面の拡大図を写真3、4で示した。

蛍光X線分析法では、測定部表面から約10マイクロメートルまでの深さの化学元素組成に関する情報を得られる。それ故、表面に錆などがあれば錆の化学組成に大きく影響を受け、測定された化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。本資料は錆の影響がかなり強いと判断されたので、定性的な結果を次にまとめた。

測定された蛍光X線スペクトル図を帯金具Cに関して図1a、b、帯金具Aに関して図2a、bで示した。図の横軸は資料から発生したX線の分散された角度である。X線は元素毎に異なった角度に分散されるので、特定の波長は特定の元素を意味する。縦軸はX線の強度、即ち元素の量である。図のaは全体の様子であり、図のbは小さなピークを縦に拡大している。すなわち図1aと図1bとは横軸の角度は同じであるが、縦軸は図1aが全幅で4,500カウント/秒であるのを、図1bでは500カウント/秒と約1/10となっており、小さなピークを検出できるようになっている。図2も同様である。

検出された元素は測定した2箇所とも、銅、水銀、銀、金のほか、微量のアンチモン、鉛、鉄である。スズ、ヒ素、亜鉛、ニッケルなどは検出限界以下であった。銅のX線強度を100とした各元素の強度比を表1で示した。

##### 4-2-2] 蛍光X線分析の所見

測定結果から、この帯金具は純銅製品である。不純物として鉛、アンチモン、鉄などを含む。製作方法を鍛造と仮定した場合、純銅のほうが青銅よりも伸展性があるため、叩いて凸面を作るという作業はしやすかったであろう。かなり材料が固くなる青銅であれば、叩いて成形するのは大変な作業である。一方、鍛造であれば、材質が青銅・純銅どちらでも製作可能だが、純銅の方が融点が高い分、作業は大変であったかもしれない。従って、この資料が純銅であることは純銅を叩いて整形した可能性の高いことを示唆する。

鍍金・鍍銀に関して、銀の強度が金に比較してかなり高い。これは銀が意図的に利用されていることを

示唆する。即ち、鍍金・銀がなされていることを示唆する。

この鍍金・銀に関して二つのことが考えられる。一つの考え方として、金と銀を独立に、あるいは金銀合金を水銀に溶解し、塗布した場合である。この場合は水銀を揮散させると、金銀合金が残る。それ故、金と銀の比はほぼそのまま残る。この方法で3つの資料が同時に作られたとすると、3つの資料は厚さが異なっても金と銀の組成比にそれほど大きな違いはでないであろう。もう一つの考え方として、まず鋼表面に鍍金し、さらにその上に鍍銀を施したとする場合である。これは鋼に直接鍍銀することは難しいと考えられるため、表面を銀色とするためにまず鍍金するという方法がとられ、その後鍍銀したと推定されるからである。この場合、資料の場所毎に金と銀の比はかなりバラツクと推定される。どちらの製作法の場合でも、銀と金が40/60(重量比)という値以上に銀が多ければほとんど銀色に発色する事が知られている。この資料の金と銀のX線強度比からだいたい金銀重量比に換算すると、表1-2となる。この表から判断すると、この資料は銀色に輝き、金が含まれていることは表面の色だけからは分らなかったであろう。

この資料がどちらの方法で作られたのかはこのままではわからないが、製作者が最終的には表面の断面模様を銀色にするのが目的であったのかどうか興味あるところである。資料AとCとで金・銀のX線強度比が異なるのは、基本的には鍍金・銀の量あるいは厚さの違いによる影響であるが、製作時からの相違なのか、あるいは資料の劣化に伴う金属の剥離によるものなのかは識別できない。

水銀が一般的な鍍金銀の場合よりも多く残っていることは製作上何らかの意味があったであろう。

鍍金・鍍銀に関しても一つの注目点は、水銀が通常の資料よりも比較的多く残っていることである。通常の水銀鍍金の場合、水銀のX線強度は金の1/10程度であるのに、今回の場合は金の強度と同等あるいはそれ以上とかなり高い。この理由はまだ分らないが、鍍金・鍍銀の方法と密着して考えるべき材料であろう。

#### 4-3) 産地推定

##### 4-3-1] 鉛同位体比測定の結果

3点の帯金具から微量(1mg以下)の鉛を採取して、鉛の同位体比を測定した。測定された鉛同位体比を表3で示した。得られた値を今までに測定された値と比較してみると、図3と4のようになった(\*9, 10, 11, 12)。

図3は縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値である。この図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に現わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち日本の弥生時代における東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域、Dは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示されることが判っている。この図の中に、本測定値を「○」で示した。

これら3点の測定値はB領域に含まれた。そこで、もう一つの鉛同位体比の図を調べた。これを図4で表わした。この図では縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値である。この図をB式図と呼ぶこととする。図4の中で、A'B'C'Dは中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。ここでも帯金具の値は「●」の印で表され、B領域に含まれた。

##### 4-3-2] 材料産地の推定

これらの結果から、本調査資料は古墳時代に中国華南からもたらされた銅を利用していると判断される。



これら3点の資料が同一状況で製作されたとする可能性が高いので、同一の鉛同位体比が得られると予想した。しかし結果として得られた値は必ずしも同一とはならなかった。これは鉛同位体比測定用の試料として表面の錆を用いたことに問題があったかもしれない。今回測定した資料が小さかったため、内部の金属を採取していない。それ故、埋蔵環境にあったときに、外部から鉛が錆に流れ込み、この外部鉛の影響を受けているかもしれない。この点もう少し考慮すべきかもしれない。しかしながら、少々の汚染を受けているにせよ、材料が中国華南産の鉛であることには変わり無く、問題点はない。

測定資料の断面や資料を出土した積石古墳の形式から朝鮮半島の影響を考えやすいが、これら資料が中国産の材料を利用していることをどのように理解するかは今後に残された問題点であると思われる。

(1995年8月26日)

#### 引用文献

- 1 「須坂の古墳文化」：須坂市立博物館常設展示解説
- 2 平尾良光、三浦定俊：法隆寺献納宝物竜首水瓶の科学的調査；MUSEUM No457, 27-34(1989)
- 3 平尾良光：古代日本の青銅器；M. A. C. サイエンス 4, 22-33(1990)
- 4 平尾良光、馬淵久夫：東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査；「都田地区発掘調査報告書（下巻）」／浜松市・浜松市教育委員会・(財)浜松市文化協会編P590-20(1990)
- 5 馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・三輪高六：鳥根県荒神谷遺跡出土銅剣・銅鐔・銅矛の化学的調査—非破壊分析と鉛同位体比測定—；保存科学30, 1-19(1991)
- 6 内田哲男、平尾良光：ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究；保存科学29, 43-50(1990)
- 7 鈴木章吾、平井昭司、平尾良光：機器中性子放射化分析による銅及び青銅器遺物中の多元素定量；考古学と自然科学24, 37-45(1991)
- 8 平尾良光、馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計VG-Sectorの規格化について；保存科学28, 17-24(1989)
- 9 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No370, 4-10(1982a)
- 10 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐔の原料；考古学雑誌 68, 42-62(1982b)
- 11 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；MUSEUM No382, 16-26(1983)
- 12 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の同位体比—青銅器との関連を中心に—；考古学雑誌 73, 199-210(1987)

表1 帯金具の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比\*\*)

角 度**)	アンチモン (13.5)	スズ (14.0)	銀 (16.0)	鉛**) (28.3)	ヒ素**) (34.0)	水銀 (35.9)	金 (37.0)	亜鉛 (41.8)	銅 (45.0)	ニッケル (48.7)	鉄 (57.5)	銅強度 (c P m)
帯金具C 表面(FL379)**)	+	-	44	0.6	-	19	9.3	-	100	-	+	3200
帯金具A 裏面(FL380)**)	+	-	25	0.3	-	16	18	-	100	-	+	3600

\*\*1) 数値は角度45.0度における銅X線強度を100としたときの各元素の強度比

\*\*2) 2θで表わされた各元素の励起X線の位置

\*\*3) 鉛のピークはスズの影響を、ヒ素のピークは鉛の影響を補正した値

\*\*4) FLは当研究室の蛍光X線測定番号

表2 帯金具の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比

角 度**)	銀 (16.0)	水銀 (35.9)	金 (37.0)	X線強度比		推定銀金濃度	
				銀/金	水銀/金	銀%	金%
帯金具C 表面(FL379)	44	19	9.3	4.7	2.0	70	30
帯金具A 裏面(FL380)	25	16	18	1.4	0.9	40	60

表3 測定された帯金具の鉛同位体比

角 度	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$
帯金具A (C P765)	18.188	15.650	38.720	0.8605	2.1289
帯金具B (C P766)	18.141	15.660	38.464	0.8632	2.1290
帯金具C (C P767)	18.207	15.680	38.763	0.8612	2.1290
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

C P番号は当研究室の鉛同位体比測定番号

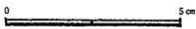
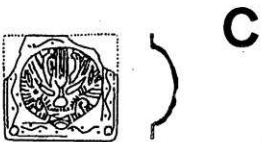
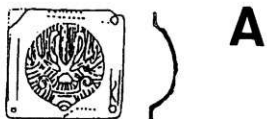


図1 調査した資料（便宜上A・B・Cと区別した）

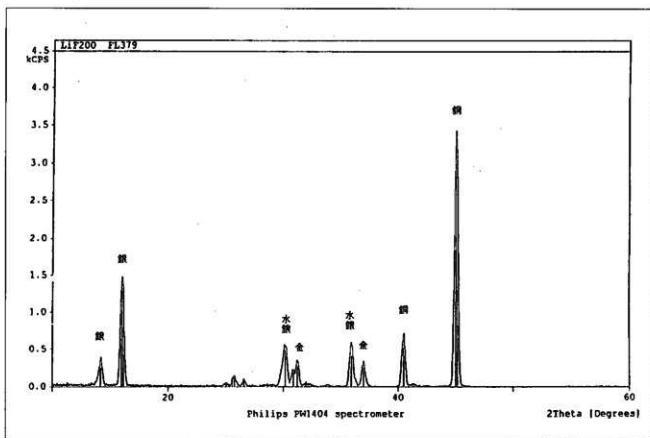


図 2-a 須坂市八丁鍛冶 2 号墳から出土した帯金具 C の表面部分の蛍光 X 線スペクトル図

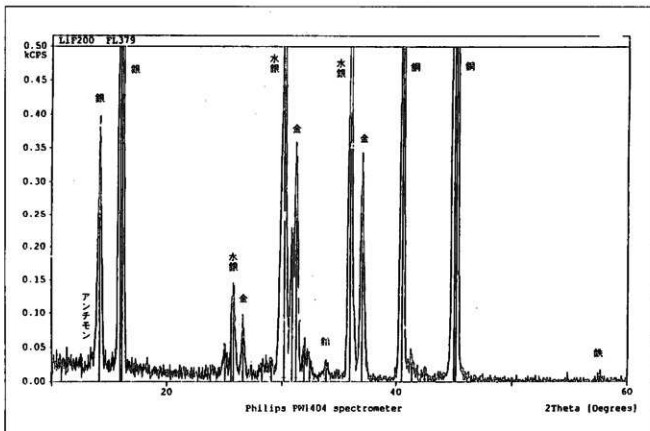


図 2-b 帯金具 C の表面部分の蛍光 X 線スペクトル図の拡大図

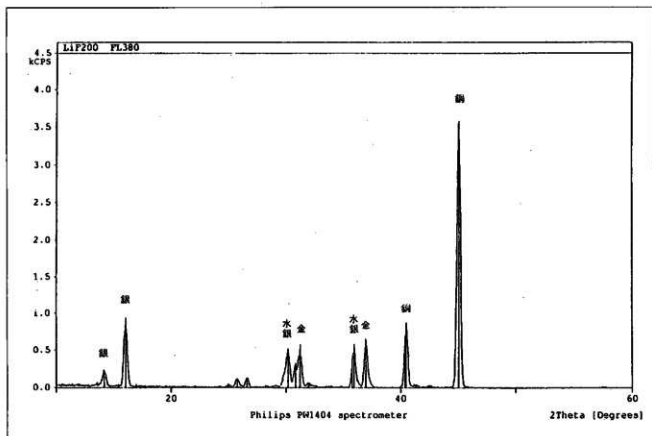


図3-a 須坂市八丁跡塚2号墳から出土した帯金具Aの裏面端部分の蛍光X線スペクトル図

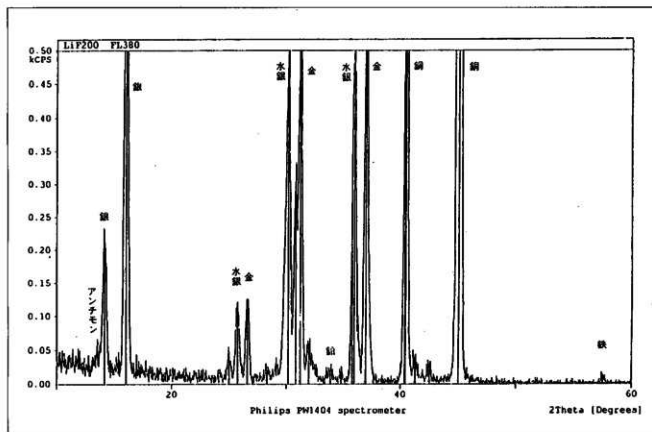


図3-b 帯金具Aの裏面端部分の蛍光X線スペクトル図の拡大図

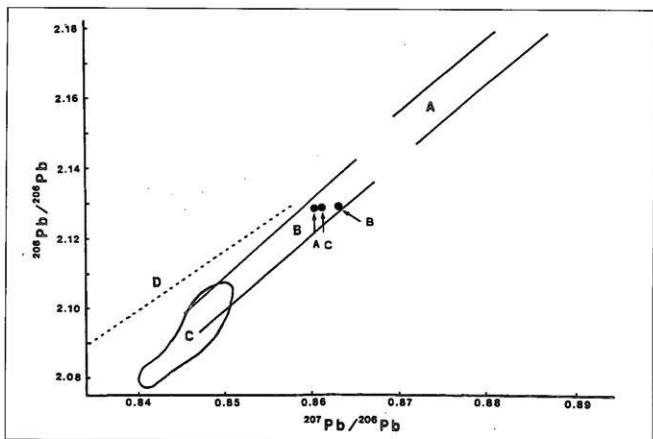


図4 須坂市八丁鑑塚2号墳から出土した帯金具が示す鉛同位体比-A式図-

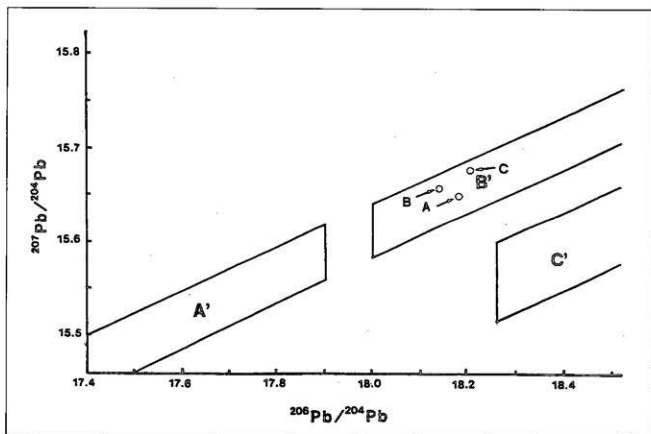


図5 須坂市八丁鑑塚2号墳から出土した帯金具が示す鉛同位体比-B式図-

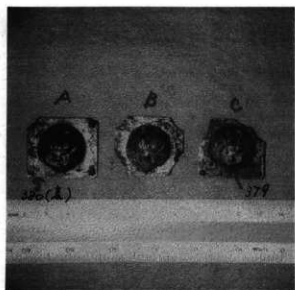


写真1 須坂市八丁館塚2号墳から出土した帯金具  
3点の概観およびC資料に関して蛍光X線分析した  
部分 (測定は図2)

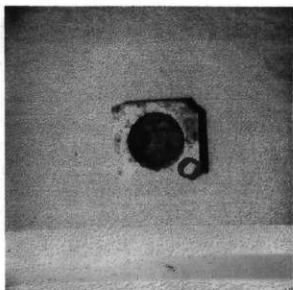


写真2 須坂市八丁館塚2号墳から出土した帯金具  
Aの蛍光X線分析した部分 (測定は図3)



写真3 資料Cの蛍光X線分析した部分の拡大写真



写真4 資料Aの蛍光X線分析した部分の拡大写真

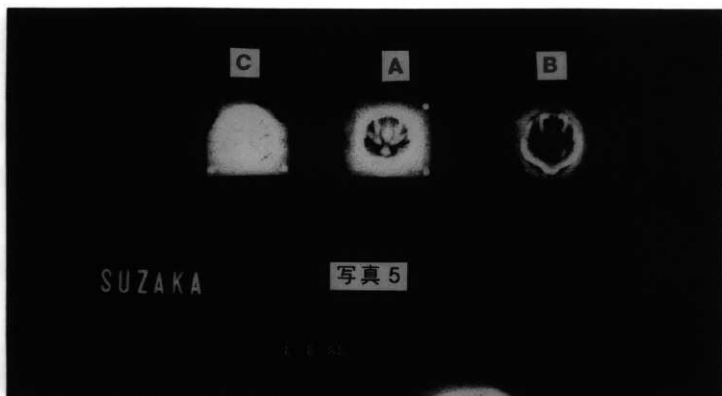


写真5 資料A、B、CのX線透過写真

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

1958

写真6 資料CのX線透過写真

写真7 資料AのX線透過写真



## 第2節 八丁鎧塚1号墳スイズガイ・ゴホウラ釧について

木下 尚子

### 1 はじめに

八丁鎧塚古墳第1号墳に伴う南海産貝釧<sup>1)</sup>は、昭和32年に積石中でみつかった5片と、平成6年に表土下15cmでみつかった1片である。伝えられる出土状況と、石室が盗掘を受けていることから、これらが本来の位置を保っていないことは明らかである。以下、出土資料の観察をもとに、北信濃における南海産貝釧の歴史の意味を述べたい。

### 2 貝釧の観察

出土した貝釧破片は6片で、スイズガイ破片1片、ゴホウラ破片5片である(図1)。このうちゴホウラの2片は互いに接合した。全ての破片の貝質は比較的堅牢であるが、劣化が進み、表面に筋状の亀裂が走る。風化のため、いずれの貝釧の表面も、原状を保っていない。破損面は風化しており、攪乱後の時間経過を示している。

検討の結果、これらはスイズガイ釧1点、ゴホウラ釧3点以上であることを確認した(図1)。図1の4、5は同一個体である可能性が低く、またそのどちらも2、3と接合しない。ゴホウラ釧は、したがって3点または4点であるといえる。以下、個別に説明しよう。

#### (1) スイズガイ釧

大形・厚手のスイズガイ貝殻を素材とし、貝殻背面をおもに使用している(図1-1)。その形状は山梨県鏡子塚例に似るが、鏡子塚例のように螺塔部を環体に含まず、他に類例をみない形である。遺された部分から判断する限り、螺塔部に接する2本の「棘状突起」(図6-2のAとBに相当)は、製作時に貝釧本体から脱落していた可能性が強い。唯一のこる「棘状突起」の先端(図1-1のC)は、一部破損面を留めるが、なめらかに研磨されていたとみられ、「棘状突起」を示そうとする作者の意識を認めることができる。こうした意識のもとで、他の突起も同様に加工されていたとすれば、本貝釧を図示したような形状に復原することが可能である。体層腹面側の内面を取り込んで環体をつなげているため、構造的に弱い貝釧である。

貝釧の背面側と体層内面に、列点文の彫刻を認めることができる。背面側列点文は、径2mmに満たない大きさの窪みから成り、5箇所ある。ほぼ等間隔の彫刻で、全周に巡っていたとみられる。体層内面の列点文は、径4~5mmの浅い窪みから成り、深さは背面側列点文とほぼ同じである。不規則かつ密に、2列に施されている。

本貝釧は、スイズガイを素材とすることから、また突起部の加工状況から、本来突起を強調した形状であったとみていいだろう。加工の初段階に螺塔部と2本の「棘状突起」(図6-2のAとBに相当)が本体から落ちてしまったため、結果的に製品をこの形状にせざるをえなかったのだろう。貝釧は体層内面でかろうじて繋がっている。

#### (2) ゴホウラ釧

図1-4(以下図1略)はゴホウラ背面を用いた貝釧である。表面の保存はきわめて悪い。貝釧の中は最も広い部分で2.9cm、本来よく研磨された入念な作りの貝釧であったとみられる。彫刻等の痕跡は認められない。広田型貝釧<sup>2)</sup>である。3も同様にゴホウラ背面を用いた貝釧である。風化により、表面は原状を留めていない。小型の広田型貝釧である。2・5ともに、ゴホウラ背面を用いた貝釧の一部である。本来入念

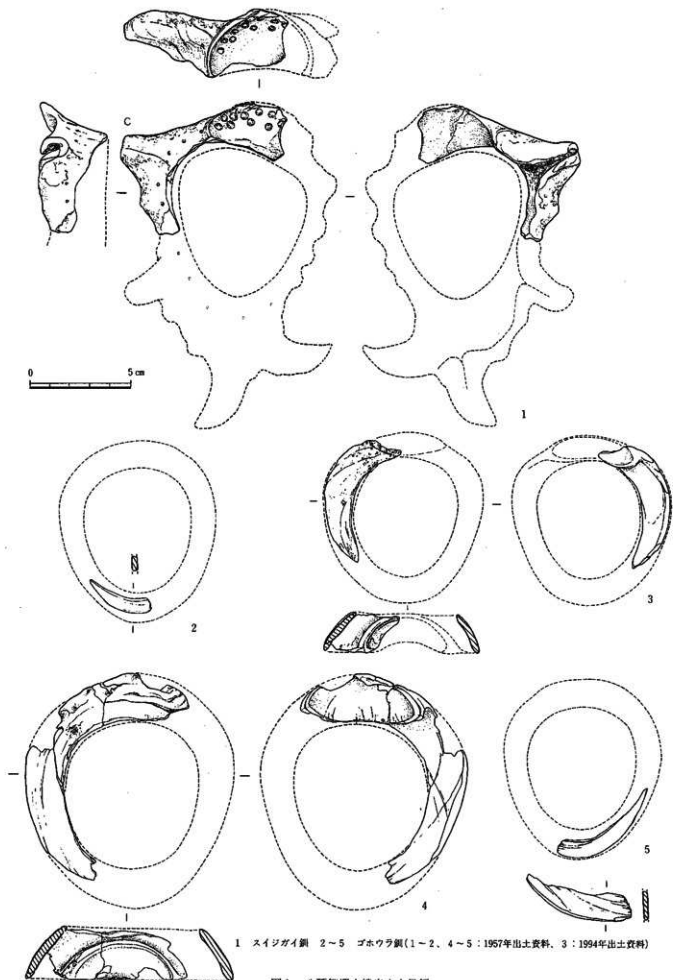
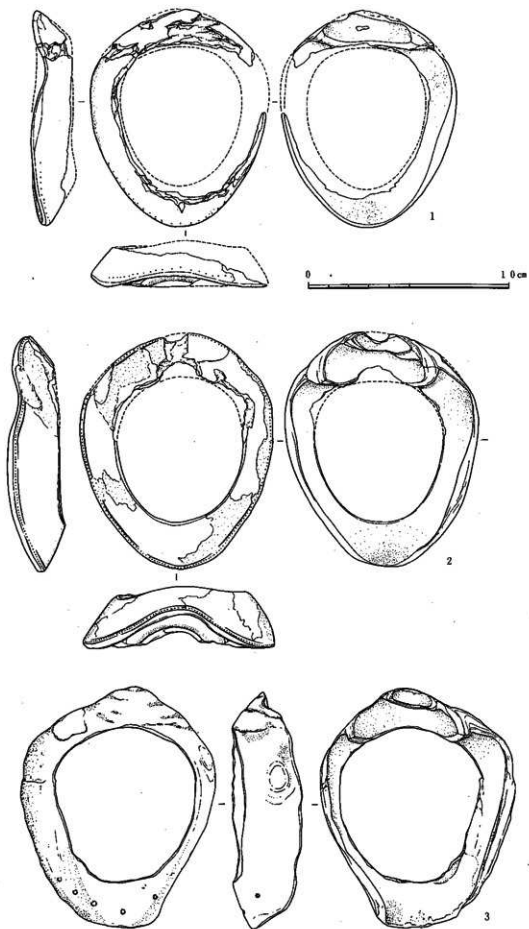


図1 八丁館塚古墳出土土貝銅



1 新宮東山古墳2号墳1号棺ゴホウラ鏡 2 世利門古墳ゴホウラ鏡 3 伝佐山古墳ゴホウラ鏡

図2 列点文貝鏡

表1 列点文具訓一覧

No	遺跡名・所在地	時期	貝類素材(個数)・施文	出土状況・伴出遺物等
1	館塚古墳第1号墳 長野県須坂市八町	4世紀末	スイジガイ(1) 大小の列点を使い分けて返らす。	積石塚古墳、円墳(23m)。盗掘うける。 仿製鏡片、碧玉製勾玉、蠟石製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉、碧玉製石訓、鉄矛、直刀、刀子、ヤリガンナ、鉄鏃、家形埴輪、土師器
2	新宮東山古墳2号墳1号棺 兵庫県龍野市横西町	4世紀末～5世紀前半	ゴホウラ(1) 一部に小さな列点を返らす。	方墳(13～14.5m) 組合せ槽式石棺、蓋石あり、底石なし。 30～40歳の男性の右前腕に着装される。副葬品：鉄鏃、金銅製飾り金具、鉄刀、鉄剣。
3	世利門古墳 大分県大分市木ノ上	5世紀後半	ゴホウラ(1) 小さな列点と沈線を返らす。	円墳(18m)、家形石棺 8体合葬の内、1体(壮年男性)がゴホウラ貝輪着装。他にイモガイの組み合わせ貝輪、鉄鏃あり。竹製漆塗器、鉄剣、鉄鏃。
4	伝佐山古墳 熊本県玉名市築根木	5世紀後半	ゴホウラ(1) 一部にやや大きな列点を返らす。	円墳(35m)、舟形石棺。発見明治17～18年。 ゴホウラ貝輪は3個出土し、2個現存。 直刀、槍先、横板板形留式短甲、小札形留式鹿庇付背
5	広田遺跡下層～中層 鹿児島県鹿毛郡南種子町平山	4世紀～5世紀	ゴホウラ(1) 列点で施文。 オニシ(1) 列点と半肉形で施文。 イモガイ(1) 列点と沈線で施文。	砂丘の墓池。被葬者は貝訓、貝珠、貝符、電扇形貝製品等を装着する。
6	具志堅貝塚 沖縄県本部町	浜屋原～大当原式期	ゴホウラ(1) 表面に列点で施文。	包含層出土。
7	高知口原貝塚 沖縄県読谷村	大当原式期	ゴホウラ(3) 大小の列点を2～3列に返らす。列点と沈線で施文。	表土及び包含層出土。
8	安座間原第一遺跡 沖縄県宜野湾市真志喜	沖繩貝塚時代後期前半	ゴホウラ(1) 列点と沈線で施文。	包含層出土。
9	嘉門貝塚B地区 沖縄県浦添市	阿波連浦VI層～大当原式期	イモガイ(1) 列点と沈線で施文。	包含層出土。

## 文献 (表1Noに対応)

- 1 永峯光一・亀井正道1959「長野県須坂市館塚古墳の調査」『考古学雑誌』第45巻第1号、日本考古学会。
- 2 岸本道昭1996「新宮東山古墳群」龍野市教育委員会。
- 3 賀川光夫1958「五遺骸以上合葬の一例—大分県大分市木ノ上世利門古墳」『考古学雑誌』第44巻第1号、日本考古学会。
- 4 梅原末治1925「熊本県下にて発掘せられたる古墳の調査—玉名郡築根木の古墳」『熊本県史跡名勝天然記念物報告』2。
- 5 国分直一・盛岡尚孝1958「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌』第43巻第3号。天理大学において実見。
- 6 岸本義彦1986「具志堅貝塚発掘調査報告」本部町教育委員会。
- 7 読谷村立歴史民俗資料館において実見。仲宗根求氏の指示による。
- 8 宜野湾市教育委員会において実見。具志堅勝氏の指示による。
- 9 下地安広・松川章1993「嘉門貝塚B」浦添市教育委員会。

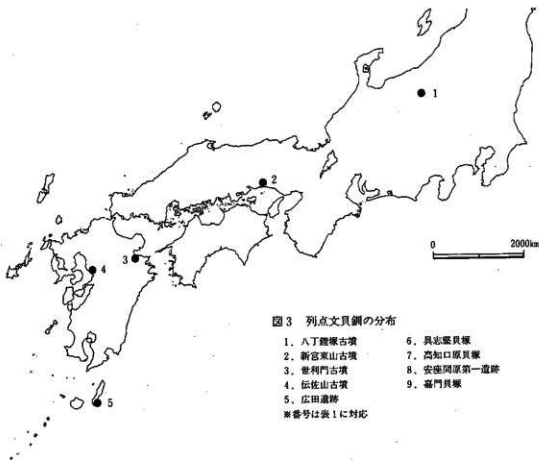


図3 列点文具貝の分布

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 八丁館塚古墳 | 6. 具志堅貝塚    |
| 2. 新宮東山古墳 | 7. 高知口原貝塚   |
| 3. 世利門古墳  | 8. 安徳岡原第一道跡 |
| 4. 伝佐山古墳  | 9. 福門貝塚     |
| 5. 広田遺跡   |             |

※番号は表1に対応

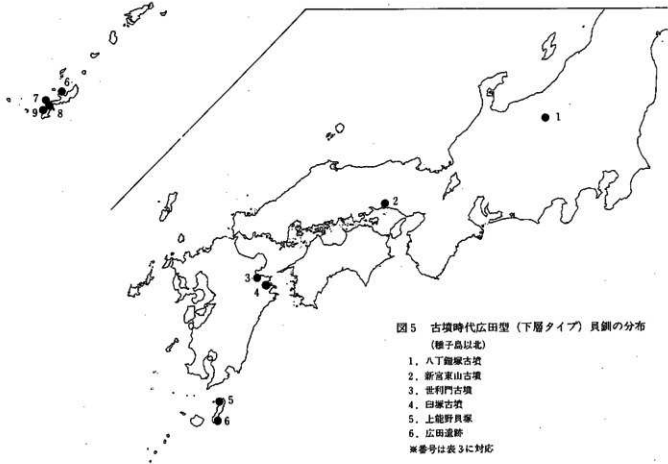


図5 古墳時代広田型（下層タイプ）貝の分布  
（種子島以北）

- |           |
|-----------|
| 1. 八丁館塚古墳 |
| 2. 新宮東山古墳 |
| 3. 世利門古墳  |
| 4. 白塚古墳   |
| 5. 上能野貝塚  |
| 6. 広田遺跡   |

※番号は表3に対応

な作りの貝鏡であったとみられる。広田型貝鏡である。

ゴホウラ鏡については、表面に列点文などの彫刻があるのではないかと注意して観察したが、その痕跡を見いだせなかった。出土した貝鏡の保存状態は、どの破片もほぼ同じなので、これらにスイジガイ鏡のような彫刻があれば、同様に痕跡を遺しているはずである。今回そのような痕跡を全く認めなかったことから、ゴホウラ鏡にはもとより列点文などの彫刻はなかったと判断した。

以上のスイジガイ鏡1点とゴホウラ鏡3点以上が同一の埋葬主体に伴っていたとすれば、貝鏡を伴う東日本の古墳では最多例になる。鑑塚出土の貝鏡の特徴は、次の3点である：

- ①スイジガイ貝鏡に列点文が彫刻されている。
- ②ゴホウラ貝鏡は広田型貝鏡である。
- ③スイジガイ貝鏡は鉤をもつ形状である。

以下、列点文彫刻、広田型貝鏡、鉤をもつ形状について、それぞれ検討しよう。

### 3 列点文貝鏡の系譜

#### (1) 列点文貝鏡の分類

貝鏡上に列点による文様を彫刻するものを、列点文貝鏡とよぼう。列点文貝鏡は現在、九州・西日本に4例知られる(表1 Na 1～4、図2・3)。これらは鑑塚例がスイジガイであることを除くと、いずれもゴホウラ製である。列点文貝鏡は施文の方法によって、以下のように分けることができる。

分類1：施文が「列点のみ」のものと「列点+沈線」のもの。更に前者は、「同じ大きさの列点を使用する」ものと、「大小の列点を使い分ける」ものとに分けられる。

分類2：列点を貝鏡の「全体に巡らす」ものと、「一部に留める」もの。

4例はすべて4世紀末から5世紀後半の時間内に取まっているので、こうした現象は1世紀に満たない間の流行だったといえる。

広域にわたる列点文貝鏡の流行をどのように考えればよいだろう。彫刻された貝鏡の代表である紫金山古墳例、松林山古墳には、沈線や半肉彫りによる施文はあるが、列点文は用いられていない。列点文貝鏡の類別は、意外なことに古墳造営の及ばなかった琉球列島にみられる。

表1 Na 5～9が琉球列島の類別である。琉球列島例の時期は、未だ西暦年との対応がはっきりしない部分があるので、表には土器型式名を示した。阿波通瀬VI層は九州弥生時代前後半～中期前半、眞屋原式は同じく中期中頃～後期初頭、大当原式は同じく弥生後期から古墳時代中期初頭に、それぞれ対応するとみられる。筆者の年代観により各例をおおよその西暦年に置き換えると、No.6 具志堅貝塚例は紀元前1世紀から5世紀初頭、No.7 高知口原遺跡例は3～5世紀初頭、No.8 安座間原第一遺跡例は1～5世紀、No.9 嘉門貝塚B地区例は紀元前3世紀～5世紀初頭となる。全体的にみて、琉球列島例の方が九州・本州例よりも、時期的に古い傾向にある。

表2は、先に述べた分類をもとに、貝鏡各例の列点文を整理したものである。分類項目に沿って、本州・九州地域と琉球列島例の傾向を比較してみよう。表現を簡単にするため、以下前者を「北」、後者を「南」と呼び替えた。

分類1「施文方法」では、大分類「列点のみ」にも、「列点+沈線、列点+半肉彫」にも「北」「南」両地域例がある。しかし前者の小分類「大小の列点を使い分ける」施文をもつものは、鑑塚例のみである。小分類「同じ大きさの列点を使用」する類別を、分類2においてみると、「全面に巡らすもの」は「南」例に限られ、「一部に留めるもの」は「北」例に限られる。大分類「列点+沈線、列点+半肉彫」では、「全面に巡らすもの」に「北」「南」両地域例が並ぶ。

「北」「南」両地域の列点文貝鏡は、小異はあるものの、施文方法、施文部位において大方共通している

表2 列点文貝類分類 (本州・九州例には下線を付す)

分類1		施工方法		列点+沈線または 列点+半肉彫
		列点のみ	列点+沈線	
分類2	同じ大きさの列点を使用する		大小の列点を使い分ける	
	施 文 部 位	全面に巡らす	広田遺跡下~中層 具志堅貝塚	
一部に留める		新宮東山古墳2号墳 伝佐山古墳		
その他 (資料が断片的で不明)		高地口原貝塚	龍塚古墳第1号墳	高地口原貝塚 安座間原第一遺跡 嘉門貝塚B地区

といえよう。「北」の列点文貝類が「南」のそれより、時間的に後出であることを考慮すれば、前者に後者の影響の及んだ可能性がある。

## (2) 列点文貝類の系譜

私はかつて、ヤマト政権が古墳時代を通じて琉球列島から南海産貝類を輸入していたと論じたことがある<sup>10)</sup>。本稿の列点文貝類も、こうした南島交易によってもたらされた産物である。古墳時代の貝類交易は、ヤマト側の希望に応じた貝素材が畿内目指して北上するものであったと私は理解しているが、前節の検討結果をふまえれば、「南」の流行が「北」に影響している一面がありそうである。列点文貝類の系譜を溯及してみたい。

列点文施文がもっとも普遍的に見られるのは種子島、広田遺跡下・中層文化の貝製品においてである(図4-1~5)。ここで列点文は、貝類、貝符、竜佩形貝製品、貝製玉類(マクラガイ製)に広く表現されている。列点文は、下層文化期のおそらくは後半から中層文化期の一時期に流行している。4世紀中頃~5世紀初頭だろう。しかし広田遺跡で、貝類に列点文が施されるのはむしろ少数で、この時期の大部分の貝類は無文である。これに加え、古墳の貝類列点文と、全く同じ列点文がここに見られるわけではない。広田遺跡に列点文自体の淵源を求めることはできても、それ以上の関わりまでは見だし難い。

これに対し、沖縄諸島の列点文貝類には、広田遺跡に類似した文様パターンをもつ「列点文のみで文様を描くもの」(図4-6・7・8)と、「列点+沈線」(図4-9~11)があり、広田遺跡との密接な関係を示している。このような文様、施工パターンは、それ以前の沖縄諸島にはみられず、またこの時期には広田遺跡特有の貝符、竜佩形貝製品、貝製玉類(マクラガイ製)も沖縄諸島に登場するので、列点文貝類の出現が広田人と接触に原因していることは、容易に推測できる。

こうした人の動きを生んだのは、広田遺跡における貝需要の変化であった。広田遺跡では下層文化期の前半、貝類の素材はもっぱらオオツノハであったが、後半にはこれにゴホウラが加わり、次第に増加する。オオツノハは種子島近海に多く産するがそれより南には少なく、ゴホウラは種子島近海に少なくて奄美・沖縄諸島に豊富である。貝類の素材がオオツノハからゴホウラへ変化する現象は、広田人の南下行動と表裏をなしているはずである。広田遺跡にゴホウラ貝類の登場するちょうどその時期に、奄美に広田下~中層タイプの貝符が登場し、沖縄諸島に列点文貝類が登場する。4世紀代と推定される。

ここで注目すべきは、沖縄諸島の列点文貝類に、列点文を1~3列並行に巡らせたゴホウラ貝類のみられる点である。これこそまさに「北」の列点文貝類そのものである(図4-7・8・11)。これに似た文様は、広田遺跡下層のイモガイ貝類に見られたが(図4-3)、ゴホウラ貝類には未だ認められていない。こうした列点文を列状に巡らすゴホウラ貝類は、沖縄諸島の複数例からみてこの地で独自に作り出されたかと思われる。

以上から、列点文貝類の系譜を次のように考えることができる。4世紀頃、沖縄諸島人が広田遺跡人と接触したことで、沖縄諸島に広田遺跡貝類の影響を受けた種々の貝製品が登場する。こうした現象の一

つが、列点文を周縁に巡らすゴホウラ鋼の誕生であった。これがヤマト政権との貝交易を介して「北」のゴホウラ鋼に影響し、「北」の貝鋼に列点文を登場させた。

ところで、現在知られる「北」の列点文貝鋼4例は、それぞれに列点文彫刻の作風が異なる(図1、図2)。新宮東山や世利門例のように小さな凹点を密に施文するものもあれば、伝左山例のようにやや大きい列点文を下半部のみまばらに施すものもあり、鐘塚例のように大小を組み合わせるものもある。これに対し、沖繩諸島の列点文貝鋼は、列点に若干の大小こそあれ、その作風を同じくしている。「北」の列点文貝鋼の彫刻は「南」の工人の手になるものではなく、「北」の工人の作品なのだろう。列点文自体、スイシガイという、「南」ではけっして貝鋼に使用しない素材に施文されていることも、こう考えると理解しやすい。列点文装飾のアイデアは、素材の貝殻とともに「南」から伝わり、ヤマト政権の貝鋼製作者がこれを採り入れスイシガイ鋼に応用した、と理解できる。すなわち、鐘塚古墳のスイシガイ製列点文貝鋼は、広田遺跡の貝製装身具施文に淵源をもち、沖繩諸島で成立した貝鋼への施文様式を原型とし、ヤマトの工人によって作られ、北信濃にもたらされた、と解釈しうる。

#### 4 広田型貝鋼

##### (1) 広田型(下層タイプ)貝鋼

狭義の「広田型」鋼は広田遺跡出土のゴホウラ鋼をいうが、じつは広田遺跡でも下層、中層、上層のそれぞれで貝鋼の特徴は異なっている<sup>4)</sup>。下層タイプの貝鋼は、本来オオツノハ貝鋼の形状をまねて作られたことに始まり、巾が狭く(2~2.5cm)、やや縦長の円環形をなす。これが中層タイプになると巾の広い円形に変化し、上層タイプでは横長で突起をもち四角形に近い形状となる。下層タイプから中層タイプへの変化は漸移的なので、中には判断に迷うものもある。ここでは下層タイプを中心に取りあげる。

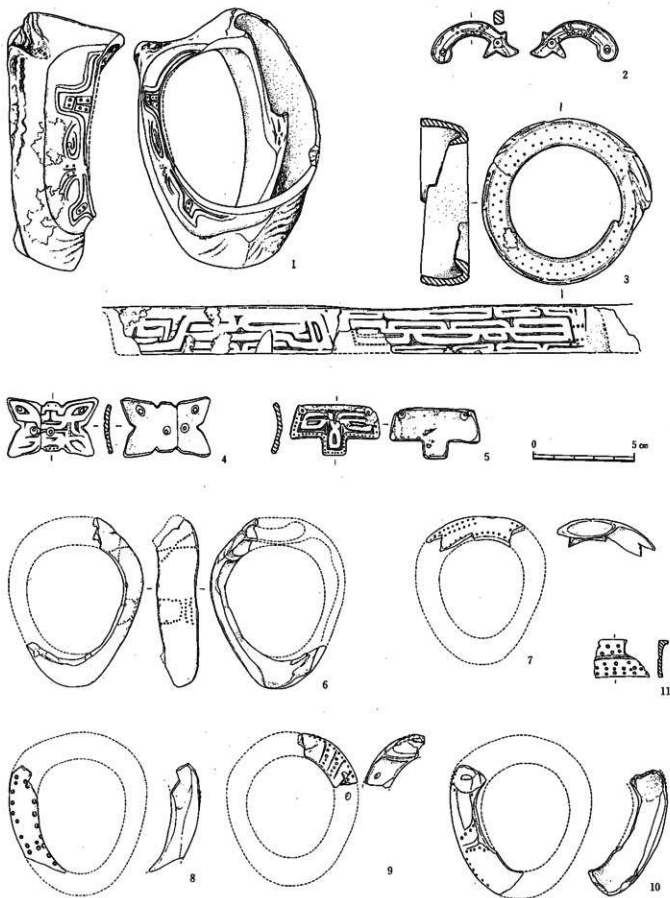
##### (2) 広田型貝鋼をはめた人々

表3は種子島以北地域の広田型下層タイプ貝鋼を集めたものである。このタイプは、種子島から北信濃にかけての地域に広範に分布している(図5, 53ページ)。これらは出土状況から、「副葬された貝鋼」と、「着装された貝鋼」とに分けることができる。前者には白塚古墳が該当し、後者には世利門古墳、新宮東山古墳、広田遺跡が該当する。前者は、銅鏡や石製腕飾類を伴い、前方後円墳から出土しているので、貝

表3 古墳時代広田型(下層タイプ)貝鋼一覽(種子島以北)

	遺跡名・所在地	時期	個数	出土状況・副葬品等	参考文献
1	鐘塚古墳第1号墳 長野県須坂市八町	4世紀末	2	積石塚古墳、円墳。石室不明。 (副葬品は表1)	表1文献参照。
2	新宮東山古墳2号墳1号棺 兵庫県龍野市西園町	4世紀末~ 5世紀前半	1	方墳(13~14.5m)、組合せ箱式石棺。 男性が着装。(副葬品は表1)	表1文献参照
3	世利門古墳 大分県大分市木ノ上	5世紀後半	1	円墳(18m)、家形石棺。男性が貝鋼着装。(副葬品は表1)	表1文献参照。
4	白塚古墳 大分県白杵市福田	5世紀	1	1前方後円墳(87m)、舟形石棺。貝鋼は遺儀の頭付近で見つかる。銅鏡、勾玉、鉄剣、鉄刀、鉄鉾、三角板皮綴短甲。	賀川光夫1961「白塚古墳について」『大分県史料』20・考古資料。
5	上能野貝塚 鹿児島県西之表市	3~6世紀	1	包含層出土。	河口貞徳1972「上能野貝塚発掘概報」『鹿児島考古』第7号、西之表市立種子島博物館において実見。
6	広田遺跡下層 鹿児島県熊毛郡南種子町	4世紀	52	砂丘の墓地。貝鋼は着装される。	木下尚子1996「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』81-1。





1-5 種子島 広田造跡貝製品 6-10 沖繩諸島の列点文貝銅(1 オニシ銅, 2 電機形貝製品, 3 イモガイ銅, 4・5 貝特  
6 吳志堅貝塚ゴホウラ銅, 7-9 高知口原貝塚ゴホウラ銅, 10 安徳間原第一遺跡ゴホウラ銅, 11 喜門貝塚イモガイ銅)

図4 広田造跡貝製品と沖繩諸島の列点文貝銅

銅もヤマト政権にかかわる意味をもつといえよう。後者にはこうした文化要素が見られず、前者とは別の意味をもったとみられる。鏡塚古墳例の出土状況は不明で、かつ墳丘形状は前方後円形ではないが、副葬品に鏡や石銅が伴い、また同様の貝銅をもつ甲斐鏡子塚古墳が前者のタイプなので、貝銅は前者に属する可能性が高いだろう。上能野例は包含層出土であるが、この地に古墳の及んでいないことを考慮すれば、後者に入れてよいだろう。

後者、すなわち「着装用具銅」をもつ新宮東山古墳、世利門古墳、上能野遺跡、広田遺跡について検討しよう。広田型貝銅をはじめ、古墳に葬られた人々について参考になるのが、新宮東山古墳である。当該貝銅は2号墳1号棺に伴ったものである。新宮東山2号墳は、以下の4基で構成される：1号棺；組合せ箱形石棺（北頭位）、2号棺；刳り貫き式舟形木棺（南頭位）、3号棺；小口石刳り貫き式割竹形木棺（南頭位）、4号棺；刳り貫き式長大割竹形木棺（南頭位）。

報告者の岸本道昭氏は、これらを「中心となる個人主体の不明瞭な集団墓」の「異棺形式多葬」とし、1号墳を含めた一連の検討から「組合せ箱形石棺が、九州まで含めた西方出自、小口石割竹形木棺は両丹地方、壺棺や埴師頭位では讃岐出自、そして長大な割竹形木棺が畿内大王権力周辺からの被葬者であろうとし、「他地域からの婚入者」を含む「この地方での末端付近の首長権力を担う被葬者たちであった」としている<sup>49</sup>。新宮東山古墳の被葬者には、水陸を広域に行動する実動的な集団を想定できそうである。彼らが各地との流通を実際に担っていたとすれば、広田型貝銅を伴う人物に、瀬戸内海の海上往来を生業とする人物を描くことができるだろう。

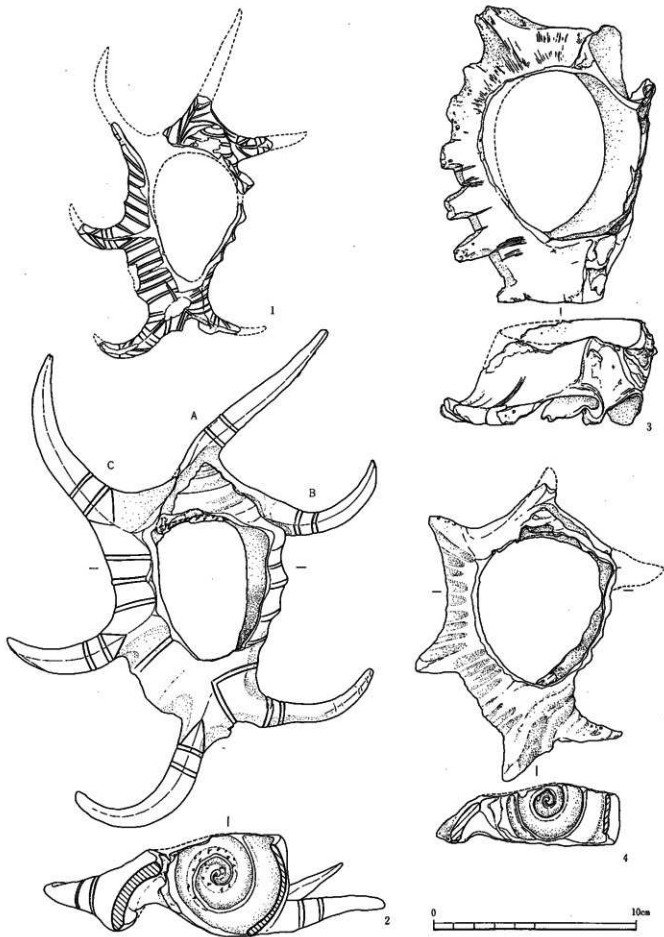
以上をふまえて「着装用具銅」の分布をみてみよう（図5の2、3、5、6）。4遺跡を結ぶと、畿内から瀬戸内海を西漸し九州東海岸を南下して種子島に至る線が示される。瀬戸内海の東端（新宮東山古墳）の着装者には、畿内と瀬戸内を結ぶ人物を想定することが可能だろう。九州南端には、生産地に直結するゴホウラ・イモガイを集散し、広田型貝銅の一大消費地でもある広田遺跡がある。ここには広田型貝銅をはじめ、南海産貝類採集事情に通じた人々を想定してよいだろう。両者の中間豊後の貝銅は、小型の墳丘をもつ8体合葬の石棺に葬られた一人の腕にはまってお（世利門古墳）、その着装者は新宮東山と同様、「この地方での末端付近の首長権力を担う被葬者たちであった」可能性が高い。4遺跡連結線上の人々は、種子島とヤマト政権間の南海産貝類流通を受け持つ人々であった、と考えてよいのではないか。着装された広田型貝銅は、貝類運搬にかかわる海人たちが流通の過程で入手し、自ら腕にはめたものであったと考えた。これらが往々に列点文貝銅であるのは、南島の流行の先端をいち早く採り入れる彼らならではの気風の一部ではなかったか。

鏡塚古墳の広田型貝銅は、こうした人々の動きのさらに先にある。即ち、海人によってヤマト政権に届けられた素材のゴホウラが中央の工人によって貝銅に加工され、製品として北信濃にもたらされて初めて登場し得る銅なのである。

## 5 有鉤貝銅

鉤状の突起をもつ貝銅を、有鉤貝銅とよぶことにしよう（図6）。有鉤貝銅は、弥生時代の有鉤銅鋼と同じ発想、すなわち「鉤が鎧力を拘禁する呪力をもつとみる考え」に因って作製されたものとみていいだろう<sup>49</sup>。現在知られる有鉤貝銅は、表4に示す4例である。有鉤貝銅は鏡塚例を除き、いずれも前方後円墳あるいはその可能性の高い古墳からの出土である。副葬品にも鏡、石製腕飾類が伴い、それぞれの地域を代表する人物に伴っていたとみることができる。

有鉤銅鋼・有鉤貝銅と同類の呪具に、巴型銅器がある。これも「鉤の呪力」の一表現とみられ、こうした発想の広がりを知るのに役立つ。これらの流行状況をみてみよう。図8は弥生時代と古墳時代の有鉤銅鋼の分布図である。弥生時代に北部九州から南関東にわたる広域の有鉤銅鋼の分布が、古墳時代には近畿



1-2 松林山古墳スイシガイ銅, 3 軍原古墳テングガイ貝銅, 4 甲斐鏡子塚古墳スイシガイ銅

図6 有鈎貝銅



1. 八丁廻塚古墳
2. 甲斐鏡子塚古墳
3. 松林山古墳
4. 草原古墳

図7 有鈎貝劍の分布

表4 有鈎貝劍一覽

No	遺跡名・所在地	時期	鍔をもつ貝劍 (個数)	出土状況・伴出遺物等
1	廻塚古墳第1号墳 長野県須坂市八町	4世紀末	スイシカイ(1)	横石塚古墳、円墳。石室不明。 (伴出遺物は省略)
2	甲斐鏡子塚古墳	4世紀末	スイシカイ(2)	前方後円墳(169m)。竪穴式石室。 銅鏡、石鏡、車輪石、勾玉、管玉、鉄製武器、鉄製農耕具。
3	松林山古墳 静岡県磐田市新貝	4世紀	スイシカイ(3)	前方後円墳(116m)。竪穴式石室。 銅鏡、石鏡、勾玉、管玉、巴型銅器、琴柱形石製品、鉄製武器・農耕具多数。
4	草原古墳 島根県簸川郡斐川町	5世紀	テングガイ(2)	前方後円墳か(約50m)。冢形石棺。 直刀、薙残欠、管玉、勾玉、鉄鍔、小札。

文献 (表4Noに対応)

- 2 上田三平1930「鏡子塚古墳を通して見たる上代文化の一考察」『史学雑誌』39-9  
上野晴朗1975「古墳時代」『中道町史』  
坂本美夫1988『国指定史跡鏡子塚古墳附丸山古墳保存整備報告書』山梨県埋蔵文化財センター
- 3 後藤守一・内藤政光・高橋勇1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』
- 4 島田貞彦1927「出雲国簸川郡莊原村塚山古墳に就て」『歴史と地理』19-1  
野津左馬之助1927「出雲国簸川郡莊原村塚山古墳」『史蹟名勝天然記念物』2-1  
大谷晃二1994~1996「簸川郡草原古墳について(上)(中)(下)」『八雲立つ風土記の丘』No127、136、137、  
根立八雲立つ風土記の丘

- 古墳時代の巴型銅器
- 弥生時代の巴型銅器

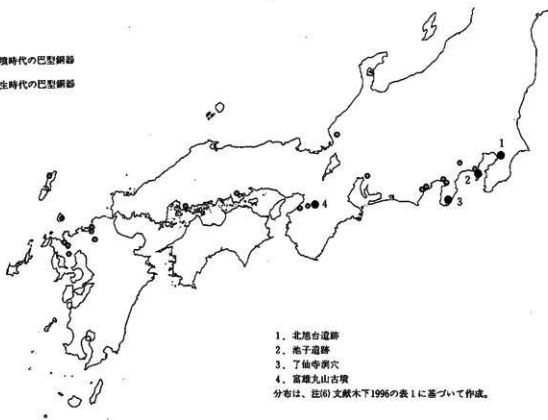


図8 有鈎銅器の分布

- 古墳時代の有鈎銅器
- 弥生時代の有鈎銅器



図9 巴型銅器の分布

から南関東に偏在していることがわかる。図9は、同じく巴型銅器の分布である。弥生時代と古墳時代の分布を比べると、前者で西に偏る分布が、後者では東に移動していることがわかる。

2種類の青銅器の、東日本における分布に注目してみよう。有鉤銅器は、弥生時代から古墳時代にかけて、北陸・中部・東海・南関東で継続している。巴型銅器は同じく中部・東海・南関東に見られる。これらの地域において弥生後期に始まった「鉤の呪力」表現は、古墳時代に至るまで継続し、根強く流行していたとみられる。東日本の有鉤貝銅分布域が中部・東海であることは、こうした呪力表現背景をふまえると、理解しやすい<sup>17)</sup>。

ところで、私は古墳時代の南海産貝銅は、その運搬に関わる人々を除き、原則としてヤマト政権が一元的に素材を入手して貝銅を作成し、他地域に再分配していたと考えている<sup>18)</sup>。有鉤貝銅の分布と有鉤銅器・巴型銅器の分布が重なることは、政権中枢部がこれらの地域の思想性を配慮し、こうした貝銅をとくに準備したことを考えさせる。

## 6 鏡塚古墳の南海産貝銅

鏡塚古墳の南海産貝銅について、列点文彫刻、広田型貝銅、有鉤貝銅の3点から、それぞれ検討を加えた。結論をまとめると以下の通りである。

鏡塚古墳の南海産貝銅は：

- ①沖縄諸島、種子島広田遺跡の貝製装身具地文要素である列点文デザインを継承する（スイシガイ銅）
- ②ヤマト政権の工人の作品である可能性が高い（ゴホウラ・スイシガイ銅）
- ③ヤマト政権が呪的表現の地域性を配慮して配布したものである（スイシガイ銅）

鏡塚古墳の3種の南海産貝銅は、琉球列島人、種子島人、九州・瀬戸内の海人の手を経て運ばれたとみられる。かくも遠方の貝銅を北信濃にもたらした根本の要因は、ヤマト政権が政者と鏡塚古墳被葬者との政治的関係であろう。貝銅に示されたヤマト政権との深い関わりからみても、鏡塚古墳の南海産貝銅は、畿内色の強い威信財であったといえよう。

(注)

- (1) 私は南海産貝使用の腕輪の名称について、弥生時代のを「南海産貝輪」、古墳時代のを「南海産貝銅」とよんで区別している。それは以下の理由による：
  - ・弥生時代では「南海産貝輪」の呼称が定着している。
  - ・古墳時代では「南海産貝輪」の石製品化したものを「石銅」とよび、この名称も定着している。
  - ・「古事記」、「万葉集」、「和抄類聚抄」では、腕輪を「銅」と表記する。一方古墳時代の貝製腕輪は一部古代に継続し、これらと「銅」が無関係とは思えない
  - ・弥生時代の貝製腕輪と古墳時代のそれとは、用法、文化的意味に違いがあり、区別して呼ぶに値する。拙稿では古墳時代の貝製腕輪を対象とするので、文中の名称を「貝銅」に統一する。
- (2) 広田型貝銅（貝輪）は、ゴホウラの背面を用いて作製した腕輪である。1980年、木村幾多郎氏によって細分され、それぞれの時代、地域、形態的特徴から「広田遺跡出土品を中心とする」「広田型」、弥生時代の「大友型」、古墳時代の「築根木型」が設定された。鏡塚古墳の貝銅は、広田型ではあるがどの細分型式にも当てはまらないので、大分類の広田型を当てはめておきたい。木村幾多郎1980「所謂広田型貝輪の細分について」『史淵』第117輯、九州大学文学部、pp.91-128。
- (3) 木下尚子1996「古墳時代南島交易考—南海産貝銅と貝の道を中心に一」『考古学雑誌』第81巻第1号、日本考古学会、pp.1-81。

- (4) 木下尚子1988「鹿児島県広田遺跡」『探訪弥生の遺跡西日本編』有斐閣、p.243。
- (5) 岸本道昭1996「新宮東山古墳群」龍野市教育委員会、pp.64～72。
- (6) 金岡丈夫1975「魂の色—まが玉の起り」『発掘から推理する』朝日新聞社、pp.344～40。  
木下尚子1996「貝輪から銅剣へ」『南島貝文化の研究』法政大学出版局、pp.105～136。
- (7) 出雲の葦原古墳例はこの説明では不十分であるが、これについては別に論じたい。
- (8) 注③文献と同じ。

#### 図の説明

図1：1～5 須坂市立博物館資料

図2：1 表1文献2の第24図、筆者のメモ、写真をもとに製図

2 別府大学博物館資料

3 注(2)文献(木村幾多郎1980)第6図、筆者メモをもとに製図

図4：1 国立歴史民俗博物館資料、広田遺跡第1次調査N1人骨に伴う。

2 天理大学保管資料、広田遺跡第2次調査資料

3 国立歴史民俗博物館資料、広田遺跡第1次調査E3人骨に伴う

4～5 国立歴史民俗博物館資料、広田遺跡第1次調査採集資料

6 本部町教育委員会資料

7～9 談谷村教育委員会資料

10 宜野湾市教育委員会資料

11 浦添市教育委員会資料

図5：1～4 東京国立博物館資料

## 第5章 考 察

### 第1節 八丁鎧塚古墳の二・三の考察

泉森 皎

#### 1 はじめに

長野県須坂市大字八町にある八丁鎧塚古墳を著名にしている最大の理由は、大型積石塚古墳で、中部・関東地方以北では珍しい古式古墳である。昭和32年の発掘調査では、スイシガイ製やゴホウラ製銅や石銅、勾玉、管玉、ガラス小玉に方格規矩四神鏡などが出土している。

また1号墳に隣接する2号墳でも埋葬施設は不明のまま鈴杵葉、挂甲、小札、また帯金具の一部である鍔銀銅製獅子嚙紋鈿板3点が出土している。特に鍔銀銅製獅子嚙紋鈿板は韓国宋山里2号墳、同じく高蓋古墳、岡山県茶臼山古墳で出土している程度で、数少ない遺品である。

八丁鎧塚1・2号墳を中心に遺構と遺物について次項で検討することにしよう。

#### 2 検出遺構の検討

鎧塚1号墳 墳丘裾部に入れたH～Mまでの6本のトレンチによって墳丘裾の確認調査が行われた。これによるとIとJの中間部分を除くHとJの北側、K、L、Mの計5カ所の地点の裾部がおだやかな円弧をもち、その円弧は昭和32年調査の2カ所の調査区の重複部分を仮に墳丘の中心点とすると半径12m、直径24mの正円で墳丘裾を押さええることができる。そのようにみると、後述の2号墳の張り出し施設と同じ様なものが南西方向に付属していた可能性も否定できない。小林宇宅氏が「八丁鎧塚第1号墳、第2号墳」で、「1号古墳のもっとも南に位置するトレンチでは他のトレンチに比べ土師器の出土量が多く、また墳丘裾が南側に伸びていく傾向が若干であるがみられる。」との観察結果に表現されている。この部分は上段の畑と下段の畑の変遷線の下側にあたるので、墳丘裾部が拡大している可能性もある。この古墳では他に東北部に角状に突出している部分がある。ここは最大幅5m、長さ3mの三角状の突起になっている。墳丘の積石と同じように乱雑に石積みされているが、この部分が当初からのものか、畑の畦畔にあたっているため、耕作地の中に点在していた川原石を土地境界の部分に積上げた可能性も否定できない。しかしトレンチMの北側の試掘などによって別個の張り出し区画があったかどうか確認される時まで回答をのばしたい。

鎧塚1号墳と2号墳は石塊によって南北に結ばれている形をしていた。この石塊は「わたりづつみ」などとも呼ばれ、両者の有機的関係を示す証拠ともされ、2号墳築造時に石塊で繋いだものと言ひ、また一方では2号墳の張り出し施設が1号墳の方に向かって付設されていることから、1号墳も2号墳と同様、北向きに張り出し部分があったのではないかとの見方もある。

しかし今回の調査では発掘区画を拡大して検討されているが、6号墳の確認以外、張り出しを証明する基底石列も検出されていない。直径24～25.5くらいの円墳で、北東に張り出し部をもつ可能性があるとやうにとどめておこう。

鎧塚2号墳 鎧塚2号墳も6カ所のトレンチと2カ所の調査区域の設定によってほぼその墳形が明らかになった。

2号墳も1号墳と同様、段差のある傾斜変遷線上に築かれているため、西側から見る墳丘は高さ4mに近い大墳丘の形をしている。傾斜変遷線の西裾では、基底部を固め安定させるため、この地域の基本土層の褐色土を幅50cmの半円状の溝を穿って掘り下げ、黄色土の硬い地山面を出して、その上に大形川原石列



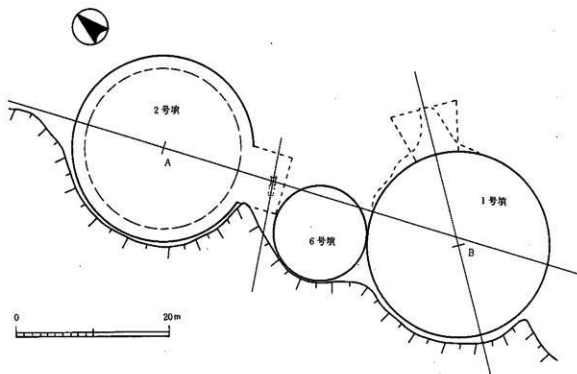


図1 銀塚1・2号墳と6号墳墳丘想定図

の基底部（敷石帯）を設けて、全体に重心のかかる西側に力を入れて基盤部を築成している。墳丘裾の西南部から南側にかけて、美しい円弧を描く基底と根石列（敷石帯）を墳丘一段目とみなし、ここから墳丘範囲とみなさなければならない。

次にこの積石塚は段築が施されていたかの問題であるが、地山より90cm、標高500m（付図の130cmコンター）に埴輪片が多いことをみると、この部分に埴輪が据えられていた可能性が高い。

いま墳丘断面で積石の状態を観察すると、約45度の傾斜面で安定した形を取っている。しかし当然ながら急な傾斜角度では形象埴輪や円筒埴輪を据付けることはできない。今、自然崩落してしまっているため、転石部分と墳丘積石部分の区別が付きにくい状況になっている。しかし墳丘の積石部分に食い込んだトレンチの断面観察や埴輪の出土状況を見れば、ここにテラスが存在した可能性も推定できる。また段築状に築成されていたことが西斜面で確認されているが、北側のAトレンチや東側のDトレンチでは確認されていない。

ゆるやかな傾斜地に築いた古墳では、古墳を観察する位置によって形態や規模が異なることがある。この古墳も西裾から見ると高さ3.5mもあり、見上げると大変な圧迫感を受ける。これは標高の低い西側から見ることを意図した古墳であったと言える。再度述べるが、この方面にだけ基底部（敷石帯）や埴輪が見られたのもこのような理由であろう。

次に2号墳の南西で検出した、張り出し部と箱式石棺の埋葬施設である。2号墳の墳丘裾に付設するように石敷施設が見られたが、東側でも西側でも、また先端部分の東西でも石列は検出されておらず、本来の形や規模も明かでない。もし手掛かりとして仮に、1号墳の墳丘中心部と2号墳の墳丘中心部を南北に結んで軸線とすると、この軸線はN-25°-Wの方位を持つ。一方張り出し部に設けられた箱式石棺は、軸線の方位がN-64°-Eで、先の1・2号墳を結ぶ軸線に対し直角に近い。

検出した張り出し部分の遺構は、東西幅3.5m、南北の長さ5.5mの規模で検出されているが、張り出し部の全長は墳丘径の5分の1以上の大きさを持っており、東西幅が未定ながら短い前方部を持つ軌立貝式古墳であったとの推定も可能である。

1号墳と2号墳の心々距離が42m、ここに1号墳の半径12m、次いで2号墳の半径と張り出し部の合計

17.5mを加えると、両古墳の間隔は12.5mの空間しか見られない。この狭い空間に割り込むように径12.5mの小円墳の6号墳が築かれている。

しかしこの古墳は1・2号墳を結ぶ軸線上ではなく、西側に約4mずらして築かれている。2号墳張り出し部分の接し具合から見ると、2号墳により近接した位置関係にあるといえる。鐘塚の3基の古墳は1号墳、2号墳、2号墳張り出し部、6号墳の順に築かれたと見るのが自然であろう。

また古墳の規模が1・2号墳とも24~25mの範囲に収まることを見ると、古墳の築造時期差はあるものの2号墳は1号墳を意識して築かれた。逆の言い方をすれば、1号墳に墳丘規制を受けていたと言えよう。6号墳もまた、両古墳の2分の1の規模であることも見逃せない。古墳が一定の尺度で築かれているとすると、一尺24cm~25cm、晋尺の100尺の古墳と見るのは言い過ぎであろうか。

### 3 鐘塚1・2号墳と積石塚

鐘塚1・2号墳の特徴は墳丘を積石によって構築していることである。「図解考古学辞典」1959では「土を盛って墳形を作った土塚に対して、石をつみあげて墳を作ったものを積石塚、または石塚という。ふつうは削石をやや乱雑に積んだものを指すが、鞍安將軍塚のように切石を用いたものを含めていうことがある。…(後略)(小林)」と説明されている。

石、木材など限られた建築資材しかなかった時代では、堅固さを求める点では石材が第一であろう。積石塚発生の要因については次のことが考えられる。①堅固さを求めた。②土よりも石の方が大量に得やすいと言う自然条件が作用した。③お墓を作った人々の文化的伝統習慣の存在などである。積石塚誕生地域では①、②が要因と考えられる。墓制が各地に伝えられると共に③が強く表現されるようになっていったと考えられる。これらを次に検証してみることにする。

### 4 石墓文化と積石・葺石への流れ

積石塚は世界各地で各時期に発生している。西ヨーロッパでは各地域ごとに発生している。これは積石塚文化の①多元説…土よりも石の方が大量に得やすいと言う自然条件が作用し、墓の堅固さを求めたときに自然的に各地に発生した。②東北アジア起源説、旧ソ連(ロシア)アルタイ地方に積石塚が多数存在する。主体部は石棺であるので、青銅器時代にシベリアから南下して朝鮮半島に伝わり、その後我国の古墳文化にも影響を与えたとみる。③中国渤海湾沿岸起源説、中国東北部の渤海湾周辺の石墓文化に起源をもつとの考え方、遼西北牛河、大凌河流域に石墓文化が発生した。これらの代表的遺跡は凌源三官甸子城子山遺跡、朝陽十二台営子牛河梁積石塚などで、C<sup>14</sup>による年代測定では紀元前3000年の紅山文化期と推定されている。④の説は②の南ロシアやシベリアの積石塚が南に、また東に伝播して中国遼東半島の積石塚に影響を与えたとみるよりも、西側に近接する遼寧省大遼河流域に起源を求める考え方、巨視的にみるとこの方が理解しやすい。以下④の説をとって我国の積石塚への流れを辿ることにする。

大凌河流域に発達した石墓文化は遼東半島に伝わったと考えている。この地域の代表的な遺跡は四平山積石塚、老鉄山積石塚、將軍山積石塚などが知られている。

例をあげると、遼寧省営城子四平山にある積石塚は竜山文化期の古墳群である。削石を積んで築いた長方形の平面をもつ積石塚で、尾根にそって階段状に連続して結合した形をとっている。

1941年に20基あまりが発掘調査され、中国山東省や河南省から発見されているものと同様の黒陶土器が中心で、これに少量の白陶土器や牙璧、玉環、方柱状玉飾、璽玉など注目される出土品がみられる。また埋葬施設は壘穴式石室を中核としていることも判明している。

これらの積石塚の築造時期は灰陶と並んで使われたとみられる彩陶、黒陶、白陶などの土器類があり、中でも白陶土器は殷墟出土土器に近いので、年代がB C 2000~1500年頃と推定されている。

ロシアのミヌシンスク文化の中にも積石塚がみられる。アフアナシェヴォ期(BC3000)、アンドロノヴォ期(BC1700~1200)、カラスク期と変遷するが、これらの文化はバイカルからウラル地方まで広範囲に分布する。墓は楕円形または矩形の穴に1人または数人を埋め、盛土は石で覆われている。特に最後のカラスク期は豊富な青銅器によって特徴づけられ、獣頭の刀子、戈形の武器、刃と柄の境に小突起をもつ短剣、袋穂の斧など中国の殷・西周時代やそれと平行する綏遠青銅器文化と関係するとみられている。墓は板石製の箱式棺で、地上に立石で四角い垣をめぐらすものがある。

次のバジリク文化もシベリアの遊牧文化(BC500~後100)で、中心はミヌシンスク、アルタイにある。墓は木柩墓を主体部とした積石塚で、青銅器、鉄器が豊富に埋納され、副葬品の毛皮織物各種には咬獣文等の動物意匠を主なモチーフにしている。遺体は乾燥してミイラ化しているが、全身に入れ墨が見られる。

なかでも1989年に調査されたバジリク古墳群のベルティック10号墳は、ソ連、中国、モンゴル3国の国境に近く、アルタイ山脈の西北、標高2200mのウコツク高原に点在している古墳の一基であった。直径28mのクルガンで木柩に納められた人骨に、フェルト、青銅製刀子、鬮琴などの副葬品がみられ、殉葬された馬もみられる。同じくベルティック1号墳は径15mのクルガンで、石圍いの中央に2.5m×1.5m、深さ2mの木柩を構築して棺を納め、副葬品を入れていた。いずれもBC500~300年頃の年代が与えられる。ノイン・ウラ遺跡はモンゴル人民共和国、ウランバートルの北方130km、ノイン・ウラ山中セレン河の支流、ハラ河流域にある古墳群。1925、1927年に発掘調査が行われた。3群200基余りの古墳群の内、約1割が調査された。代表的な古墳の構造は、地表下10~14mに長方形の坑を掘り、木柩を築き棺を納めたもの。スキタイ系の動物闘争文を刺繍した、絹の敷物など織物製品が遺存した。出土した中国漢代の漆器に漢建平5年(BC2年)の銘があり、ほぼ年代がおさえられる。

朝鮮半島では早い時期の積石塚が知られている。西海矢鳥積石塚、黄海道沈村里積石塚、江原道泉田里積石塚などで、築造時期はBC1500~BC1000年頃と考えられている。

積石塚といえば高句麗の積石塚を語らなければならない。「魏志高句麗伝」に、墳墓を築くに「石を積んで封となす」とある。高句麗は鴨綠江中流域と、その支流渾江流域にBC1世紀頃出現し、最大は西北を遼河まで、東北を牡丹江、南は朝鮮半島南部までを領域とした。

民族の出自は「北魏書」に「高句麗は扶余からでた」とある。このことから田村男一氏の説では土墳墓を扶余族のもの、積石塚を高句麗族のものと考えられているが、中国遼東半島紅山文化の大型積石墓に高句麗積石塚の起源を求めるのが一般である。

高句麗は国土の統一と共に、桓仁、通溝(集安)、平壤へと都を移した。平壤遷都は427年である。2~3世紀頃の積石塚は、階層差によってその規模が異なっているのは当然であるが、これらの中に巨大な大王陵が築かれている。著名なものを古い順にあげると、まず第一に西大塚がある。千秋塚の西北西の山麓に立地し、一辺55m、高さ9mの大方墳と説明されているが、一辺90mの方壇階梯積石塚である。次いで禹山南麓の台地状に太王陵があり、東北200mの地点には広開土王碑がある。古墳は一辺66mの正方形で、高さ14.8mの規模をもつ。巨石を7層に積み上げ、墳頂を礎で覆う。各辺に5個の巨石を配置している。石室は東西2.8m、南北3.2mの玄室に羨道が付く。玄室内に扁平な切石で築いた家形の石柩が安置されている。「順太王陵安山固如岳」の銘文をもつ塚が出土している。

千秋塚は麻線溝地域の鴨綠江東岸の200mの地点に築かれている。85m×80mの長方形で、高さ15mの規模をもつ。方壇階梯の積石塚で、四隅に基壇石をもつ。3段に築成され、各段は5層前後の積石で出来ている。「千秋萬歳永固」の銘をもつ塚が出土している。

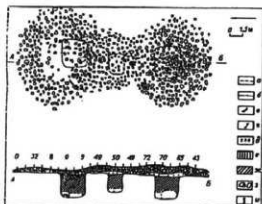
將軍塚はもっとも整った積石塚である。標高256mの丘陵のゆるやかな傾斜地に立地する。墳丘は方壇階梯の積石塚で、一辺31.58m、高さ12.5mの規模をもっている。埋葬施設は両袖式横穴式石室で、玄室は一

1 バジリック

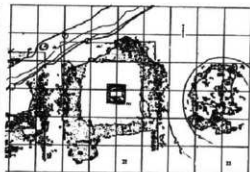
2 ノインウラ

□ クランバートル

1 バジルク古墳



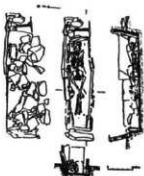
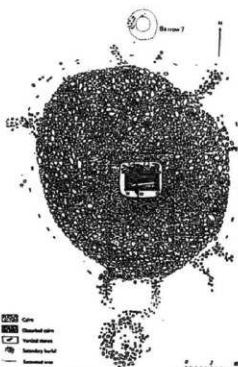
3 牛河梁積石塚 石棺墓



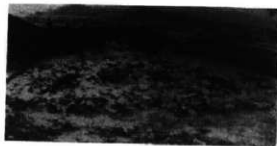
遼寧省

3 牛河梁積石塚

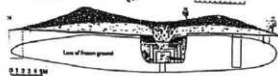
磨山 △



4 遼東半島將軍山積石塚



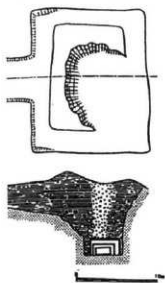
5 韓半島黄海道沈村里天真洞混合式積石塚



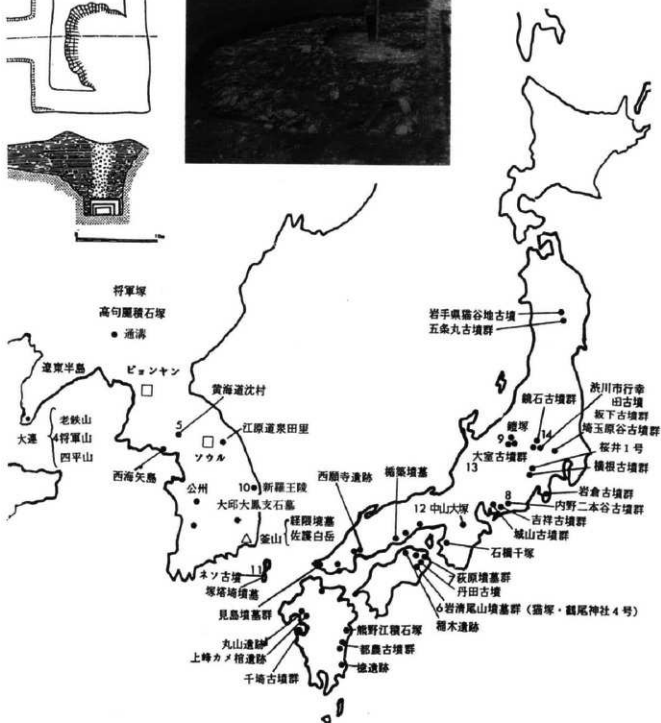
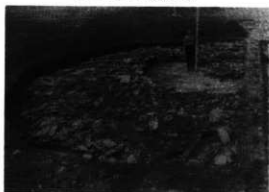
シベリア アルタイ地方の積石塚

図2 東アジアの積石塚の流れ

2 蒙古ノイン・ウラ  
スプクテ谷第一二号墳



シベリアアルタイ地方横石塚



辺5mの正方形、天井高も5.5mと非常に高く作られている。また支室の石積は切石を6段に積み上げたもので、最上段は平行持送りを行って総計7段積となっている。これらはいずれも王陵と考えられ、太王陵を371年死去の故国原王、千秋塚を392年死去の故国壤王、將軍塚を413年死去の広開土王が、長寿王などとする説がある。

高句麗の横石塚は百濟初期の古墳に影響を与えている。ソウルの漢江南岸には石村洞古墳などがあり、方形階梯式の墳丘を持っている。

朝鮮半島新羅の地域にも、大墳丘をもつ王陵が築かれている。皇南大塚古墳は双円墳（瓢形墳）としては慶州地区最大の古墳である。南北114m、東西82m、高さは北墳が22.6m、南墳が21.9mである。南墳の調査が行われ、主塚と副塚が検出されている。主塚は地面を45cm掘り下げ、人頭大の川原石を30cm敷き詰め、その上に20cmの厚みで小石を敷く。主塚、副塚を作り、2列に組み上げた足場を作り、その内側に横石を行っている。塚全体は横石で覆われて堅固にした上に、盛土を行っている。

天馬塚は皇南大塚を発掘調査する事前の予備調査として実施された。墳丘は全長60m、幅51.5m、高さ12.7mをもつ。主体部は横石木塚で、周囲に石壇を築いている。木塚は校倉風に組立てられ、周囲を川原石と礫で覆っている。この規模は径20m、高さ7mであった。この古墳は副葬品に白樹皮製馬具の障泥があり、天馬が描かれていたことから天馬塚の名前が付けられた。古墳は陵苑内に保存され、見学することが出来る。

新羅の墳丘構造は中心部を横石にし、その上部を封土積みとしている。新羅の墳丘構造は伽耶地域にも影響し、横穴式石室を持つ梁山夫婦塚にも横石構造がみられる。

このあたりで我が国の横石塚の流れを見てみよう。横石塚が最初に出現した地域は長崎県の対馬である。上対馬町の経塚墓は3基よりなり、土壇内に板石で箱式石棺を組み立てたもの。正方形、長方形に横石を行ったものがある。棺内から弥生土器、韓式土器、ガラス小玉が出土していて弥生時代、後期前葉の年代が与えられている。

塚塔崎墳墓群35号墓は長崎県下県郡にあり、35基の内35号墓のみが弥生時代～古墳時代初頭の墳墓であった。主体部は箱式石棺である。

長崎県中熊遺跡も弥生時代前期末～中期初頭の横石塚として知られている。主体部は箱式石棺である。佐賀県では三養基郡上峰カメ棺遺跡が知られている。弥生時代中期のもので、カメ棺の上に小礫を積み上げ横石塚にしていた。弥生時代の横石塚は朝鮮半島に近い長崎県対馬や佐賀県にみられ、埋葬施設も箱式石棺で、大陸・朝鮮半島の墓制の影響と見ることが出来る。

古墳時代にはいと長崎県下県郡の鶴ノ山横石塚が知られている。前方後円墳で主体部は箱式石棺で、銅鏡、鉄剣、鉄刀、碧玉製管玉が出土している。

我国における本格的な横石塚は香川県の石清尾山古墳群である。前方後円墳、双方中円墳、円墳など60基からなっている。代表的な猫塚古墳は主軸長97mの双方中円墳である。中円部中央から東南寄りに、割石小口積みの竪穴式石室が検出されている。また中円部の北東隅部にも竪穴式石室が存在していた。内行花文鏡など鏡が5面、石銅、銅剣、銅鏡、鉄刀・剣、土師器壺などが出土している。

石船塚も石清尾山古墳群の代表的な一基である。3段の横石前方後円墳で、全長は63m、円筒地輪をもつ。主体部は割竹形石棺で、枕を作りつけている。

香川県善通寺市の野田院古墳、坂出市西庄町示威爺ヶ松古墳、高松市横立山経塚古墳も代表的なものである。隣接の徳島県にも三好郡の丹田古墳、徳島市の八人塚古墳が知られている。

古墳文化の中心地である奈良県には横石塚古墳は知られていない。しかし韓国新羅の王陵群と同じように墳丘を葺石で保護した中山大塚古墳などがある。

中山大塚古墳は大和古墳群の一基で、全長120mの規模をもつ。後円部に、主軸に平行する竪穴式石室を

持ち、石室内から銅鏡片、鉄刀などが出土している。後円部に特殊器台などを置いていた。墳丘の試掘調査を行ったところ、基底部に高さ約1mの石列を設け、その上に約35°の勾配で厚み0.9mの葦石で封土を覆っていることが判明した。中山大塚古墳の場合、これらの葦石は全面露出していたとみられ、全山石積みの印象を受ける。ところが墳丘内部は堅固な盛り土である。埋葬施設の竪穴式石室の石材、石室の控え積みと石室全面を覆った大量の石材は新羅古墳木柵周辺の積石との共通性を感じる。

中山大塚古墳の北方にある前方後方墳の下池山古墳では、葦石が施されているが、厚く石積をしいている状況ではなかった。しかし西殿塚古墳東裾部の調査知見では、葦石は厚く施工されていた。

それでは長野県の古墳ではどうであろうか。

松本市の弘法山古墳は全長66mの前方後円墳である。主軸に平行して竪穴式石室が存在した。石室は5mを越える巨大なもので、川原石に角礫を混えて積み上げているが、天井石を欠く点で石柵と呼ぼうとの意見もある。四獣鏡、銅鏡、剣、斧、鉾、ガラス小玉などが検出されている。石室と棺では、先に述べた大和の前期古墳と共通する点がある。

次に更埴市の森將軍塚古墳を紹介しておこう。全長90mの少し変形した前方後円墳。後円部東側に台形上の突出をもつ。後円部中央に2段掘りの墓壇をもち、この中に扉平板石積の巨大な竪穴式石室を構築する。石室内から三角縁神獣鏡片、鉄鏡、剣、刀子、槍、勾玉、管玉、土師器などの副葬品が出土している。墳丘は裾部に石垣状の葦石を積み上げ、さらに上下に連続する大形石材で区画して、この中を葦石で埋めて、全山を石の山に築いている。

長野県の前期古墳の中には、弘法山古墳のように埋葬施設に大量の石材を使い、墳丘は盛り土にしているものと、森將軍塚古墳のように埋葬施設と墳丘の両方に大量の石材を使った古墳がある。しかし森將軍塚古墳は墳丘に段築と輪郭列、埋葬施設に竪穴式石室を設けるなど、畿内古墳の要素が非常に強い。大量の石材を使っているが、封土にかかわって積石を行った鐘塚1号墳、2号墳とは大きな差がみられる。

## 5 鐘塚古墳群の被葬者像

鐘塚古墳群の調査結果と、鐘塚1・2号墳の墳丘が積石で築成されていることから、積石塚の系譜について概説してみた。

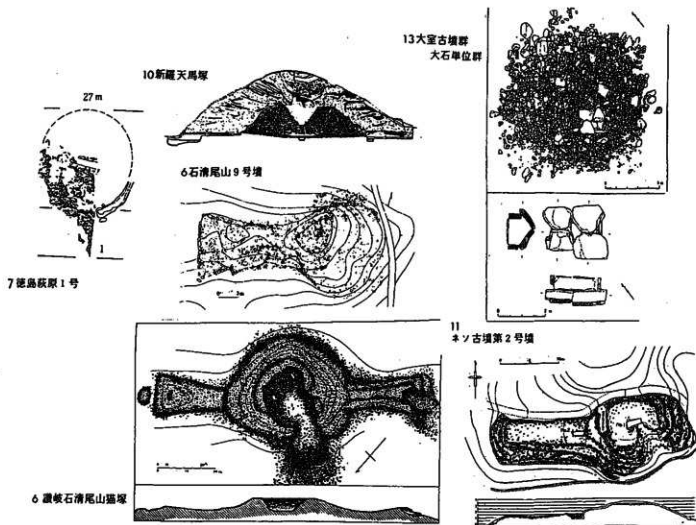
積石塚が中国東北部か南ロシアが起源であっても、それらが高句麗の積石塚に繋がり、朝鮮半島の国々でいろいろな影響を与えながら我が国に伝わってきたことは事実であろう。

積石塚が長崎県対馬や佐賀平野の弥生時代の墳墓に存在することは、伝播ルートを示していると言えよう。その後、海戸内海周辺から和歌山県側に、そして長野県須坂の鐘塚古墳に現れてくる。大和の前期古墳には墳丘を保護した葦石や、埋葬施設を構築した大量の石材の使用に積石塚の影響が多く見られるが、これも畿内政権（大和）が仲介していることを証明するもので、朝鮮半島の古墳が鐘塚1号墳に直接の影響を与えたとはいえない。一方、6～7世紀の積石塚が文献などの援用から、渡来人との関わりを説明することも可能かも知れない。しかし最初に出現した八丁鐘塚1号墳については、渡来人との関係を直接結びつける資料はない。初期の積石塚が香川県、徳島県に集中している事実、またこれらの古墳の近くで封土を築成出来る土砂があるにもかかわらず、積石にこだわっている点に注目したい。

香川県石清尾山古墳群では猫塚・姫塚などが本格的な積石塚を構築している。善通寺市野田古墳でも徳島県の丹田古墳や八人塚古墳でも同じく積石塚にしている。

また横立山経塚、野田院古墳、大窪ケルン古墳、爺々松古墳、八人塚古墳は、前方後円墳では最も重要な後円部だけを石で積み、前方部には盛り土や地山加工を施している。つまり重要な後円部だけに積石を行い、他は盛り土にしておく意図もみられるのである。

爺々松古墳では前方部が地山整形で造り出されているが、後円部からの積石が前方部までおよんで、葦

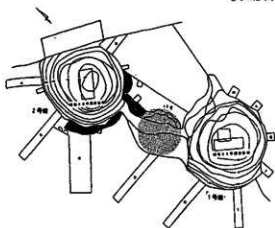


積石塚の流れ				
中国	BC 3000	BC 2000 ~ B 1500	BC 800	BC 200
ロシア	遼寧省牛河梁積石塚 (紅山文化期)	遼東半島 老鉄山積石塚 將軍山積石塚 四平山積石塚 (青銅期時代)	ミヌスク カラカス文化	バジルク古墳 ノイン・ウラ古墳
朝鮮半島	箱式石棺	BC 1500 ~ BC 1000 西海矢島積石塚 沈村里積石塚 泉田里積石塚		(朝鮮半島 積石)
日本				

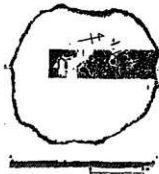
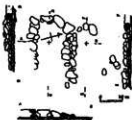
図3 日本の積石塚の系譜



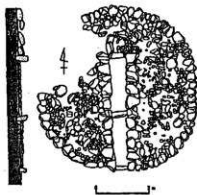
9 浪板市八丁廻塚古墳



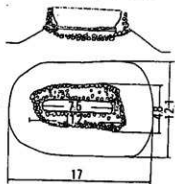
8 浜北市内野二本谷横石塚



14 赤川市行幸田第5号古墳



12 中山大塚



横石塚の流れ

高句麗横石塚 400 通溝將軍塚  
 蔚山中山里 ..... 新羅王陵群 .....  
 石村洞古墳群

対馬経隔墳墓  
 対馬塚塔埼墳墓  
 佐賀上峰棺墓

熊知ネソ横石塚  
 石清尾山古墳群  
 中山大塚  
 鐘塚1号・2号墳

8 C  
 猫谷地古墳群  
 五条丸古墳群

..... 弘法山古墳 ..... 森將軍塚古墳 ..... 大室古墳群 .....

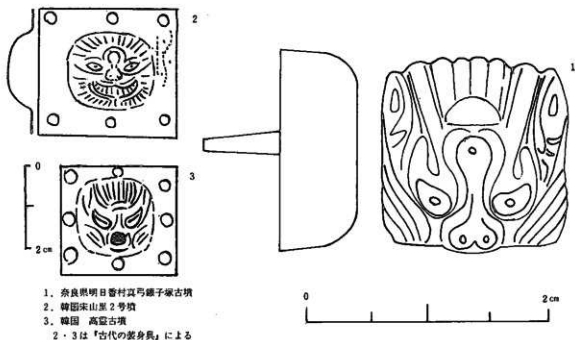


6. 広田遺跡 7. 平松箱式石棺 8. 向野田古墳 9. 草場第二遺跡  
10. 竹並の古墳 11. 新庄天神山古墳 12. 惣崎山4号墳 13. 権乳山  
51. 号墳 14. 紫金山古墳 15. 龍ヶ岡古墳 16. 松林山古墳 17. 甲  
斐鏡子塚古墳

図4 古墳時代前期の貝鏡の分布 木下尚子「考古学雑誌81-1」1996による

石的な役割をはたしている」と報告されている。

大和の古墳や信濃の古式古墳に積石塚的築造方法が見られても、墳丘内に内蔵される埋葬施設が封土で被われ、墳丘の葺石が長い年月の間に墳頂や墳丘上段部の封土の土砂で埋まってしまっている。これら封土の古墳と積石が遠望できる古墳とは、やはり一線を画さなければならない。日本古墳文化の流れの中で積石塚は初現的タイプの一つとして位置付けるのか、封土と葺石という定形化した畿内古墳に対し、何らかの規制を受けて生まれ、発展していったのか、色々な解釈の出来るところであろう。



1. 奈良明日香村真弓鏡子塚古墳  
2. 韓國宋山里2号墳  
3. 韓國 高靈古墳  
2・3は「古代の装身具」による

図5 獅子嚙文鈿板

香川県鷺ノ山の石材が石清尾山古墳群の石船塚古墳の割竹形石棺として存在し、その類似のものが大阪府玉手山安福寺藏の割竹形石棺、堺市二本木山古墳の割竹形石棺、さらに大阪府柏原市松岳山古墳の長持形石棺材にみられるなど、香川県、徳島県の前期積石塚古墳の被葬者達が畿内中枢部の首長達と深い繋がりがあったことの根拠になっている。

海に面したこれらの地域の人たちは海を支配し、古墳の石材運搬を含めて墓作りに深く関わっていたとみられる。石清尾山古墳群の猫塚では、優秀な鏡鑑と共に石剣なども見られる。副葬品に鏡と石剣を持っていた点を注意しておこう。

ところで鏡塚1号墳の遺物には、鏡（方格規矩鏡）と石剣の存在が確認されているが、これに加えてゴホウラ製銅2点と、スイジガイ製銅1点が出土している。貝鏡が出土する前期古墳をみると、イモガイ製銅を副葬する古墳は多いが、ゴホウラ・スイジガイ製銅の出土は少ない。ゴホウラ・スイジガイ製銅が出土しているのは福岡県行橋市竹並の古墳、大阪府紫金山古墳、福井県足羽山竜ヶ岡古墳、静岡県松林山古墳、山梨県甲斐鏡子塚古墳などである。

イモガイ製銅に枠を広げると、熊本県田野田古墳、大分県草場第二遺跡97号石棺、岡山県新庄天神山古墳、香川県岩崎山4号墳、兵庫県権現山51号墳、などの例を挙げることが出来る。熊本県や大分県、香川県へとその分布範囲は海との関わりが深い地域に広がっている。

積石塚からの出土ではないが、貝鏡と積石塚の分布範囲は瀬戸内海地方では重複している。海に面した地域の前期古墳文化が、何らかの理由で海のない長野県まで伝播していったと考えなければならない。そうだとすれば、貝の道は日本海回りで長野県須坂の地に達したのか、または畿内からブレ東山道のルートで静岡県松林山古墳、山梨県甲斐鏡子塚古墳へと伝わった。この同じ頃、長野の地にも伝わったともみられる。静岡県松林山古墳、山梨県甲斐鏡子塚古墳は共に銅鏡、石剣など、畿内と結び付きの多い遺物が出土している。

長野の地はすでに紹介した松本市弘法山古墳、更埴市の森將軍塚古墳、長野市川柳將軍塚古墳など、前期古墳が分布して独自の古墳文化を發展させた地域であるが、信濃川の右岸、鮎川の流域に忽然と現れた鏡塚1号墳は、何らかの政治的意図があって出現したのではないかと見られる。

瀬戸内海地方で積石塚古墳を築いていた人々が、東国への移動・移住の手始めとして長野の地に新たな古墳文化を築いたことが考えられる。貝鏡の表面にみられる刻線が、別府湾周辺の古墳にみられることも傍証資料になろう。

また鏡塚2号墳の鍍銀銅製獅子嚙紋鈔板は、岡山県長船町牛文茶臼山古墳からも出土しているが、これは積石塚古墳ではない。しかし茶臼山古墳は瀬戸内海地方の古墳で初期の横穴式石室をもち、画文帯神獸鏡、貝鏡、冑の小札などが出土していることは無視できない。

獸面あるいは獅子嚙紋鈔板帯金具の出土例では、奈良県明日香村越の真弓鏡子塚古墳のものがある。これは銅板を打ち出して文様を現した鏡塚2号墳出土品と異なり、縦1.7cm、横1.6cmと小形で、しかも鍍金の施された鋳造品である。

鏡塚2号墳の帯金具が、韓国宋山里古墳群のものと類似するからといって、舶載された遺物を被葬者論に結びつけることには難しさがある。その前に鏡塚1号墳の性格を検討した上で、鏡塚古墳群全体を考察する必要がある。

## 参考文献

- 1 小林孝彦編『八丁鎧塚古墳』須坂市教育委員会 1997
- 2 黒沢正三編『鎧塚第2号墳』須坂市教育委員会 1985
- 3 須坂市教育委員会編『八丁鎧塚第1号古墳、第2号古墳』 1995
- 4 水野清一・小林行雄『図解考古学辞典』東京創元社 1959
- 5 梅原末治『關東州史前文化所見』『東亞考古学論攷』1944
- 6 李 亨求『東北アジアの石墓文化について』『考古学論攷第16冊』奈良県立橿原考古学研究所 1992
- 7 梅原末治『日鮮史前末期の墓制について』『東亞考古学論攷』 1944
- 8 秋山進午編『東北アジアの考古学研究』同朋舎出版 1995
- 9 東 潮・田中俊明『韓国の古代遺跡1 新羅篇』中央公論社 1988
- 10 東 潮・田中俊明『韓国の古代遺跡2 百濟伽耶篇』中央公論社 1989
- 11 東 潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社 1995
- 12 李 亨求『韓国古代文化の起源』東洋学10 韓国 1991
- 13 齊藤 忠『積石塚考』『古墳文化と壁画』齊藤 忠著作選集 雄山閣出版 1997
- 14 亀井正道『積石塚研究の課題』特集積石塚『月刊考古学ジャーナルNo.180』 1980
- 15 日高正晴『積石塚の地域相—九州地方』『月刊考古学ジャーナルNo.180』 1980
- 16 松本登胤『積石塚の地域相—四国地方』『月刊考古学ジャーナルNo.180』 1980
- 17 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学考古学調査報告12冊 1933
- 18 木下 亘・他『中山大塚古墳発掘調査中間報告』『第10回 公開講演会資料』奈良県立橿原考古学研究所 1993
- 19 泉森 蛟『墓石とその源流』『第12回公開講演会資料』奈良県立橿原考古学研究所 1995
- 20 木下尚子『貝輪と銅鐃の系譜』『季刊考古学第5号』雄山閣出版 1983
- 21 木下尚子『古墳時代南島交易考』『考古学雑誌第81巻第1号』日本考古学会 1996
- 22 齊藤 忠『古代の装身具』塙書房 1963
- 23 齊藤 忠『獣首面のある帯金具』『古代朝鮮文化と日本』齊藤 忠著作選集2 1997
- 24 梶原 健『積石塚と渡来人』東京大学出版会 1989
- 25 千賀 久『真弓鑑子塚古墳 明日香村』『大和考古資料目録3』奈良県立考古博物館 1975

## 第2節 東北アジア・積石塚の中の八丁鍔塚古墳群

石野 博信

### 1 はじめに

八丁鍔塚古墳群は、東日本の積石塚の中で極めて特異な性格をもつ点で著名である。特に1号墳が4世紀後半の積石塚で東日本最古に位置づけられることと、2号墳の鮮喩文帯金具である。さらに近年、橋本博文氏によって1号墳出土の方格規矩四神鏡片が京都府太田南5号墳出土の青龍三年鏡(235)ともっとも類似することが注目された。同鏡の製作年代は、まさに倭国の女王卑弥呼の時代であり、本項もそこから始めることとする。

### 2 信州八丁鍔塚人は、3世紀前半に中国・魏で製作された鏡を、なぜ4世紀後半の古墳に埋納したのか

#### (1) 橋本博文説の紹介

1998年、橋本氏は須坂市立博物館で八丁鍔塚1号墳出土の方格規矩四神鏡を実見され、次のような私信を同博物館の小林宇彦氏に寄せられた。同鏡の細部がはじめて類似鏡と比較検討された見解として貴重であるので、橋本、小林両氏のご諒解を頂き、以下にはほぼ全文を引用させていただくこととした。

「鍔塚(1号墳)の鏡は、まず魏の方格規矩四神鏡と考えてまちがいないと思います。しかも内区の破片に玄武が描かれていますが、その表現は青龍三年鏡がちかひように思われますので、かなり古い段階の鏡と考えられます。そもそも玄武を表現する魏の方格規矩四神鏡は数少なく、その点だけでも貴重な資料であることは疑いありません。

方格内の四葉座(実際は蓮華の花弁をあらわしているはずですが)の表現は漢中期の方格規矩四神鏡を比較的忠実にうつしているようです。また多くのばあい十二支銘が配される場所に描かれているのは芝草紋のように思われますが、これも珍しい例です。TLVの図紋はTだけが確認できますが、本来はおそらくすべて揃っていたのだらうと思われます。

玄武の表現は亀の甲羅・頸・尾が確認でき、脚は四本の線で表現しているようにみえます。甲羅の模様はよくわかりませんが、絡みつく蛇の鱗を線で簡略にあらわす手法などは、この種の鏡に特有の手法です。また内区外周の葡萄紋が斜線になっているのは津古生掛鏡などと共通する特徴ですが、これも漢中期の方格規矩四神鏡を継承するものと考えられます。

銘文がないのは、玄武を表現する鏡では少なく、同類を見いだすのは困難ですが、さして問題にする必要はなからうと思います。ともあれ全体的特徴からみて、もっともちかい鏡は青龍三年鏡と思いますが、玄武の蛇の絡み方はむしろ椿井大塚山鏡と共通します。ともあれ魏の方格規矩四神鏡としては初期の鏡にちかひないと考えられるので、製作された年代は250年よりも古く位置づけてよいのではないかと考えています。(以上原文のまま)

橋本氏の指摘要点はつぎのとおりである。

- ① 玄武の表現は「青龍三年鏡」に近い。
- ② 内区外周の葡萄紋は福岡県津古生掛鏡に近い。
- ③ 玄武の蛇のからみ方は京都府椿井大塚山鏡と共通する。
- ④ 八丁鍔塚1号墳鏡は魏の方格規矩四神鏡で、その製作年代は250年よりも古く位置づけてよい。

従来、鎧塚鏡についてはさほど注目されていなかった。鎧塚の原点である永峯光一、亀井正道両氏の報告では次のように指摘されている。

鏡片2個のうちの一つは「方格規矩四神鏡の内区破片であって一見舶載鏡ではないかとの疑を抱かせるが、仔細にみると図文の配置や表出方法において若干異なるところがあり、錆上がりも良好でなく仿製の優品に属するとすべきであろう。<sup>11)</sup>」その後、1994年に丹後で青龍三年銘をもつあまり錆上りのよくない方格規矩四神鏡が3世紀後半の土器と共に検出され、橋本氏の見解が生まれてくる余地が出てきた。

## (2) 3世紀の中国と倭——類似鏡出土古墳の歴史的背景

中国における青龍3年(235)とは、どのような時代なんだろうか。当時、中国では魏・蜀・呉の三国が相争っていた。その戦争の中で、234年に蜀の軍師、諸葛亮孔明が死亡し、魏は南方戦線から軍を引き上げることができた。235年、魏は蜀との戦いに奮戦した司馬仲達を大尉とし238年には燕王を名のった公孫氏を滅ぼした。さらに、235年には新たに太極殿の造営が始まっている。これによって倭と魏との交通路が安泰となり、景初3年(239)に倭国女王卑弥呼は魏に遣使した。

青龍3年鏡は中国の激動の時期から安定の過渡期の製作であり、卑弥呼が魏から賜られたという「銅鏡百枚」の内の1面である可能性が高い。しかし、狩野直禎氏(中国史・京都女子大学)によると、青龍3年(235)に中国東北部の遼東半島から楽浪・帯方のあたりを領域としていた公孫氏は、魏の年号を使っていた可能性が高いとのことであり、<sup>12)</sup>魏の年号である青龍銘であっても魏の製作ではなく、公孫氏製作の可能性がでてきた。そうなる問題はさらに拡大し、3世紀の日本列島各地の倭国連合内外の王たちが中国三国や公孫氏と直接交流して織物・太刀・鏡などの中国製品を入手した可能性を考えておかなければならない。<sup>13)</sup>ことによると、鎧塚鏡は日本海沿岸諸国の王から入手したか、自らが使者を派遣して入手した交易品であったのだろうか。

そのことを考えるために、類似鏡出土古墳の特色を抽出しておきたい。

太田南5号墳<sup>14)</sup>(京都府弥栄町、峰山町) 丘陵尾根にある6基の小古墳の一つ。墳丘は18.8×12.3mの不整形で、中央部に長さ約1.8mの組合式箱形石棺がある。副葬品は鏡1面だけで、土器が副えられていた。丹後には、弥生後期から古墳時代前期にかけて丘陵尾根上をカットしただけの台状墓が数多くあり、太田南古墳群もそのような例の一つにすぎない。中でも5号墳は、同古墳群の中で墳丘や墓の規模は小さく、鏡も2号墳の画文帯神獸鏡の方がすぐれている。年号銘がなければほとんど注目されない鏡であり、古墳である。

津古生掛古墳<sup>15)</sup>(福岡県小都市) 丘陵頂部にある全長33mの早期前方後円墳。中央部に木棺があり、舶載の方格規矩鳥文鏡1面とガラス玉・鉄鏃・鉄剣などが出土した。墳丘裾には方形周溝基6基、円形周溝基1基、木棺3基があり、古墳周溝や周溝基内から3個の鏡形土器と庄内式新相併行の土器が多数出土した。同古墳は北部九州の早期古墳の代表例の一つであるが、同地域には直線する全長66mの前方後円墳、三国の鼻古墳があり、大型墳には入らない。

椿井大塚山古墳<sup>16)</sup>(京都府山城町) 丘陵尾根端にある全長約180mの前期前方後円墳。32面以上の三角縁神獸鏡を持つ古墳として著名な南山城の4世紀中葉、後半の豪族墓である。近年調査された奈良県天理市黒塚古墳(全長130mの前期前方後円墳)の鏡群との親縁関係が指摘される。一方、神功紀に伝えられるカゴサカ王・オシクマ王の反乱伝承の主としてヤマト政権の敵対勢力に擬せられてもいる。築造年代は、普通4世紀初とされているが、私は近年の山城町教育委員会による墳丘確認調査資料をもとに古くみても4世紀中葉と考えている。<sup>17)</sup>

以上3基の古墳の概略を紹介した。椿井大塚山古墳の三角縁神獸鏡群については、239年に卑弥呼が魏王朝から下賜された「銅鏡百枚」の一部だという小林行雄説があるが、黒塚古墳の調査によって小林説は崩壊した。

鏡塚と古墳との関係は、むしろ津古生掛古墳や太田南5号墳のあり方と共通する点が多い。鏡と鏡塚古墳の関係は、意外に古い日本列島の積石塚の系譜を整理した上でかんがえよう。

### 3 初期積石塚の系譜

本項で取扱う積石塚とは、石だけの墳丘はもとより、土石混合墳、弥生貼石墳も視野に入れつつ系譜を追ってみたい。

#### (1) 日本列島内の動向

① 紀元前2・1世紀の積石塚 1997年に香川県白鳥町成重遺跡に弥生中期の積石遺構が現れた。<sup>109</sup> 河川敷のような石ころだらけの平地に、径5～13m、高さ50～80cmの積石遺構が約30～40mの範囲内で7基検出された。

香川県教育委員会は、遺構の重要性を考慮して事業者と協議して現状保存されることとなり、したがって、墳丘内調査は2基にとどまった。その結果、墳丘の築造は次のとおりに行われたことが分かった。

- i 旧地表面に礫をおく。不整形形で礫厚は10～15cm。礫内には多量の土器片が入る。
  - ii 礫上に土をおく。土をおく範囲は下層礫の範囲より小さい。土の厚さは、20～30cm。
  - iii 土の上に再び礫をおく。礫内には土器片が多く、その上に2・3個の大石(50～80cm)をのせる。
- つまり、積石遺構は構造物であり、自然堆積ではない。その築造時期は、礫内の土器群によって近畿の弥生第3様式(新)に併行する。問題は、何のための構造物か、という点にある。

調査した2基の積石遺構のうち1基の下層礫群の下から浅い土坑が2基検出された。土坑は長い方形で人体を納められる程度の大きさであるが、土坑内外の土砂の区別が難しく、しかも深さ約5cmと浅い。普通は、木棺墓とは認めがたい。

私は、一つの可能性を考えた。旧地表面に木棺2基を並置し、そのまわりに礫敷を行い、先に示した手順で上層に盛土し、集石した、と。その場合、木棺は土圧で沈むだけなので、内外の土砂の区別は難しくなる。礫内の土器片は葬送儀礼に使用した土器を破砕納置したのであろう。

このように考えると、確実ではないが類例があることに気づいた。著名な香川県説問町紫雲山遺跡である。紫雲山遺跡は、もともとは瀬戸内海に浮かぶ島で、標高350mの山頂の高地性集落であり、佐原眞氏によって石鏃武器論が提唱された。<sup>110</sup> 発掘調査区には礫が散在し、部分的に集石塊や列石が認められる。人工らしいのは列石のみであるが、石群の間に多量の土器が含まれている点は成重遺跡と同じである。



写真 紫雲山遺跡の積石塚(中世?)

同じ山頂に未調査ながら注目すべき積石塚がある。径7～8mの円形に礫を組み墳丘上に3個の大石をのせている。報告書ではもとより弥生時代ではなく、中世の所産としているが、成重遺跡とのあまりの類似に驚かされる。

② 紀元後2～4世紀の積石塚 紀元前2・1世紀の積石塚が存在するらしい香川県と隣接する徳島県に、すでに10数年前に調査された2つの積石塚群がある。一つは、香川県普通寺市稲木遺跡である。<sup>111</sup> 稲木遺跡には、約50×60mの範囲に9基の「集石墓」がある。すべて不整形で小は2.5×3.5m、大は7.5×



図1 紫雲出山遺跡の集石

17.5mまで様々である。集石内には土器片が多く9基中4基には集石下に土塚がある。特に4号「集石墓」は不整形に礫群があり、L字状に弥生後期の土器を5個掘すえてあった。成重遺跡との共通点が多く、重視して検討すべきである。

もう一例は、徳島県三好町足代東原遺跡である。<sup>119</sup> 低い丘陵上に径2～6m、高さ50～100cmの円錐形に礫を盛りあげた積石塚が、約14～190mの範囲に36基以上検出された。礫内には弥生後期から古墳早期（庄内式）の土器片があり、およその築造時期を示す。中には、全長16.5mの前方後円形の積石があり、埋葬施設は箱形石棺が想定されている。

香川・徳島両県の確実な積石塚は、初期前方後円墳の香川県高松市鶴尾4号墳と徳島県板野町萩原1号墳である。鶴尾4号墳<sup>120</sup>は、石清尾山山塊の一端にある全長40mの前方後円墳で、内法長4.7mの竖穴石室をもつ。共伴する土器によって3世紀後半に位置づけうる。方格規矩四神鏡一面が出土している。

萩原1号墳<sup>121</sup>は、丘陵根端にある全長26.5mの前方後円墳で、内法長4mの竖穴石室がある。

このあとに続くのが著名な4世紀の石清尾山古墳群<sup>122</sup>であり、日本列島を代表する前方後円形積石塚

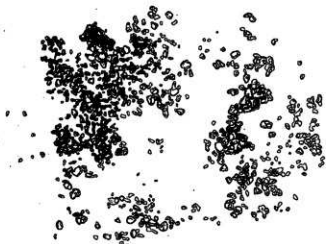


図2 稲木遺跡の集石（部分）



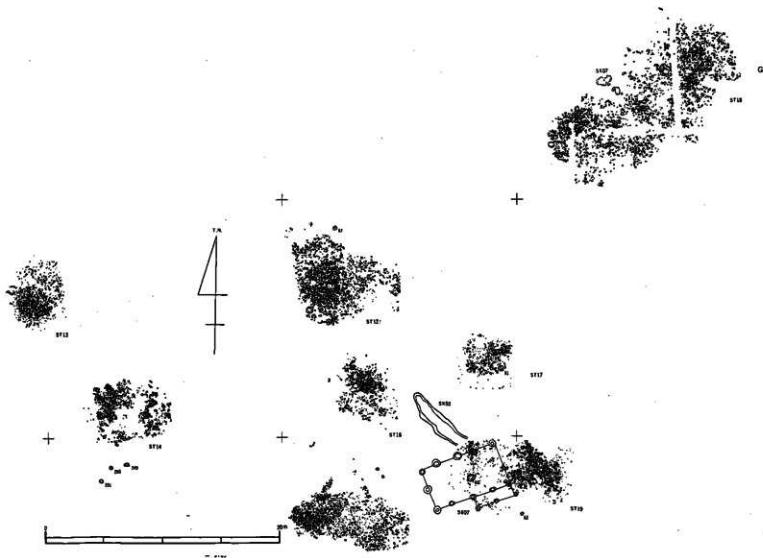


図3 稲木遺跡「集石墓」分布図

群と言ってよい。背丈ほどの階段状石垣が特異である。

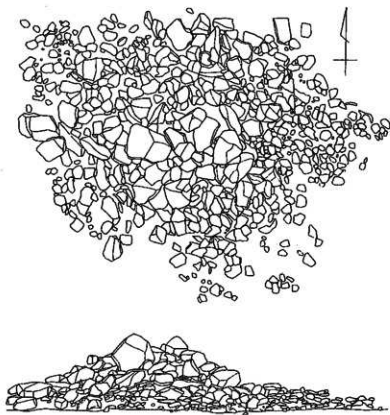
### ③ 4・5世紀の長野県の積石塚

積石塚ではないが木鳥平村根塚遺跡の石積遺構は特異である。<sup>(18)</sup>長径60m余、比高15mの独立丘陵の頂上平坦面を含む約30mの丘陵斜面に3段に乱雑な石積みがL字状にめぐる。3段築成の方壇のように見るよりは、地形に合わせて乱雑な石積みをしたとみる方がふさわしい。3段の石積みの下段と中段に約1～1.5mの間隔で柱穴がある。櫓がめぐっていたらしい。丘頂縁辺には集石墓らしき遺構があり、丘陵西端には被覆粘土の下にワラビ手鉄剣が、東端には墓塚群がある。石積みの中から箱清水式土器と吉田式土器が出土している。3世紀後半のいまだ類例のない墓地か祭場であろうか。ワラビ手鉄剣は加耶系といわれ、近くから「大」の字らしき刻書土器が出土している。

長野県の積石塚地帯に含まれる中野市高遠山に全長55mの土による前方後円墳が出現した。<sup>(19)</sup>後円部に墓壇壁の一部を石積みする2つの埋葬施設がある。大きくて新しい棺は鉄弁1、ヤリガンナ2と副葬品は少ないが、内法長約6mの木棺痕跡部分のすべてを厚さ約5cmの木炭で囲んでいる。内法約4mの古い棺からは鉄剣・鉄弁・銅鏡・ヤリガンナ・玉類など比較的豊富な副葬品がある。棺の周辺から箱清水式の櫛幅文をもつカメ片多数と1点の東海系高環が出土した。赤塚次郎氏によると高環は廻間3式初頭であるらしく、編向4類<sup>(17)</sup>＝3世紀後半に併行する。

そして、4・5世紀に八丁館塚の積石塚が登場する。八丁館塚2号墳の墳丘確認調査によると基底部に

特異な構造がよみとれる。現墳丘  
 端の石垣が当初の形態をとどめて  
 いることが確認されているが、そ  
 の外側に幅1m余の石敷がある。  
 石敷の上面は石の平らな面を上  
 に向けていて、平坦な面を形成しよ  
 うとした意図が感じられる。そし  
 て、平坦面は墳頂端の石垣の下に  
 入り込み、墳丘内へと続いている  
 らしい。墳丘下部の平坦な石敷は、  
 墳丘北東側の1985年の調査でも確  
 認されており、<sup>(10)</sup> 今回の南西側と  
 南側の調査成果と重ねると、墳丘  
 下全面に平坦な石敷を推定でき  
 る。あるいは、この石敷面の墳丘  
 中央部に木棺を安置して石を積み  
 あげたか、新羅古墳のように木柩  
 を安置したのだろうか。



0 2m  
 図4 足代東原遺跡の積石塚

(2) シベリア・中国東北部と朝  
 鮮半島の積石塚

1991年8月25日、ソ連考古学のメッカの一つ、バジリク・クルガン群を見た。ヘリコプターは3・4号  
 墳から1・2号墳に向かい、1号墳と4号墳の間に着地した。1・2号墳は、1947～49年にS. I. ルデ  
 ンコ氏によって発掘されたスキタイ時代(B. C 6世紀～B. C 3世紀)の凍結クルガンである。クルガ  
 ン(塚)の中には約50㎡の丸太積方形墓墳があり、木棺の内外から凍結ミイラと夥しい金属製品・皮革製  
 品・絹織物などが出土して世界中を驚かせた。生活文化は、ヘロドトスの『歴史』に描かれているスキ  
 タイ人と同じく東西文化の交流センターの役割をはたしていたらしい。クルガンはすべて石で、1・2号墳  
 は特に約40年前の発掘当時のまま掘り出された木柩材が散乱していた。バジリク・クルガンに行くまでの  
 2週間は、アルタイのベルテック高原のクルガン群の調査に参加した。径5～15mの円形に礫を積むか高  
 さは20～30cm程度で円盤のようである。円盤の下に長方形の深さ4～5mの墓墳を掘り、人体埋葬と馬の  
 殉葬を行っている。バジリク・クルガンに比べると小さく低平で副葬品も極めて少ない。

王墓群と小規模群集墳ほどの差がある低平な積石塚は、紀元前300年頃に高句麗に登場する。古墳群には  
 低平な前方後円形の積石塚があり、日本列島の前方後円形の遠いルーツになるかもしない。<sup>(10)</sup> 前方後円墳  
 との関連よりも、成重遺跡などで明らかになりつつある、弥生中期の積石塚に直接つながって来る可能性  
 が強い。アルタイ・ベルテックの低平な積石塚は、さらにその淵源となるものであろう。

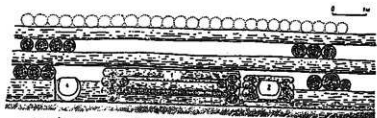
4 おわりに

4世紀後半の八丁鍬塚人が持っていた3世紀前半の鍬は、日本海沿岸の丹後半島・太田南5号墳と北九  
 州の津古生掛古墳に類縁があった。原産地が中国東北部の魏か公孫氏ということになると朝鮮半島とのつ  
 ながりを考えなければならない。

弥生積石塚と3・4世紀の積石塚は、香川・徳島の両県に集中する。しかし、両地域と長野県の関係を  
 示す資料は特になし。八丁鍬塚の被葬者が渡来系の人々であれば、本来は海洋民であった可能性が高い。

そう考えると鑑塚の南海産の貝類も理解しやすい。そして、間接的に讃岐、阿波の海洋民との関係も生まれてくるが、現段階では明らかではない。

今後の展望としては、日本海を通じての朝鮮半島との交流を示す直接的な資料の検出に期待すべきであろう。



アルジャン

Рис. 7. Камера I. Разрез.

а, в — по линиям АВ и ВГ; а, в — реконструкция; арабские цифры — высота метра.

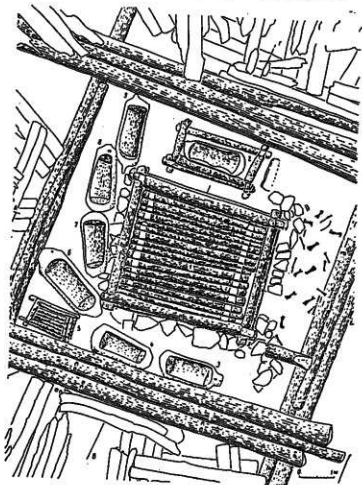


Рис. 6. Камера I. План.

Диффуз — высота метра.

図5 ロシア共和国アルタイ自治州アルジャン遺跡并柘木郡墓

## 文 献

- 1 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鎧塚古墳の調査」考古学雑誌45-1、7頁、1959
- 2 狩野直樹「青龍3年前後の東アジア」『鏡が語る古代弥生』弥生町、1995
- 3 石野博信 註2、文献96頁
- 4 京都府弥生町役場編『鏡が語る古代弥生』同町、1995
- 5 宮田浩之ほか『津吉生掛遺跡1』小郡市報告40、1987
- 6 梅原末治『梅井大塚山古墳』京都府報告23、1964
- 7 石野博信『邪馬台国は見えてきたか』『歴史と旅』1998年10月号
- 8 香川県埋蔵文化財センター、森格也氏のご教示による。
- 9 小林行雄、佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会、1964
- 10 野中寛文・西岡達哉ほか『船木遺跡』香川県埋蔵文化財研究会、1989
- 11 菅原康夫『徳島県足代東原遺跡』『日本考古学年報』35、日本考古学協会、1985
- 12 渡辺明夫・藤井雄三『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市歴史民俗協会、1983
- 13 菅原康夫『萩原墳墓群』徳島県教委、1983
- 14 梅原末治『讃岐高松石滑尾山石塚の研究』京都大学報告12、1933
- 15 木島平村教委、高橋 桂、吉原佳市両氏のご教示による。
- 16 中野市教委、片桐千至紀氏のご教示による。
- 17 石野博信・豊岡卓之『羅向』第5版補遺篇、檀原考古学研究所付属博物館、1999
- 18 須坂市遺跡調査会編『鎧塚第2号古墳-隣接地確認調査-』須坂市教委、同調査会、1985
- 19 全浩天『前方後円墳の源流』

## 第6章 結 語

鐘塚には枕貸伝説があった。古人の言い伝えによると、家に来客があった時、この塚に来て客の数だけ膳枕を注文しておく、翌朝必ず出でてあったという。ところがある人が膳をこわしたまま返しておいたところ、その後は誰が頼んでも膳枕が出なくなってしまったという話である。このような伝説があって鐘塚は昔から村人に親しまれてきた。養蚕の盛んなころは塚の周りは桑畑で、その中に累々と石を積んだ塚が目だっていた。

昭和28年「上高井誌」編纂の計画がまとまり、編纂委員会が組織された。昭和30年高南村では須坂市合併のため、ありし日の村の姿を残そうとして村誌編纂事業がすすめられた。そこで昭和32年に上高井誌編纂委員会と高南村誌編纂委員会の共催により鐘塚の発掘調査が行われたのである。発掘がはじまったのは昭和32年8月5日で、指導者は永峯光一、亀井正道両氏であった。鐘塚は横石塚としては規模が大きく、その発掘は画期的な試みとして大いに期待を寄せられていた。発掘に要した日数は6日間で、人数は延べ163人であった。鐘塚の位置は鮎川の右岸で横石塚がたくさんあり、発見順に番号がつけられていた。今回の発掘は第1号墳と第2号墳であった。遺物は塚の中央部60cm～1mの間に集中していた。発掘のあと国学院大学大場磐雄教授の講演が行われた。

大場教授は横石塚は貧弱なものが多いので鐘塚もそんなものだろうと思っていたが発掘現場をみて大型のものでびっくりしたと前置きしながら出土した遺物についてまとめて説明された。1号墳では貴重なものとして貝銅と方格規矩四神鏡を取り上げ年代は5世紀前半と推定、特に貝銅はスিজガイという海産物で、信州で発見されたことに注目された。2号墳では馬具と帯金具が珍重すべき出土品といわれた。年代は1号墳より後れて6世紀前半とみられた。昭和40年に1・2号墳は県史跡に指定され遺物は同45年に市の指定有形文化財になった。

たまたま須坂市が古墳公園として整備しようとするため須坂市八丁鐘塚古墳群範囲確認調査団が結成され、平成6年3月7日～7月15日まで調査が実施された。調査団には岩崎卓也・石野博信・泉森 峻の三先生を顧問におねがいし、市立博物館の小林宇彦学芸員が主任となった。調査の結果古墳の規模は昭和32年のときよりも大きくなり、2号墳では張出部分が確認された。なお1号墳と2号墳の間に6号墳が発見されたのは大きな成果であった。出土品について今回は鏡・貝銅・帯金具の三点を専門家に調査していただいた。

鏡は方格規矩四神鏡で青竜三年鏡(235年)にもっとも近いことがわかった。そこから遺跡の年代は昭和32年調査の5世紀前半から4世紀後半とさかのぼることになった。つぎに貝銅であるが、これもスিজガイとゴホウラ貝の2種類あることが、熊本大学の木下尚子氏によって明らかになった。2号墳の帯金具は、東京国立文化財研究所保存科学部の研究によって古墳時代に中国華南産の鉛が利用されていることがわかった。2号墳の築造年代は5世紀後半と推定されることになった。以上述べたように平成6年の調査によっていくつかの問題が明らかになったのであるが、埋葬者については大和から須坂に来た人が、貝銅などの出土品から日本海ルートで入って来たか今後の課題として残された。

最後に今回の確認調査にあたってご指導いただいた顧問の三先生をはじめ直接発掘に参加されたみなさまに厚くお礼を申し上げ結びとする次第である。

須坂市八丁鐘塚古墳群範囲確認調査団  
団長 宮川 孝男

第1節 長野県須坂市鎧塚古墳の調査

永峯光一・亀井正道 (考古学雑誌45-1, 昭和34年)

長野県須坂市鎧塚古墳の調査

永 峯 光 一  
 亀 井 正 道

一、はし が き

中部山岳地帯の北部、峻しい山脈に開かれた善光寺平に、  
 積石塚の群が注意せられてからはかなり久しい。だが研究  
 の関心は積石塚そのものの基礎的な調査よりも、むしろ朝鮮  
 帰化人との関係や、分布状態あるいは構造上の特殊性に向け  
 られていたように思える。もつとも八〇〇基を優に超す当地  
 方の積石塚の大部分が、既に崩壊の危にかかつて擦滅に瀕し  
 ている状態では、また当然の偏趨であつたのかも知れないが、  
 その全貌を窺い知られるもの、僅かに故森本六福氏の研究で  
 有名な下高井郡金鐘山古墳を挙げ得るに止まることは、積石

長野県須坂市鎧塚古墳の調査

塚研究上の支障となつてゐる点を否定できないであらう。

鎧塚古墳は鎧塚地籍に存在する五基の積石塚乃至土石混合  
 墳の総称である。そのうち二基は傑出した大形の積石塚であ  
 り、今回の調査にかかると一号墳及び二号墳がそれである。大  
 正一二年五月、唐沢貞治郎・岩崎長思両氏によつて長野県史  
 蹟名勝天然記念物調査報告第一輯に報告され、同一年九月  
 一七日附をもつて長野県史蹟の指定をうけている。本稿にお  
 いては煩を避けるため、鎧塚の名称はこの一・二号墳に冠す  
 るものとしておきたい。

昭和二十七年夏、当時上高井郡誌編纂会歴史部長であつた興  
 津正剛氏と郡内各墳遺跡を踏査する機会を得たことがあつ

一 (一)

た。その一日、鍛塚を訪れ、草一本生える余地のない程に石の積み上げられた墳丘が、強烈な山の陽射しをざらざらと反射している光景に目を奪われた印象は、今も明瞭に蘇つてくる。積石による円形墳では最大級の規模と、ほぼ原形を保つて考えられた墳丘とは、それまで破壊されて醜い姿をさらしている数々の積石塚のみを見慣れてきた眼には、垂涙を禁じ得ぬ調査対象として写つたのである。興津氏もまた郡誌編纂事業の一環として発掘する計画を持たれたのであつたが、その後五年の歳月を聞き、興津氏がその職を去られたあとの現編纂委員諸氏の手引き継がれて、漸く実現の運びに至つたものである。

かくして昭和三年八月五日に始まり同一日に至る間、大場賢雄先生の指導を得て発掘作業が実施されたのであるが、希望に相反して両墳とも既に処女状態にはなく、出土遺物もまたほとんどは残欠でありながら、その中には極めて刮目すべき様相を備えていた。即ち、第一号墳からの出土遺物には二面分の漢式鏡片、水字貝製銅、碧玉製銅二片を含み、そこに古式古墳の色彩を看取し得たこと、及び第二号墳では獸首を跨出した金銅製帯金具三箇を檢出したことである。一般に信濃の積石塚は断片的に知られる出土遺物や遺存する内部構造等から推して、古墳時代後期を遡る存在ではないとする考えが通説化していたが、第一号墳の年代的性格が判明したことによつて大きく改める必要を生じることになつた。こ

の事實は当地方における積石塚発現の問題に関するものみならず、信濃の古墳文化あるいはそれを媒介として考えられる古代史上の論点に対しても、影響するところ渺しとしないのである。また第二号墳の金銅製帯金具は、わが國の古墳副葬品としては極めて稀な存在であつて、類品は岡山県赤見の一例を数えるにすぎず、遠く朝鮮の古墳副葬品に属せ認められるものである。彼我文物の交渉を物語ると同時に、積石塚の副葬品としては似合の遺物であるといえよう。所期した積石塚の基礎的調査の上では目的を充分に達成することができなかったが、以上の新知見を加えたことによつて、期待された成果に替へ得たとしてよいであらう。

先に触れたように、鍛塚古墳の発掘調査は高井郡誌編纂会多年の懸案であつたが、実施に當つては高井村誌編纂会との共同事業としてなされていく。この調査の機会をりえられると共に絶大の援助を惜しまれなかつた郡誌編纂会長上原吉之助、同歴史部長吉池圭計、城本重男、中島修一郎、御前郷の諸氏、村誌編纂会長岡根弥太郎氏はじめ関係者諸氏、並びに作業全般に助力を得た高井地区青年団各位、郡内中高校生徒諸君、及び終始調査の推進に尽力された桐原健氏に心から感謝の意を捧げたいと思う。

なお第一・二及び第五節は氷室、第三・四節は龜井がそれぞれ分担執筆した。



第一図 地形図及び古墳分布図

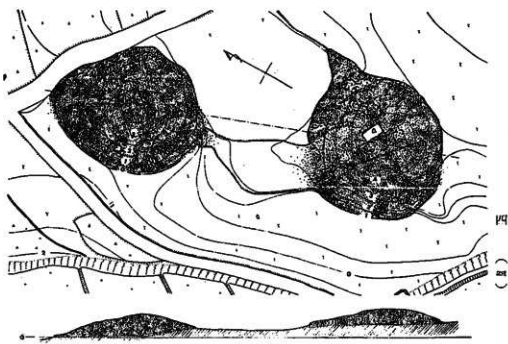
● 円墳 ▲ 積石塚



二、遺跡の立地

瑞光寺平の東縁を翻する上信國境山地の西麓は、盆地床の氾濫原に面して大小様々の谷口を開き、そこには千曲川に流入する小河川によつて典型的な扇状地形が展開されている。菅平高原の北東に聳える四阿山の北斜面に發し、深い米子の溪谷を作つて支流を集めつつ須坂市街の南縁を限つて千曲川に注ぐ百々川と、やはり菅平の北壁をなす根子岳に始まり、仁礼の谷を通つて百々川の兩方を流下し下流は百々川に合する鮎川とが堆積した須坂兩部の扇状地も、その比較的大きなもの一つである。この扇状地は谷口の方向に従い、北西に向う緩傾斜をなし、その相当部分は乗園記号によつて占められるが如き景観を呈する。また扇状地の南縁はそこを流れる鮎川によつて再開析され、小規模な段丘地形を形成しているが、段丘の下部に沿つて帯状の水田地帯が続く。

古墳の分布は半としてこの段丘の縁に沿う部分に見られ、掘塚もそのうちに含まれている。須坂市街を出て南に向い仁礼を経て菅平に通じる道路が、旧高甫村と旧仁礼村との村境に交わる附近に五一・八・三米の三角点がある。その三角点のほぼ東西、約三〇〇米を距てて墓地記号が記載されているが、そこが第一号墳の位置に該当する。第二号墳はその北々西一八米を置いて隣接するものである(第一図)。地番は須坂市大字八丁字廻塚二八六のハ及び二八七のイとなつてゐる。



第二図 墳丘突則図

前述の如く扇状地の傾斜方向が北西を指しているため、第一号墳の墓室は若干高位置にあり、第二号墳との差は中心部で約二米と算出された(第二図)。また両墳の西方約二〇米で段丘縁に達し、更に三〇〇米程の水田地帯を横切ると鮎川の川床に至るのである。

### 三、第一号墳

#### 1 規模と形状

前節でも述べたように、一・二号墳共に扇状地のゆるい傾斜面に築造された円形の積石塚で、実測図に見られるように一号墳は耕作に際して墳丘の裾の積石を一部移動されて若干変形しているが、墳丘規模の大きな変形はなかつたものと推察される。即ち東西の径約二・三米、高さ二・五米を有し、墳頂部は径約一〇米がほぼ平坦となり、従つて墳丘の形状は載頭円錐状を呈している。墳丘を構成する石塊は、小は人頭大から大は60×40×30程度度の河原石を地表面から無雑作に積みあげ、ほとんど土壌を混入しない完全なる積石塚で、この石材は南方約三〇〇米のところを貫流する鮎川から採集されたものであることは想像に難くない。

現在墳頂部には宝暦一二年の建立にかゝる、作濃の生んだ和算の学者小笠原真恵の墓碑が建ち、このために多少二次的な変形が行われたことが想像されるが、これとても主体部まで及ぶものとは考えられなかつた。しかしこのほか各

所に盗掘を予想させる小穴が存在しているので、あるいは既に主体部に手がつけられているのではないかという懸念がなくもなかつた。

#### 2 築造の状態

通常の盛土塚のように規則正しい発掘は到底不可能であるが、先づ墳丘中央部には八米、巾三米のトレンチを設定して積石の除去に



第三図 第一号墳全景(北方より)

五〇程に及ぶトレンチ内各所から石の間にはさまつて散発的に遺物が出始め、最早盗掘の跡は覆うべくもなかつた。即ち北西部西側においては碧玉製石剣破片一個、北東部のやや離れたところから水字貝製銅片、東南側では家形埴輪片が見され、石剣のやや下方からは碧玉製勾玉一個を始めとして小形粗製の勾玉二個、管玉一個、ガラス小玉二個が検出され、この附近には鉄鏃、鉄針、不明鉄器等の多数の鉄製品が存在し、これより北東にかけて更に鉄鏃、剣身、直刀断片等が発見された。トレンチ内の各所からは土師器破片や円筒埴輪片が点々と出土して注意された外は、遺物の大部分はトレンチ北西端の部分に集中して存在する模様で、この出土位置も諷

さ六〇種から一米の間が最も多い様様である。遺物の出土状態はすべて不規則で、あるいは積石の上のりあるいはその間からうろちてはさまれて落下することをまねがれているような有様で、擾乱されていることが明かであったが、たとえ破壊されているとは言え主体部の構造の片鱗位は取うことができるものと、積石を一つ一つ注意深く除いて行つたにも拘わらず、遂にそれらしきものを認める事ができなかった。しかも玉類を出土した部分の更に下方から小形勾玉五個、管玉二個、ガラス小玉二個、石銅残欠一個が不規則に石の間にはさまつて発見され、これらに混つて鉄鑊、刀子片等が墳丘の下底部まで落下して存在していた。遺物出土量の最も多いトレンチ北西部の下方で、地表面に近い位置に方格規短鏡の断片一個が存在し、積石を全部除去した墳丘下の地表面に接して他の鏡の残欠一個が検出された。

墳丘下底部の探索を徹底的に行いたかつたのであるが、通常の盛土墳の場合と異つて、トレンチの四壁は深くなるに従つて崩壊の危険が伴い、一つ間違えば人命にもかかはるので、止むを得ず調査を打ち切つて復原作業中、管玉一個が発見された。

以上のようにこの古墳は過去に盜掘が行われ、遺物の主要部分は持ち去られたものと推定される。しかしその盜掘も地方人士の語るところによると、附近に散在する古墳の場合には遺物が目的であつたのではなく、主体部に使用されている

板石を採集するために行われる事が多かつたと言われるので、本墳の場合にも石材を採掘するために破壊が行われ、従つて主体部を構成する一個の石をも発見し得なかつたのかも知れない。現に村人の中には、ここから板石を採掘した伝言があるというのを物語るしているものもある。本墳の南東約百米に存在するやや小形のカゴ塚と呼ばれる積石塚も既に破壊が行われ、板石小口積築穴式遺壙の残影をとどめていた。仮りにこの一号墳も同様な石室構造を持つていたとすれば、

いかに石材の採集が目的であつたとは言え、小さな板石の破片までも一つ残らずすべて掘出してしまつたとも考え難い。また木棺を直接積石の中に安置したと考えるのにも無理がある

ので、隣接する埴科郡古墳群の積石塚で屢々見られる組合箱式石棺であつたのではないかと想像される。信濃地方に発達した特異な屋根形の上部構造を有する合葦式の箱式棺とも考えられない事もないが、二次的に移動されているとは言へ遺物の出土位置が六〇種から一米の間に集中し、墳頂部から至つて深い所に位置していた事実を考えれば、合葦式の上部構造を有していたのでは、石室下底部を少くとも墳頂から一米五〇種以下に置かなければ、積石を以つて屋根形の頂辺を覆いつつすことは不可能であらうと推定されるの、いささか適切を欠くことにならう。いわんや横穴式石室を考へることは、同様の意味で全く不可能と言つてよいであらう。

なお附言するならば、石銅や管玉銀勾玉に僅かに朱が附着

し、小さな礫石の全面に塗布されたものが採集されているので、石室底面は壁を敷いていたものと推定され、主体部の方向はほぼトレンチなりに北西から東南の方向に安置され、遺骸の頭部は玉類や鏡その他の遺物の多い北西を枕にしていたものであろう。この場合貝銅のみが一つ反対の東南にとび離れて存在するのがやや不可解であるかと思われるが、同種の貝銅を出土した甲斐鏡子塚、遠江松林山古墳においても、やはり貝銅のみが他の副葬品群を離れて石室の一隅に位置していた事実を参照すれば、敢て異とするには足りないであろう。

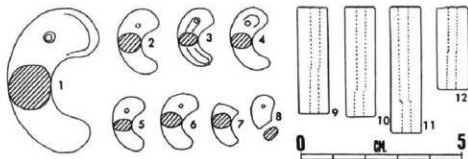
### 3 遺物



第四図 第一号墳鏡残片(左)

鏡断片二個を救えるのみであるが、その中の一個は方格規矩四神鏡の内区破片であつて一応注目に値する。即ち第四図右に示す如く方形格の外方に丁字を配し、その左側に玄武を置いた通有の式であつて、質は佳良の白銅製で鏡面は未だに光沢を失わな。一見船鏡ではないかとの疑を抱かせるが、仔細にみると図文の配置や表出手法において若干異るところがあり、跡上りも良好でなく仿製の優品に属するとすべきであ

長野県須坂市鶴塚古墳の調査



第五図 第一号墳勾玉

ろう。完存すれば大形鏡の部類に属するものと推定される。他の一個は鏡式不明の外区破片で(第四図左)、縁の部分には縦線波文を嵌んだ外向鋸歯文帯が認められるが、跡上りも至つて悪く模糊とし、銅質も前者と比べてはるかに劣つている。勿論仿製鏡とされるもので、縁の厚さ四耗を有する。

碧玉製勾玉(第五図1)美しい濃緑色を呈する碧玉で形態も優美であり、長さ四・五釐を有する。孔は一方から穿ち頸部に朱が僅かに附着している。

蠟石製勾玉(第五図2-8)特有の滑沢を有し、色は通常の蠟石とは異り、淡褐色乃至灰緑色

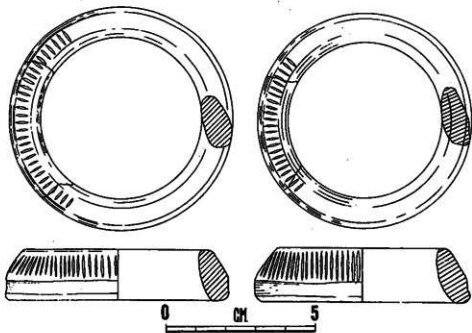
七 (七)

を呈する。7・8は折損しており、それぞれ別個体である。実測図に示す通り、いわゆる模造品の幻玉とは異り製作も普通の幻玉と何等変りなく、素材も色調の比較的美しいものを選んでおり模造品とするには疑問がある。各々の計測値は左に掲げる通りである。

番号	長さ(単位種)	穿孔	色調
1	四・五	一方	濃綠色
2	二・〇五	一方	灰綠色
3	一・八三	両面	淡褐色
4	一・九八	一方	灰綠色
5	一・六七	一方	灰綠色
6	一・七六	一方	淡褐色

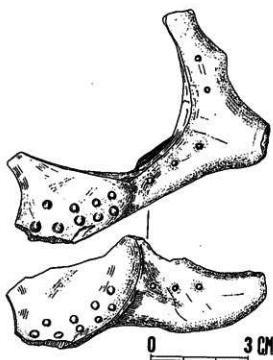
碧玉製管玉(第五図9-12) 9は濃綠色、10-12は石銅と同様な淡綠色を呈する。径〇・九種一種で長さは9が四・九種、10は三・三種、11は三・五種、12は二・六種で、すべて孔は両側より穿ち、途中で幾分食違つている。  
 ガラス小玉、四個、径三・五乃至四・六種の通有な形状を示し、三個は水色、一個は綠色を呈する。

碧玉製石銅(第六図) 残欠二個、共に風化した淡綠色を呈し、復元図に示す如く細線を放射状に刻し、外面下方に横い



八 (八)

第六図 第一号填石銅復元図



第七図 第一号墳貝銅

四線を施してある。両者共著しく近似しているので、一見同一個体の破片ではないかとも思われるが、よくみると細部に相違があり二個体をなすものと考えられる。第六図右は高さ一・八釐、復元径七・二釐で朱が僅かに附着している。左は高さ一・七釐、同径七・四釐である。形態的には右鋼の中にあつても新しい部類に属するものであろう。

貝銅（口絵及び第七図）水字貝製で図に見られる様に過半を失い、現在最大巾八・三釐を有する。他に数個の破片があ

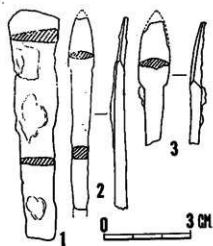
るけれども果して同一個体のものか、更には同一種に属するものかも明かにし得ない。一本だけ残つている管状突刺は根本から切断されているので、遠江松林山古墳出土例の如く、六本の管状突起が体部から大きく突出している形態のものでない事はたしかである。加工も松林山例のように入念に磨かれることもない代りに、第七図に示すように体部の右方には小さな列点を八乃至九程の間隔に施し、左方にはそれよりやや大きい径四程程度の列点を二段に纏らしているのは注意を要する。国立科学博物館で鑑定して頂いた結果によつても、この列点は人工をもつて加えられたもので、またこの貝自体は非常に成長がよく琉球、台湾周辺の産であらうという点も興味ある事実と言えよう。

鉄製鋒 僅かな断片で身巾三・一釐を有し、両面に鏨を持つ。劍身か鋒身か明かでないが、袋部の破片が存在するところをみると恐らく鋒身であらう。

直刀 小さな断片三個と茎の破片一個があるのみで、その形制は勿論、個体の数も明かにし得ない。

刀子 いろいろして刀子であることを認め得る程度の破片四個が存するのみである。第八図Iに示したものはその中の一つで、茎と刃の一部を残すだけであるが、刀子としてはやや大形の部類に属するものと言えよう。

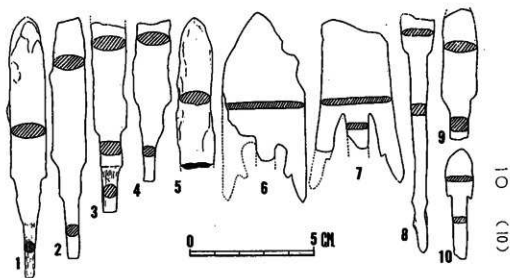
施（第八図）刃先と茎の部分で欠失している。一見鉄鏨が石の落下等によつて反り返つたようにも見えるが、



第八図 第一号墳鉄器

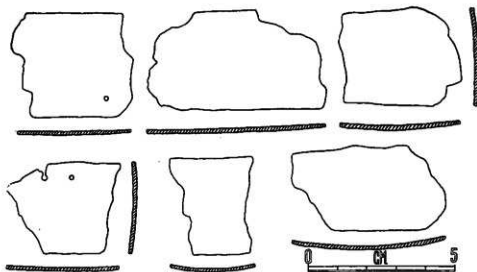
その反りはきれいな弧を画き必ずしもそのみとも言い切れない。唯通常の態にあつては双先の内側が凹んでいるのが普通であるが、これは錆化のために明かでないけれども多少丸味を帯びているのが気にかかるので、一先づ態として疑を残して置き度い。

鉄鏃(第九図)二六本以上。これも断片になつてゐるのが多いが、大体四形式に分ける事ができる。一は広鋒平根両丸造りで身の長大なものに属し、全長一〇・五釐、身の長さ六・七釐に及ぶものもある(第九図1)。これは数の上で最も多く破片共一三個を数える。二は広鋒平造りの巾広いもので脇挟りの部分は大きく抉れて二重になり、身の長さ七・八釐、



第九図 第一号墳鉄鏃

10 (10)



第十図 第一号墳不明鉄片

巾三厘前後を有する(6・7)。現存するもの二個。三は長い茎部を有するものであるが、身の部分をほとんど欠いているのでその形態は明かでないけれども、腸括りを持たない平造りのものであるらしい(8・9)。九個以上。四は以上のものに較べると至つて小形で、平根両丸造りで小さな腸括りを有する。身の長さ二・二厘前後で、この形式のものは二個を数えるのみである(10)。

不明鉄片(第十図) 大小の破片合計一八個がある。薄い横長の鉄片で内反りを示し、巾によつて三種類に分けられる。即ち一は三・三厘前後のもの、二は二・八厘前後のもの、三は一・八厘前後のもので、一・二は縁に沿つて径一・五耗位の小孔が穿たれるらしく、三は大さ径五耗程度の銛が打たれている。あるいは背の腰巻き部分ではないかとも思われるが、破片も小さく数も少いので断定のかぎりでない。識者の御示教を得たいところである。

埴輪 一号墳出土の埴輪の量は二号墳のそれに比較すると至つて少量である。形象埴輪としては家形埴輪を有するのみで、これも他の遺物と同様に小さく破砕してその内容を窺うことができず、樹立の状態等は全く不明であるが、先にも述べたように埴頂部の極く浅いところから発見されている。第一七図8に示したものは壘蓋の一部で銅代文を表している。円筒埴輪も同様に破片となつているが、比較的厚手で焼成もよく大形のものであつたらしい。



土師器 トレンチ内の浅い所から点々と発見されたが、例の如く細片となつて器形的全貌を明かにし得ない。小形甕形土器の頸部、高坏の坏部等の存在を指摘することができる。高坏は口縁下方に稜を持った一見古式の土師器を思わせるものがある。このほか此部に一孔を穿つた甕と推定される破片、上部つまみを持つて蓋形土器ではないかと思われるものも存在する。

#### 四、第二号墳

##### 1 規模と形状

第一号墳の北、西約一八米のところに位置し、北西側を道路によつて一部隔り取られ、東側も畑になつているため若干の積石を取り除いて石垣状に積み上げられているらしい。もつともこれは一、二号墳の墳丘の崩壊について言えることもかも知れないが、少くとも一号墳の西側と二号墳の西及び南側とは耕作のための変形は受けず、やや原形に近い規模を保つていてのではないかと思われる。現在東西二〇米、南北二五米という数字が示しているように、元來は二五米前後の徑を有したものと推定される。高さは墳丘中央部で三・六米を算するが、北西側では五米近くになつてはいる。真下に存在する第一号墳と比較すると、規模においては第二号墳の方が一周り大きいにもかかわらず、肉眼的には一号墳の方が幾分大きく見える。これは扇状地の傾斜而上に築造されたため、



第十一図 第二号墳全景  
(東方より望む)

墳丘自体の高さよりも高位置に存在するものの方がより強い印象として映ずるために外ならない。  
墳丘は一号墳と同様な河原石で構築され、墳頂部は径四、五米程が大体平坦になり、その一隅に「一運塚」と刻した小碑が建ち、一号墳と同様に墳丘上には所々に蓋掘の小穴とおぼしきものが存在し、埴輪片が点々と石の間に見られた。

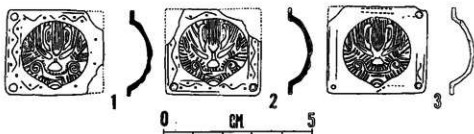
##### 2 発掘の状態

一応北東から南西方向に巾三・五米、長二一メートルのトレンチを設定し、積石の除去にかつた。トレンチ内に入つた「一運塚」の碑を一時撤去したところ、その下方から多くの骨片が発見されたが、風化が甚しいため取上げるとほとんど粉状に分解してしまつた。この附近の下方からは埴輪破片も多数が発見され、その大部分は器財埴輪でなくすく家形埴輪が多く認められ、土師器高坏の口縁部小破片も二、三混在した。深さ一米程掘り下げたところ、トレント内部は次第に植鉢状にせまくなり、強いてこれを掘けると四壁が崩壊する危険が

あり、またトレンチ東寄りで嘗て村人が勾玉を拾取したとい  
う所伝もあるので、更にトレンチを東側に約一米五〇測程敷  
張して横石を除いて行つたところ、トレンチ中央部深さ一  
三米のところ、鉄鍔二本が発見され、先に村人が拾取したと  
いう勾玉と合せて、二号墳もいよいよ盗掘による破壊の色が  
濃くなつて来た。鉄鍔附近を精査すると、第一号墳で見られ  
た様な橋長の不明鉄片、刀剣断片、糸巻状鉄製品や金銅製帯  
金具三個が散乱状態で発見され、更にこの下方深さ約二米の  
部分で銅製鈴香葉一個と鉄製樹金具残欠とを抽出した。比較  
的浅い位置からはやや多量の埴輪破片が点々と出土したが、  
地平面に至つても遂に主体部の構造の痕跡をも見出すことは  
できなかつた。墳丘下の原地表面の土を若干掘り取り、ここ  
まで遺物の落下していることを予想してこの排土を水洗した  
ところ、ガラス小玉五個を検出し得た。

以上のように主体部の構造はおろかその存否をも確認し得  
なかつたのであるが、この古墳の埋葬施設が、トレンチを外  
れて他の部分に存在するのではないかという事は、断片的  
ではあつても各種の遺物が比較的小範囲から発見されている  
事実から推して到底考へる事は出来ない。従つてやや強弁  
に過ぎるかも知れないが、一号墳の場合と同様に、比較的破  
壊し易く、しかも容易にその石材を搬出し得る主体部の構造  
を考えねばならないであらう。一号墳の場合には破壊されて  
いながらも、遺物の出土位置が原位置から大きく移動してい

長野県須坂市鹿塚古墳の調査



第十二図 第二号墳金銅製帶金具

るようにも思われなかつた  
ので、大略の埋葬位置を推  
定し得たが、本古墳の場合  
にはそれすらも明かにし得  
ない。

### 3 遺物

金銅製帶金具（口衿及び  
第一二図）三個現存してい  
る。何れも縦二・八乃至二  
・八四釐、横三・二乃至三  
・三釐の長方形を呈し、四隅  
の鉤をもつて帯に緊着した  
ものと考えられるが、裏面  
にかすかに布目が残存する  
ところをみると布製の帯に  
装着されたものであらう。  
内には獸面を鋳出し、縁  
には平行線間に波文と点列  
を毛彫によつて施している  
が、3はやや異なる文様を有  
するらしい。現在金銅はほ  
んど剝落して僅かにその  
痕跡を留めているにすぎず

銅地は折損部の肉眼的觀察と裏面の状態とから鋳造によるものと思われ、獸首面に藍を加えた痕跡も見出せない。かかる帶金具の本邦出土例は岡山県茶臼山古墳のものが知られているのみでその例にとほしいが、茶臼山例は下部に鈴を垂下している点を異にする。兩鮮にその例を求めると、公州宋山里二号及び五号墳、高麗の一古墳出土例が挙げられ、なかにすく獸首面は高麗古墳出土のものが本古墳出土例に最も近い。何れにせよ後我における文物の交流を推察せしめる有力な資料であらう。

ガラス小玉 五個、濃い緑色を呈し径四耗乃至四・七耗を有し、形態は一号墳出土のものより整つてゐる。

刀剣断片 一個、小さな断片でしかも錆化が著しく、刀剣であることを推察せしむる程度でその何れかも明かにし得ない。

鉄鏃(第一三圖) 一は茎を欠いた片刃鏃で、他の一個は身の部分を失つた長い莖鏃を有するものである。

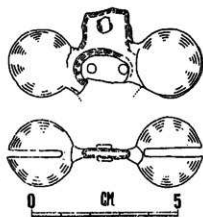
鈴杏葉(第一四圖) 一個、青銅製。三鈴を附したものであるが、現在下部の一個を欠失している。通常の式で最大巾六・六厘、上部の孔には垂下に使つたと思われる鉄片が鈔着し、鈴の中の丸には小石を用いている。

鐵環穴 鉄製樹環状部の残欠品で、復元径は六厘内外のものであらう。

不明鉄片(第一五圖) 一号墳出土のものと思しい巾三厘



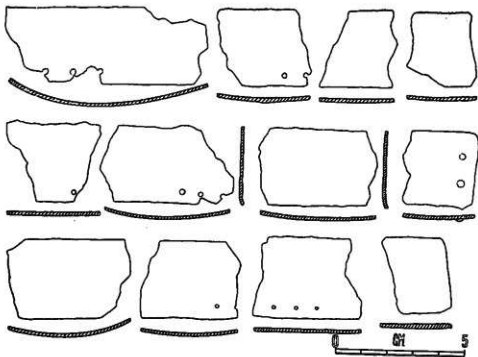
第十三圖 第二号墳鉄鏃



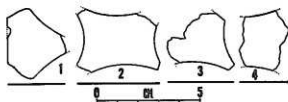
第十四圖 第二号墳鈴杏葉

前後の薄い横長の鉄板で、弧状に反り縁に沿つて径一・五耗程度の小孔を二乃至三個穿つてある。大小二(○)黄銅の破片があるが、一号墳出土の如き鉄留めたものは見当らない。

不明鉄片(第一六圖) 四個、厚さ〇・七耗程度の糸巻形のもの三個と(2-4)、ほぼ三角形を呈し二辺がそれぞれ内曲しているもう一個のものがあつた(1)。何かに附屬するものであらうが、それにしても孔もあけられていない。長四厘、巾三・二厘前後。



第十五図 第二号墳不明鉄片



第十六図 第二号墳不明鉄片

ら真偽の程は明かにし難い。

第一七図に文様を有するもののみを示したが、1・2はポタン状の突起をもつて鉄留めを表現した胄であろう。

3・7も厚さ、色調、焼成が同じであるので、あるいは同一個体のものであるかも知れない。然し6は他のものにもこの様な文様は見られるので断定のかぎりではない。

9は第一号墳出土の8と同様に細代文を表現した磨根

壇輪 一号墳と同様にす

べて小さな破片となつてい

るために、その形状を明か

にし得るものが少い。但し

量は一号墳に比して余程多

く、ほぼ石油箱一杯分程見

見されている。北東側の墳

丘裾を削り取つた時にも多

数の壇輪を出土したという

所伝があるが、若し事実で

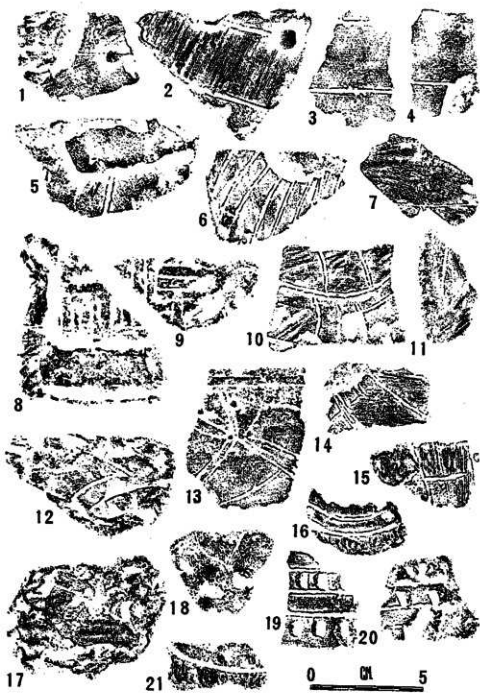
あるとすれば墳丘の周囲に

も壇輪が存在したことになる。

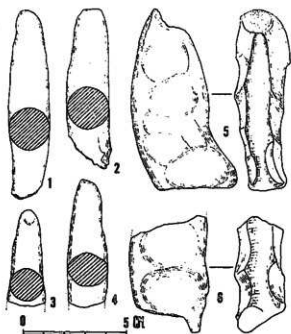
横石塚における壇輪樹

立の在り方として注目すべ

きものであるが、遺憾なが



第十七圖 第一・二號墳輪拓影



第十八図 第二号墳埴輪

の破片である。第一八図1-4も積石の間にはさまつてばらばらに発見されたもので、感々見られる如き屋根の上部に立てられた串状の碓である。この外にも家形埴輪は、その下部部や側回りが発見されている。なかんずく図示したものの外に屋根の隅角部が存在し、これは四注造あるいは原始入母屋造の構造になるものであらうと想像されるので、家形埴輪の形式は少くとも切妻造りとこの二形式が存在したことを指摘し得る。

長野県須坂市廻塚古墳の調査

10 以下は器財埴輪の一部である事は容易に想像されるが、形態の特徴を示す部分がないので明かにし難い。10・13・14等は蓋ではないかとも思われ、16は右端で他のものに接着していたもので、恐らく蓋の下方の蔵手状に突出した部分か、香川県公文字山古墳出土の如き騎の同様な部分であらう。14は赤と白とで塗彩して直弧文を画き、10・13・15も直弧文らしい文様を鋭利な鋭描きで示している。17は表面がほとんど剥落し、中央部に点と線で皮縁を表現したものが残っている。人物の一部が器財の部分であるか明かでない。このほか第一八図5・6に示したものは、手摺ねで指の痕が残っている至つて不細工な作りのもので、上部左端と下部とで他の物に附着していた痕跡があるが、如何なるものの附屬品が皆目見当がつかない。1は全長八・五釐、2は半ばを欠失している。以上の家形、器財等の埴輪は、ほとんど一連塚が建つていた附近の墳頂下の浅い位置から発見されたものが多い。円筒埴輪もすべて小破片のみであるけれども、その形状から推して比較的大形のものであつたと想像される。一・二号墳を通じて、埴輪はすべて厚手で焼きしまりもよく、この点関東地方の埴輪と較べて大分差があり、畿内地方の埴輪に近い。

土師器 一連塚の碓の下方から多数の埴輪と混在した三三三の口縁部破片があるのみである。口縁下端に縁を有し、曲率からいっても高坏であるらしい。

## 五、む す び

以上において今回の調査に基く鏡塚古墳の概要を記した。ここにその結果を通じて見た二三の問題に触れ、結びに代えたいと思ふ。

第一に古墳年代の想定についてであるが、この場合に基準となるべき副葬品が何れも残欠であり、また副葬当初の品目を網羅していると思えないので、いささか牽強にすぎざる様は否定し得ない。しかし既に明らかなように一号墳と二号墳との間には、全く異なつた年代的特徴が存在し、前者が古式古墳の様相を備えるのに対し、後者が後期古墳であることは疑い余地はないであらう。とはいえ、一号墳が古式古墳のうちで如何なる序列を占めるかについては、なほ論ずるべき若干の事柄が存する。

方格規矩四神鏡、鏡式不明鏡は何れも仿製と考えられるものであるが、四神鏡は第三節で述べたように、良質の白銅鏡で大形鏡の部類に属し、それ等と碧玉製銅二個、水字貝製貝輪の組合せは、一応、本墳が前期様式を保つことを示し、併し出した武器、武具、工具、玉類及び埴輪等の様相も、必ずしもそれに背馳するとは思えない。しかし少量ながら検出した土師器破片が、果して副葬品であつたかについては、にわかには断定し得ぬものを含んでいる。比較的淺位置から出土した事と、高坏、埴と共に罹と考えられる破片をも混しているか

らである。高坏や埴が獻供用容器として一般的であることはいうまでもないが、非実用的な祭祀用具であればともかく、実用の器と考えられる存在は墓開にしてその例を知らない。従つて廟の問題は暫く疑問として残すにしても、また一方、それ等の土師器が遺体埋葬時に儀礼器具として埋納されたか、埋葬後に行われたであらう墓前祭祀に用いられた土器の混入であるかを判断するすべも持たないのであるが、或は上総船岡寺古墳のような場合に類するものかもしれない。

さて、古式古墳の系列について、第一号墳に見られる出土遺物の組合せの類例を他に求めれば、直ちに想起されるのが遠江松林山古墳と甲斐鏡子塚古墳とである。勿論、その規模や副葬品の豊富さに比肩すべくもないが、優秀な大形鏡を含む教面の鏡、武器、武具、工具、玉類を始め、碧玉製銅、車輪石あるいは琴柱形石製品、巴形銅器等に有枝貝銅を加えた種類は、それぞれに多少の相違はあつても極めて類似した内容を認めることができる。なかつく、有枝の貝銅は鏡塚古墳及び松林山古墳、鏡子塚古墳にのみ発見されるところであり、また鏡塚にそれを欠くとしたら何も鏡子塚や松林山古墳を連想するに足らぬであらう。もつとも前記のように同じ水字貝ではあつてもそれぞれに形態の相違があり、松林山と鏡子塚の場合が六枚であるのに対し、鏡塚例は恐らく一枚乃至数枚ではあるが、肥前関行丸古墳例の如く水管を除去した形をはじめ普通の古墳出土貝銅とは違つて特殊の意味をもつ

出土例であることは言い得るであらう。

銅塚第一号墳に見られる副葬品の種類は、松林山古墳及び鏡子塚の何れにも含まれており、殊に有枝の貝鏝をこの三墳のみが共有するとしても、銅塚の年代を四世紀代に置かれる前期古墳、またはそれに近い他の二者の年代に同定することはまず困難としなければならない。第一は少量ながら数種の土師器が混入してしていた事実であり、第二はこの地方における古墳生起の問題に關してである。

古墳時代葬制の変遷にあつて、土師器が墳丘中で単独的に発見された例は既に前期古墳に屢々存するが、銅塚の場合、器形は数種に及び、個体数もまた一形一個乃至數個分を算えるから、前期古墳のそれと同種とは言ひ切れないものがある。と同時に墳丘上に樹てられた埴輪の破片と混在した出土状態から推して、後期古墳に於けるような副葬品として考えることも、必ずしも妥当とはなし得ないのである。

一方、善光寺平には盆地南部の更級郡、埴科郡に大部分が集中して、総計一七基に達する前方後円墳が明らかにされていくが、そのうち最も古い形勢を看取し得るのは、更級郡川柳の將軍塚である。しかし、森本六爾氏の研究に採用されているその古墳の遺物には、いささか検討を要するものがあると考えられる。山岳の尾根に築かれた前方後円墳の墳丘は長軸一〇〇米に近く、前方部はやや発達の前しを見せているが、大体前期様式の一例とすることができる。前方部及び後円部

長野県須坂市龍塚古墳の調査

の竪穴式石室は長方形を呈する側石小口積みの手法をとり、また埴輪円筒列や葦石等の外部設備もその墳丘に即応すべき状態にあるといえる。しかるに出土品として伝えられる中には、墳丘や内部構造の示す年代觀と著しく遊離した品目が認められるのである。即ち、瑪瑙製の示す年代の玉などは明らかに誤伝であると考えられるし、内行花文鏡二、鏡齒文帶変形文鏡二を含む出土鏡の組合せも、極めて変則な場合としなければならぬ。まして一、二を除いては後期古墳に特徴的な小形粗製鏡であるから、その所伝は全く疑わしいことになるであらう。これ等現存の遺物の大部分は恐らくその出土を將軍塚に附会されたものであらうが、それよりもむしろ信濃奇勝録の川柳將軍塚発掘品として図示説明された記載に注目したのである。森本氏によればその記事は、鐵鏡二七面、銅鏡一七個、筒形銅器二箇、金銀環、小玉、車輪石、觴形磐石製品、異形磐石製品、勾玉、管玉等に解釈されるが、その何れが現存遺物に同定されるかは明らかにできない。ただ異形石製品は森本氏が琴柱形石製品の一種と考えられた現存遺物であることは大過ないところであり、また最近米山一政氏が川柳將軍塚出土と伝えられる銅鏡を発見されたが、大形の有基銅葉鏡で、奇勝録の記載にはば一致するのである。然しながら奇勝録のいう鐵鏡二七面の数字は、勿論そのまま信じることができないし、また玉類の多くや金銀環なども疑問の余地



を殘すが、墳丘や内郭構造に対応する副葬品の組合せとして、筒形銅器、銅鏡、車輪石、軸形石製品、琴柱形石製品の一類、玉類の一部等については、まず正副を得た記録と考へることが可能であり、それに鑑鏡を加へるならば現存の内行花文明光鏡と、「大なるは高麗文字向勇たる人の形五三人」と奇勝録に誌された有銘鏡、神獸鏡乃至阿像鏡のようなものがあつたのであらう。

こうして見ると川柳持軍塚が嘗て考えられたように五世紀代に降るものとは思えないのであつて、善光寺平でも甲府盆地や東海地方と同じ発達の段階に、古墳が營造され始めたことと推察されるのである。しかも古墳という新しい墓制が中央から地方へと採用されて行く形勢から推して、かかる善光寺における古墳生起の当初に、貫塚第一号墳のような積石塚が特殊な墓制としてすでに行われたとするにはささかの無理を伴うものと考えられ、やはり川柳持軍塚が示す年代の少くとも次の段階において、その発生を考へることを妥当としよう。石砌の形状や土師器の出土など、その趨勢に沿う傾向と思われ。しかし五世紀を更に降し得るものではなく、中期においても中葉以前にその位置をなすべきであらう。

次に第二号墳の年代であるが、刀劍、鉄鏡、鈴香葉を含む副具、獸首を彫出した金銅製帯金具、小玉、土師器等の遺物が示すように、後期古墳であることは明白であり、また第一号墳の場合のように微妙な問題を含まない。金銅製帯金具そ

れ自体は珍奇な副葬品ではあつても、当墳の年代を左右するような意味を持つものでないと思へるのである。だが墳輪内筒をはじめ二種の冢形埴輪、數種の器材埴輪(あるいは人物埴輪の一部が含まれるかも知れない)の構成は、善光寺平はもとより信濃全般を通じて見ても、極めて多彩な部類に属する。と同時に信濃における埴輪の存在期間は意外に短く、後期後半に及ぶものはず見当たらないといつてよい。従つて第二号墳に關しても同じように後期前半期と考へてよいと思ふ。

信濃がわが国有教の積石塚密集地帯であることは、既に周知に属するが、積石塚またはそれと同様の意義を持つと考えられるいわゆる土石混合墳の總數八五〇基余、そのうち五〇基程が松本附近及び碓氷山近傍の麻績一帯に存する他は、すべて善光寺平に集中している。なかんずく、大塚古墳群を持つ埴科郡に七〇〇基以上が認められ、上高井郡はそれに次ぎ、その中心を離れるに従つて分布は稀薄となる。善光寺平における古墳の概數は一三〇〇余であるから、積石塚が如何に濃密な分布を示しているか解るであらう。

また一般的に見ると、積石塚は円形の墳丘として築かれる場合が大部分であるが、大塚第二三九号、第三二〇号墳、東筑摩郡坂井村安坂古墳群、同麻績村麻績塚のように、方形墳(乃至は上円下方墳)としても、あるいは更級郡中郷古墳の如く前方後円墳としても築造されている。それには附随する

内部構造としては、大塚古墳群についていえば、横穴式石室一二基、竪穴石室六七、合掌形石室二二、組合式石棺五が明らかになっており、横穴式石室が最も普通の墓室であつたとすることができる。更に金銀山古墳のように後期も古い時期の所産と見做される存在もあるが、大多数は小形粗造で、副葬品の中には八世紀以降に降し得るものが散見するから、中期以降、殊に後期から古墳の終末に至るまで陸統として営まれていたに違いない。

横石塚の意義については古史論議が重ねられているが、善光寺平の如く特殊な分布をとり発展を遂げた場合にあつては、古代朝鮮から帰化人によつて行われた墓制であることに、大体の帰結を得たようである。しかしその細部に亘つては百濟説あり、高句麗説ありで必ずしも一致しない。斎藤忠博士は甲斐王塚古墳例を唯一の例外として、善光寺平にのみ認められる合掌形石室が、百濟の古墳に往々存する層根形石室の継承であるとし、更に善光寺の草創に百濟の帰化人が関与して力があつた所から百濟人説をとられた。また大場磐雄博士及び郷土史家故栗岩榮治氏は新撰姓氏録卷二四山城国諸蕃中、高麗の条に一高井造、高麗王孫平五十二世孫、汝安訶五後也」とある記事を始め、正史の各所に散見する高麗系帰化人賜姓の記載によつて、高句麗人説を衝てられている。殊に大場博士は東筑摩郡坂井村安坂の古墳群が、平安の初期に姓を賜つて安坂氏となつた高句麗人前部綱麻呂一族の居住地に

該当することを指摘せられている。安坂古墳群を構成する横石塚が八世紀以降のものであることを思うとき、この説は相當の蓋然性が存するといえる。今ここではそれらの当否について述べる余裕を持たないが、その何れの場合も存してよいのではないかと私に考へている。

横塚の場合に関しては、直接間接に結びつく史籍の記載は勿論見当たらないが、高句麗人、百濟人の何れにせよ、帰化人に關係のある遺跡であることは言い得るであらう。ただ六、七世紀の古墳であれば、帰化系の人々の墳墓としても散て異とするに足りないが、第一号墳が五世紀に遡る年代を示すとすれば、一応考へべき問題が提されるように思ふ。第一号墳の築造された五世紀の頃の帰化人が、信濃のような東國へ配置されたことを文獻上で探ることは困難であるが、もしそのような極く初期の帰化人が、この地方に配置されるには、相當の理由があつてのことと考へられる。当時大和朝廷は朝鮮半島において高句麗、新羅と事をかまへ、その對抗策に苦慮していた。いうまでもなく高句麗は遊牧騎馬民族の扶余族の國家である。民族的習性と多年の経験とにより、優秀な騎兵をもつて朝鮮を席捲しようとしたのであるから、日本軍もそれに對戦するため騎兵を保有する必要があつたに違いない。従来飼馬の経験を知らない大和朝廷が、そのため帰化人の利用を考へたとしても不思議はない。

また後の史実に徴しても明らかなく、信濃の地は牧場の

適地であり、数多くの官牧、私牧が置かれていた。そこで百尺の竿頭を以てすれば、軍馬補給の必要に迫られた大和朝廷が、飼馬の法に長じた嬪化人を信濃に配置し、牧場の開発や馬の飼育に当らせたのではないであらうかと想像するのである。そのような初期集団の首長の墓が錦塚第一号墳であり、

以後その役割は数世紀に亘り、中には新たに加わつた嬪化系の人々によつても引継がれ、やがてはこの地方における高井、大空、笠原等の御牧に發展して行くのではないだろうか。六世紀以降に造られた横石塚の多くも、古牧の存在に無関係ではないことは、既に説かれているのである。

## 第2節 「鍬塚第2号古墳」

須坂市教育委員会（昭和60年）

1

### 1. 経 過

農業の機械化、さらにはその大型化に対処するため、農道の拡幅改良を年次計画で進めている須坂市は、昭和60年度に「市道横松原鍬塚1号線」の拡幅改良工事を実施することになった。ところが、この拡幅の一部に長野県指定史跡である「鍬塚第2号古墳」が隣接しているのである。両側に広げる農道の拡幅計画については農業土木課の努力により地主の了解のもとに指定区域にはまったく手をつけないうこととなり、さらに、この古墳の重要性を理解していただいた農業土木課の配慮により、現在の道路敷部分の保護について協議することになった。

こうして、昭和60年2月15日に長野県教育委員会事務局文化課太田喜幸・伝田和良両指導主事、関野英太郎区長はか上八町区役員、須坂市農業土木課榎井一郎技師・佐藤栄作主事、須坂市教育委員会社会教育課黒沢正三主事で現地協議を実施し、須坂市の負担により、須坂市教育委員会が主体になって発掘調査を実施し記録保存をはかることになった。この農道工事は昭和60年秋に予定されていたが、4月以降は農作業でこの道路を頻繁に利用するという地元の要望があるため、急遽3月に調査を実施することになった。そのため、市教育委員会では「須坂市遺跡調査会」を組織し、調査を実施することになった。

調査組織は以下のとおりである。

#### 調査会

顧問	北村 堯（須坂市教育委員会教育長）
会長	片山正行（須坂市文化財審議委員会委員長）
理事	霜田圭一（同 委員）
同	徳永哲夫（同 同）
同	荒井喜助（同 同）
同	関 孝一（同 同）
同	神林信雄（須坂市立博物館長）
監事	青木光雄（須坂市収入役）
同	落合謙一（須坂市教育委員会学校教育課長）

#### 調査団

団長	関 孝一（須坂東高等学校教諭）
主任	黒沢正三（須坂市教育委員会主事）
補助員	道正洋一 高橋千穂 平岡千枝 金井資生 花岡善光 中村 濟 北村孝夫 保科光徳 滝沢道明 千葉剛成 柱本真司（以上須坂高等学校郷土部）

## 事務局

- 局長 丹羽本治 (社会教育課長)  
 次長 小林忠男 (社会教育課長補佐)  
 事務員 黒沢正三 (社会教育係主事)  
 同 片山道子 ( 同 )

## 2. 環 境

北信濃の東部に位置する須坂市は、北は上高井郡小布施町と、東は同郡高山村及び群馬県碓氷郡と、南と西は長野市に接している。地形を概観すれば、根子岳・浦倉山等2,000m級の山々が連なる山岳地帯と、これらの山々から流れ出る鮎川・百々川・松川等によって形成された扇状地、及び千曲川によってできた沖積地の3つに分けられる。

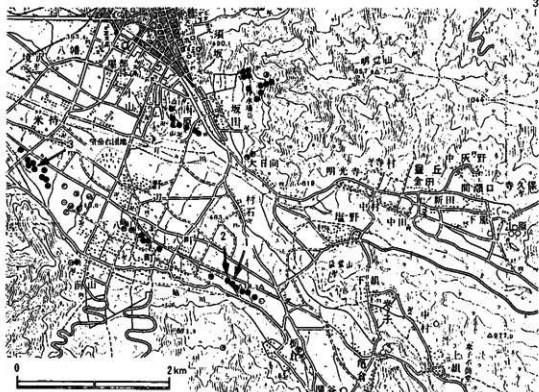
本古墳は須坂市の南端を流れる鮎川によって形成された右岸の段丘上に立地する。標高510m、この墳頂に登れば広大な扇状地から、千曲川をへだたてて善光寺平を一望のもとに見おろすことができる。

善光寺平東縁のいわゆる河東地域は、積石塚古墳がもっとも濃密に分布している地域で、特に長野市松代の大室古墳群は数百に及ぶ積石塚が密集していることで全国的に有名である。

須坂市に存在する古墳は80数基が知られている。もっとも多いのは本古墳が立地する鮎川右岸で、下流の米持から上流の枔倉にかけて40数基が連なっている。最近の分布調査では左岸にもいくつか存在することが知られた。次に多いのは坂田山麓で、10数基がまとまっており、日滝原には10数基が散在している。須坂市に存在するこれらの古墳は遺跡地名表等でみる限り、積石塚が圧倒的に多いが、最近の分布調査の所見を述べるならば、従来、土石混合墳と呼ばれていた古墳は扇状地という石がきわめて多い地理的条件のもとでは、土墳の範疇に含むべきものではなからうかと考えるに至った。

須坂市の古墳の中でもっとも古いのは、昭和51年に確認調査が実施された米持の天神第1号古墳である。この古墳は中心を粘土で築き、その周囲に人頭大の川原石を積み上げた特殊な形態の古墳である。市内に分布する古墳の中ではもっとも大きく、長軸35.7mを測る。主体部は確認できなかったが、封土部と積石部の境あたりから埴輪片が大量に出土した。特に家形埴輪は全形を知りうるものでは県内初出土の優品である。これらの埴輪からこの古墳は5世紀前半と推定されている(文4)。

次は、本古墳とともに昭和32年に発掘調査が行われた鐘塚第1号古墳で、すべて人頭大の河原石を積み上げた典型的な円形の積石塚である。これも主体部は確認できなかったが、出土遺物から5世紀後半の築造と推定されている。このことは、従来積石塚は7～8世紀のいわゆる終末期古墳と



1. 鐘塚第1号古墳 2. 鐘塚第2号古墳 3. 天神第1号古墳

第1図 鐘塚第2号古墳の位置と周辺の古墳分布

(1 : 50000)

されていたが、かなり古い時期から築造がはじまったことを示すことになり、記念すべき学史的な調査であったといえる(文1)。

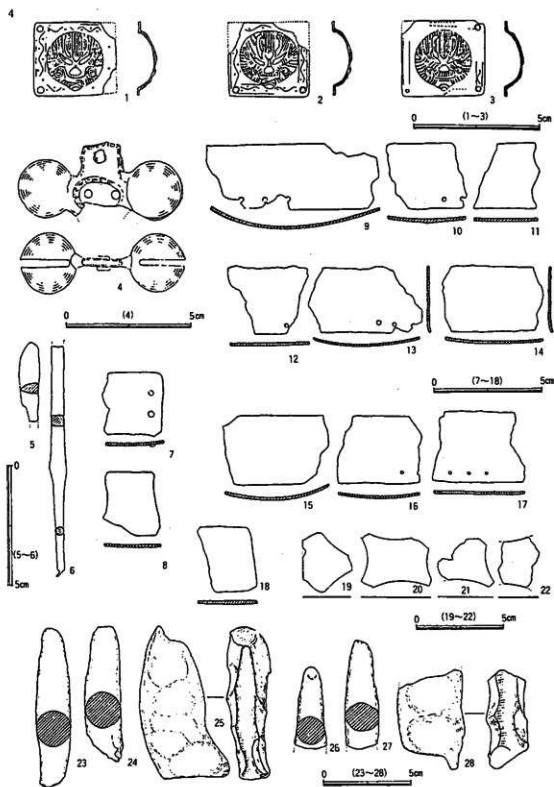
同時に行われた本古墳は、後に述べるように6世紀前半の古墳に比定される。

その他後期古墳としては、日滝の行人塚古墳が昭和53年に調査された。この古墳は土墳で、横穴式石室である。遺物はほとんど出土せず、わずかな土師器と須恵器のみであったが、7世紀後半の築造と考えられている(文5)。

なお、この地域の特徴として石が多い地域であり、小規模な古墳が多いことから、畑の邪魔な石を積みあげたいわゆる「ヤックラ」とまぎらわしいものが沢山あり、古墳と考えられていたものが占墳でなかった場合もあり(文2・3)、また、「ヤックラ」と思われていたものが古墳であった場合もある(文4)。

鐘塚第2号古墳の発掘調査は昭和32年8月に上高誌編纂会の手によって行われた。この調査では、中央部の北東から南西方向をとる幅5m、長さ11mの範囲で行われたが、内部主体はすでに破壊されていた。発掘区域の中央部の深さ1m余の付近に、各種の遺物が集中して発見され、地盤土中からもガラス小玉5個が検出されたほかは、遺物の出土状態にも特定の現象を見出すことはできなかった、と調査者は記している(文6)。

出土遺物は鍍銀青銅製彌文鈴板(銅造)3・ガラス小玉5・刀剣小片・鉄鏡片2・鈴舎葉1・響残片1・鉄片類・糸巻形鉄片4・家形埴輪・器財埴輪・円筒埴輪・土師器(高杯)である。この



1~3 鍍銀青銅製御魂文鈎板、4 鈴杏葉、5~6 鐵鏃、7~17 鐵片

19~22 糸卷形鐵片、23~28 器財埴輪

第2圖 鐘塚第2号古墳出土遺物(昭32年)〔長野県史考古資料編より転載〕

中で、鍍銀青銅製獅喙文蹄板は獅子頭模様の銅の鑄物で、きわめて精巧な遺物である。全国的には他に数例知られているだけで、大陸からの移入品と考えられている。鈴杵葉も貴重な遺物で、杏葉部分は欠失しているが2つの鈴は今もきれいな青色を出す。これらの出土品から、本古墳は6世紀前半に築造されたものと推定されている(文1)。なお、この出土品のうち金属製品については第1号古墳出土品とともに、昭和58年度国・県の補助を受けて科学的保存処理が実施された。この中で、鍍銀青銅製獅喙文蹄板は従来鍍金であり、またそれがすでにほとんど剥落しているものと考えられていた。しかし、錆落としを実施した結果、原形がほとんど残っており、しかも定量分析の結果では銀を主体とした金銀合金であることが判明し、現在の名称となったのである。当時の遺物としては、鍍銀はきわめて少なくさらに貴重な遺物となっている。

なお、本古墳は第1号古墳とともに昭和40年2月25日に長野県史跡に指定され、また出土品は昭和45年5月25日に須坂市指定有形文化財に指定され今日に至っている。

### 3. 調査日誌

昭和60年

3月15日(金) 晴れ

午前中、ブルドーザーを借りあげ、表土約15cmを削った。

午後1時から発掘を開始する。墳丘と同じく人頭大の石が多数検出された。比較的上層部から埴輪片が多数発見された。

3月16日(土) 曇のち雨

引き続き掘り下げを行った。調査区の南側、すなわち古墳側の3分の2は石の間に黒色土が入り、埴輪はまったく出土しなくなった。畑側の3分の1は石の間にすき間が多く、茶褐色土であった。

午後は雨のため、博物館で遺物洗いと注記を行った。

3月17日(日) 晴れ

午後、引き続き石を残して掘り下げ作業を行った。北西隅で墳丘の限界を示すと思われる列石が検出された。全体の墳域を知るため調査区域外の3ヶ所に試掘坑をあけた。

午後になって墳域の北の限界は北西隅の一部を除いてほとんどが攪乱をうけているものと判断し、清掃作業をはじめた。

3月18日(月) 晴れ

写真撮影と実測作業を行った。終了後遺物整理を行った。



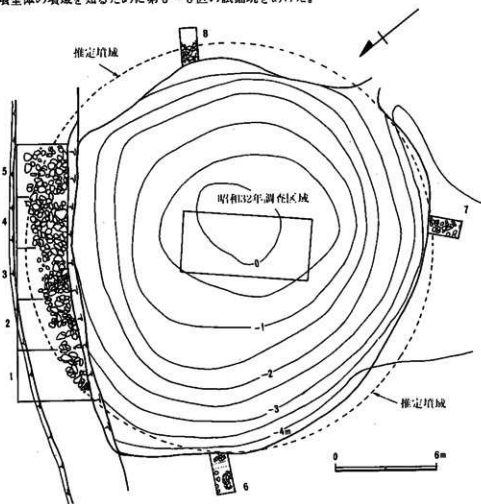
## 4. 調査

調査区域は全面発掘とし、5区に分けて調査を実施した。

1区では長さ1.8mにわたって墳裾と思われる列石が認められた。遺物はほとんど出土しなかった。

2～4区は、現墳裾から約2mまでは人為的と思われる石積みではないが、墳丘と同様の人頭大の河原石が集積し、その石の間には黒色土がはいり、築造時の様相を残していた。しかし、ここから北側は墳丘と同じ人頭大の河原石ではあるが、石と石の間にすき間が多くなり、茶褐色の砂が入り込んでいるため、攪乱されているものと判断した。遺物は黒色土上面から出土し、黒色土内からはほとんど出土しなかった。

第5区は墳裾の東の限界を確認するため調査を進めたが、はっきりとつかむことはできなかった。古墳全体の墳域を知るために第6～8区の試掘坑をあけた。

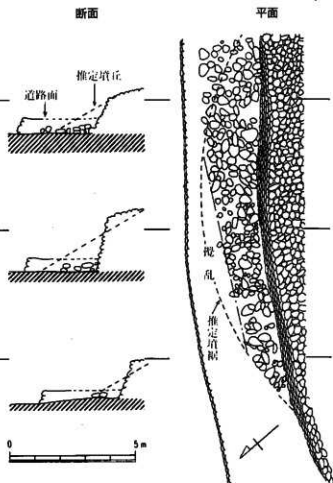


第3図 雄塚第2号古墳全体図 (1 : 250)

第6区は灌水用の配水管が敷設されているため、一部破壊されていたが、墳丘の積石が特に広がっていたとは認められず、現況が築造時とほぼ同じ墳域と考えられた。埴輪はわずかに出土した。

第7区は約15cmで基盤と思われる黄色土層に達した。ここもやや大きめの河原石が散在し、その石の間から埴輪の大きな破片がままとまって出土したが、墳域が広がっている状況は認められず、築造時とはほぼ同じと考えられる。

第8区は現地表面から約50cm下で墳裾と思われる石積みか認められ、現地表面の墳裾よりも約1m広がっていることが確認された。埴輪は地表下約15cm前後の付近から出土した。



第4図 調査区域詳細図(1:150)

## 5. 遺物

遺物は平箱にして1箱の8分目程度で、埴土器が1片あった他は、すべて埴輪である。

### (1) 埴輪 (第5・6図)

円筒埴輪(1~15) もっとも出土量が多い。とはいえ、胴部破片には朝顔形円筒埴輪も含まれているものと思われる。1~3は口縁部である。ほとんど垂直に立ち上がっている。口唇部は斜めに調整されているもの(1)と肥厚しているものがある(3)。器壁は1.1~1.3cmとやや薄い。焼成・整形は良好であるが、内面に刷毛目痕はみられない。

胴部にはタグ状突起がめぐっている。幅1.5~2cm、高さは0.6~1.3cmで、断面はカマボコ形を基本としている。刷毛目整形痕はタグ状突起上にも施されるが、内面に施されるものは少ない。窓があげられているものがいくつかある。10~11は直線的に切り込まれており、現状から判断して台形または六角形と考えられる。12は直径5.5cmの円である。

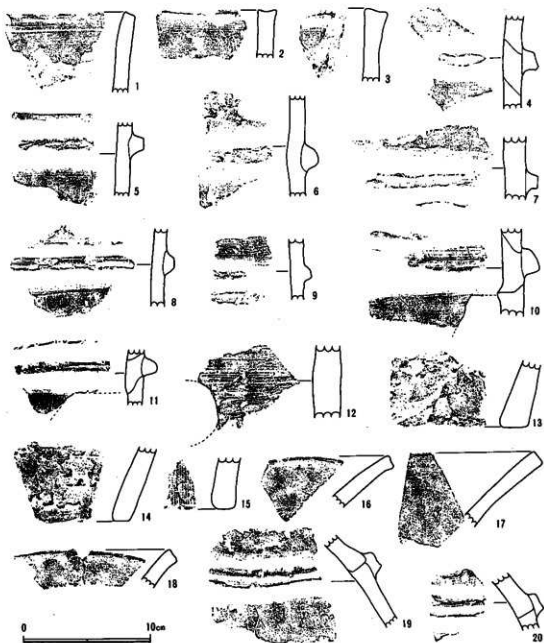
底部はいづれも外反して立ち上がっている(13~15)。

朝顔形円筒埴輪(16~20) 口縁部はいづれも焼成・整形きわめて良好である。厚さは1cm前後と

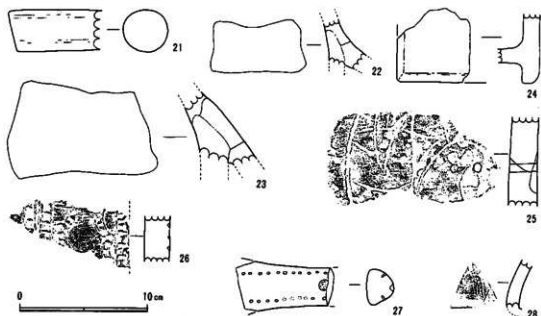
薄手で、強く外反している (16~18)。

胴部片はどれも肩の部分である (19~20)。口縁部に比してやや厚く、1.3~1.5cmを計る。粘土の継ぎ目にタガ状突起が添付されている。焼成や整形はきわめて良好である。

家形埴輪 (21~24) 21は直径3.3cmの丸棒状を呈している。家形の堅魚木と考えられる。22~23は  
いづれも屋根の軒付近と考えられる。24は家形の床付近と考えられる。他の埴輪とは格段の粗造で  
胎土や整形がきわめて良好な埴輪である。



第5図 円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪



第6図 家形埴輪・異形埴輪・須恵器

異形埴輪 (25~27) 26は平らな板状の埴輪である。幅0.4~1cmの梯子状の文様が描かれている。梯子段はタガネ状の工具を0.2~0.3cmの深さに刺突している。25も板状の埴輪である。きわめて厚く、2.3cmを測る。右隅に直径約0.4cmの穿孔があり、ここを基点に弧線が2本出ている。これらの沈線は、この時代に盛んに用いられた直弧文ともよく似通っている。27は断面が栗の実形の棒状の埴輪である。直径0.2cm、深さ0.5cmの刺突孔が0.5cmおきに2cmの間かくをおいて2条並んでいる。

(2) 須恵器 (第6図28)

やや大形の壺形土器の頸部である。上部に歯状工具による波状文がある。胎土・整形等良質の須恵器である。

## 6. ま と め

墳丘の裾部に限定され、短期間の調査であったにもかかわらず、今まで把握されていなかったことが明らかにされた。以下その成果を記しておきたい。

遺構としては第1区において埴輪の根石と考えられる配石が認められ、第6~8区の試掘坑の状況と考え合わせ、窪塚第2号古墳の規模はほぼ径24mの円墳と考えることができる。第2~4区は最下段の石積みだが、現埴輪から約2mまでは現墳丘とはほぼ同じ人頭大からその倍ぐらゐの大きさの石で構成されており、黒色土の状況と考え合わせて、築造時の状況を残しているものと考えられる。しかし、北東側は石の大きさはほぼ同じであるが、すき間が多く茶褐色の砂まじりの土であり、明らかに攪乱状態を示しており築造時の状態とは考えられない。以上の調査結果から、今回の調査区

域はまず第1段階として墳裾部分が破壊され、次に恐らく現道路の開設の際にさらに約2mほどとりくずされて積み直されたものと考えられる。墳丘の南西側は約1mほどせばめられているものと考えられ、また、南東側は現状では1-1.5mほどせばめられている状況ではあるが、第8区にみられるように覆土をとることによって第3図の推定線のように墳裾が現れるものと考えられる。

出土遺物のほとんどが埴輪であった。円筒埴輪は底部から外反しながら立ち上がり、胴部から口縁部にかけては屈曲なく垂直に立ち上っている。タガ状突起はきわめてしっかりとしたものが見ついている。この円筒埴輪の形態は近在では長野市松代の長礼山2号古墳のものによく似ている(文6)。しかし、本古墳出土円筒埴輪における台形または六角形と推定される意の存在は類例をもとめることができなかつた。朝顔形円筒埴輪は特に特徴的なものは認められない。家形埴輪も細片のため目立った特徴はない。異形埴輪としたものも細片のため不明であるが、あるいは播などではなかつたかと推定される。須恵器は壺の頸部であるが、これだけで時期判別はむずかしい。

さて、環境の項でも述べたように本古墳は昭和32年に中央部分が発掘され重要な遺物が出土し、もともと典型的な積石塚古墳として全国的に知られている。今次の調査によって、調査されていなかった墳丘部分の状況が把握され、さらに全容の解明にむけて一歩進めることができたことは一定の成果であった。関係各位のご協力に感謝申しあげ稿了としたい。

#### 参考文献

1. 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鹿塚古墳の調査」考古学雑誌45-1 昭和35年
2. 須坂市教育委員会「須坂市口明塚第4・5・6号墳確認試掘調査報告書」昭和50年
3. 須坂市教育委員会「大塚畑第3号墳確認調査報告書」昭和51年
4. 須坂市教育委員会「天神第1号墳確認調査報告書」昭和52年
5. 須坂市教育委員会「行人塚古墳」昭和53年
6. 「長野県史」考古資料編主要遺跡(東北巻)昭和57年





1. 古墳全景



2. 調査区域現状



1. 調査区全景



2. 原形を残す墳裾



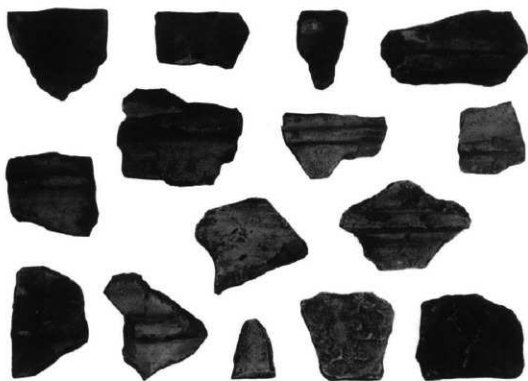


1. 南側墳裾 (7区)

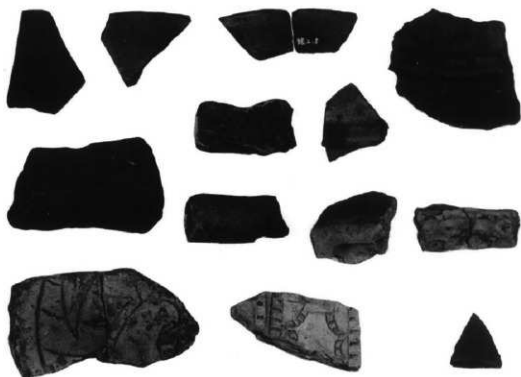


2. 東側墳裾 (8区)

写真四  
遺物



1. 円筒埴輪

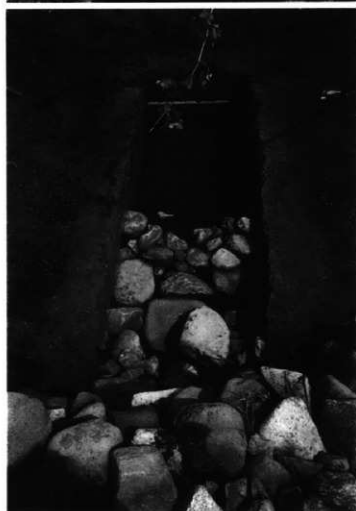


2. 朝顔形円筒埴輪・家形埴輪・異形埴輪・須恵器

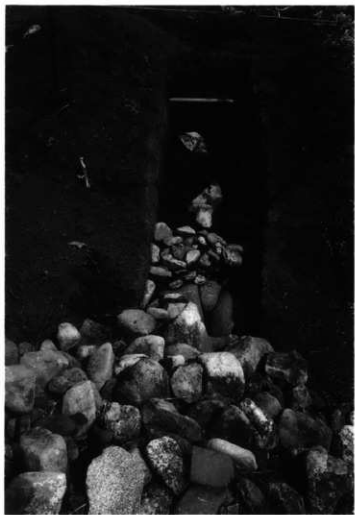
# 図 版



1号墳Mトレンチ



1号墳Lトレンチ



1号墳Kトレンチ



1号墳Jトレンチ



ゴホウラ鋼出土状況



2号墳全景



2号墳敷石帯



敷石の状況



2号墳敷石帯の状況 西より



2号墳敷石帯の状況 東より





2号墳 墳丘トレンチ



墳丘トレンチ断面の状況



2号墳張出部と石棺



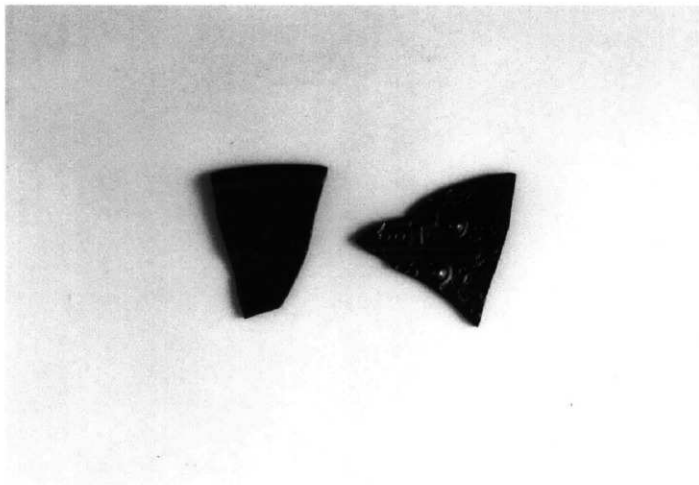
組合式箱式石棺



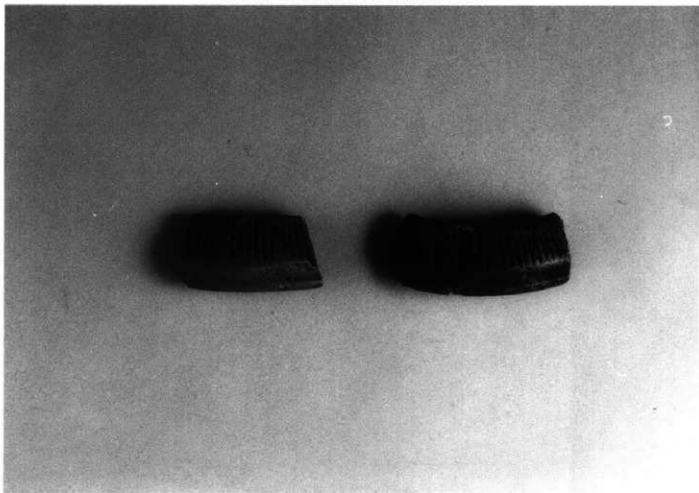
2号墳側から見た石積と6号墳



6号墳と遺物出土状況



1号墳出土 方格規矩四神鏡 (昭和32年出土) 1 : 1



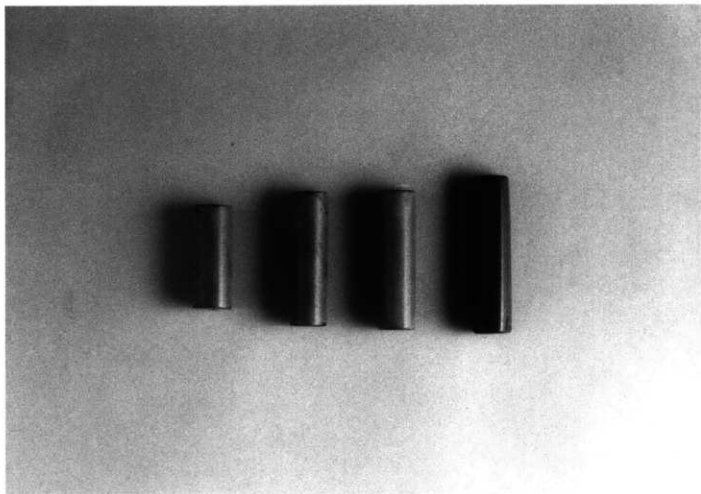
1号墳出土 石劍 (昭和32年出土) 1 : 1



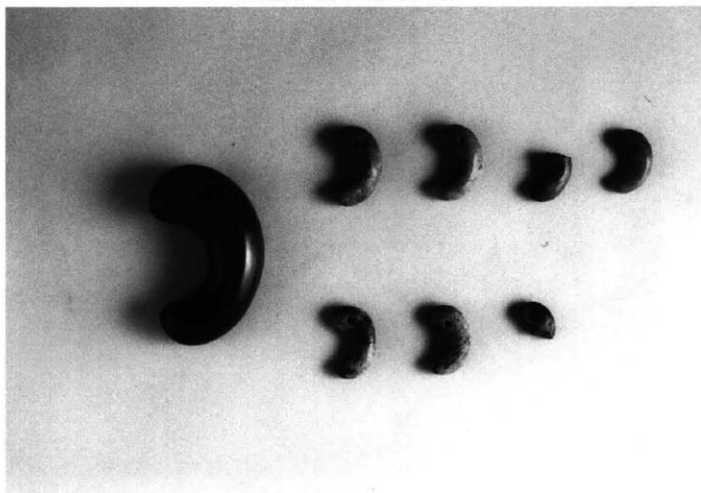
1号墳出土 貝鋼 (昭和32年出土) 1 : 1



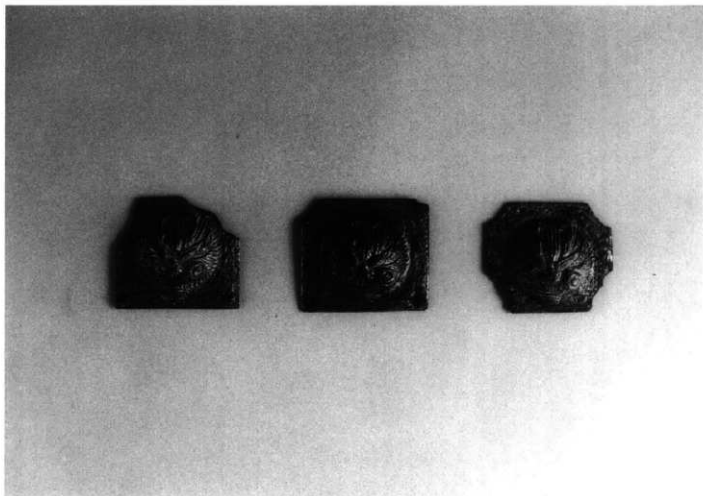
1号墳出土 貝鋼 (平成6年出土) 1 : 1



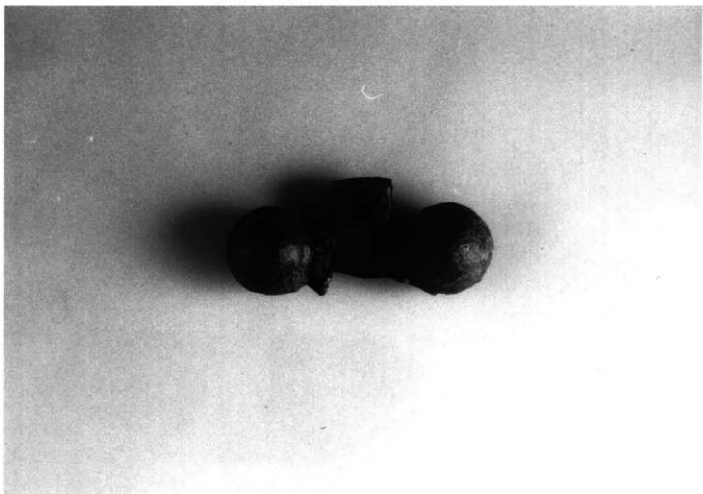
1号墳出土 管玉 (昭和32年出土) 1 : 1



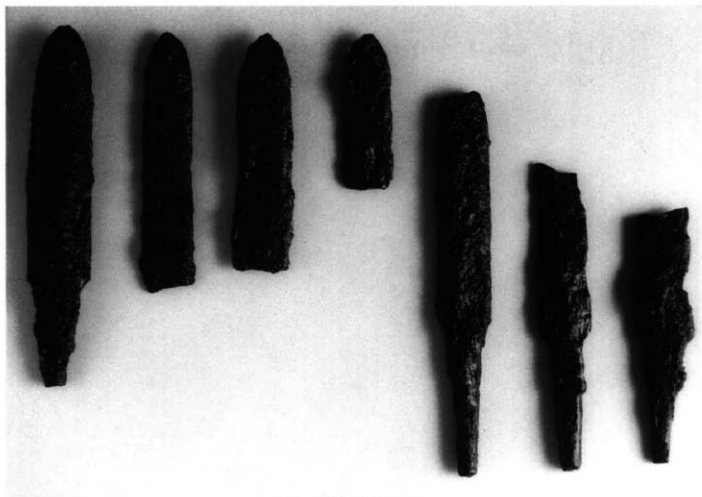
1号墳出土 勾玉 (昭和32年出土) 1 : 1



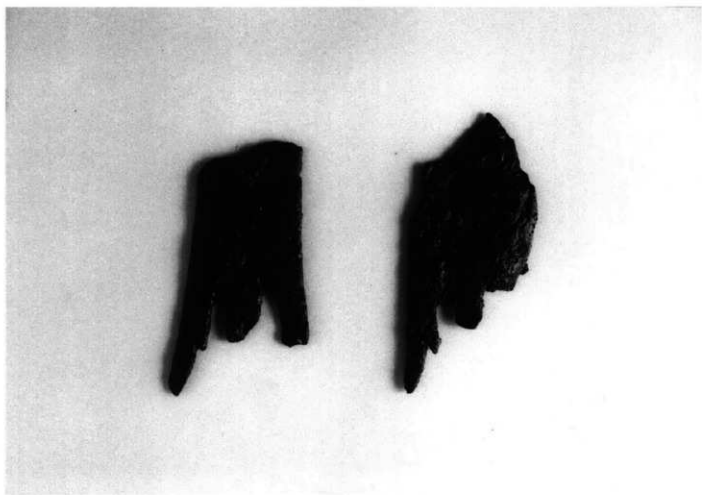
2号墳出土 鍍銀銅製舞曲文鈴板（昭和32年出土）1：1



2号墳出土 鈴杏葉（昭和32年出土）1：1

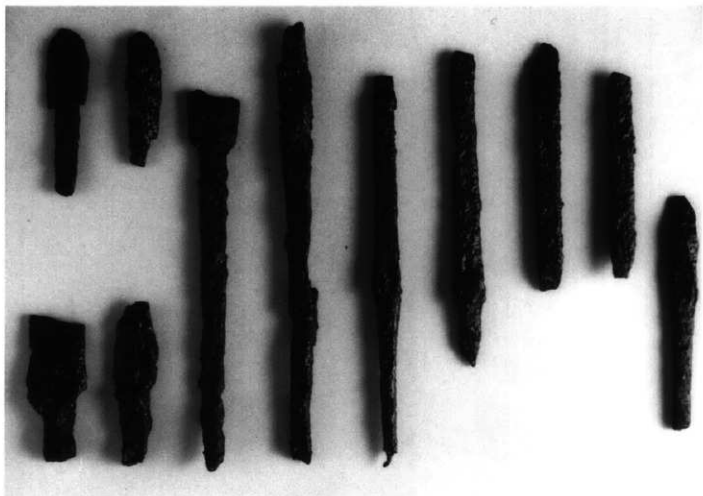


鉄鏃 (昭和32年出土) 1 : 1

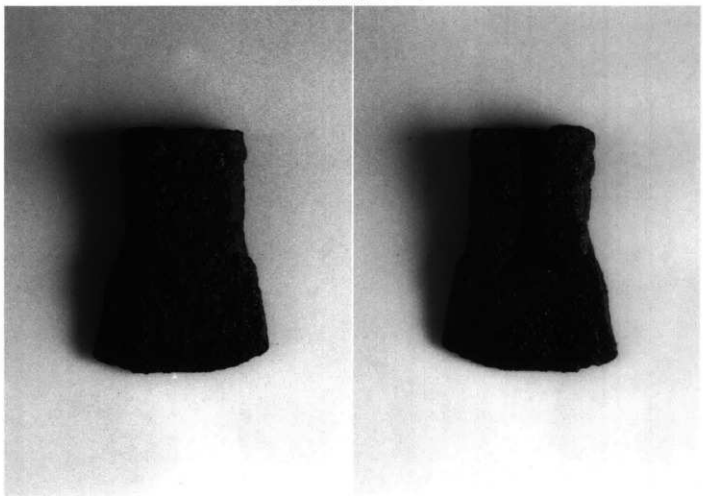


鉄鏃 (昭和32年出土) 1 : 1

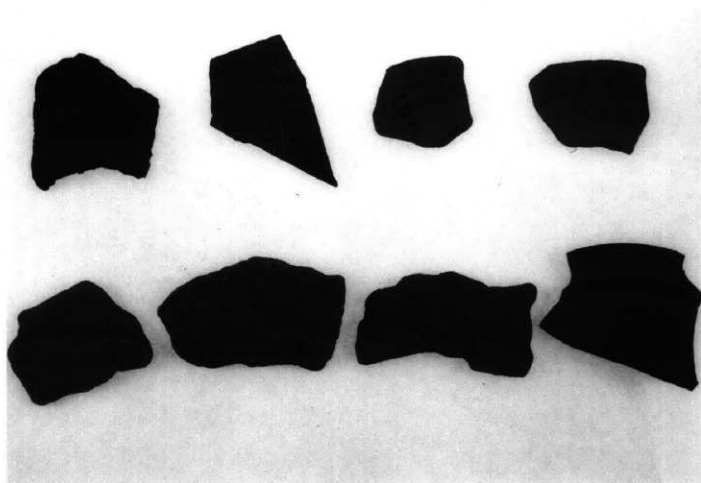




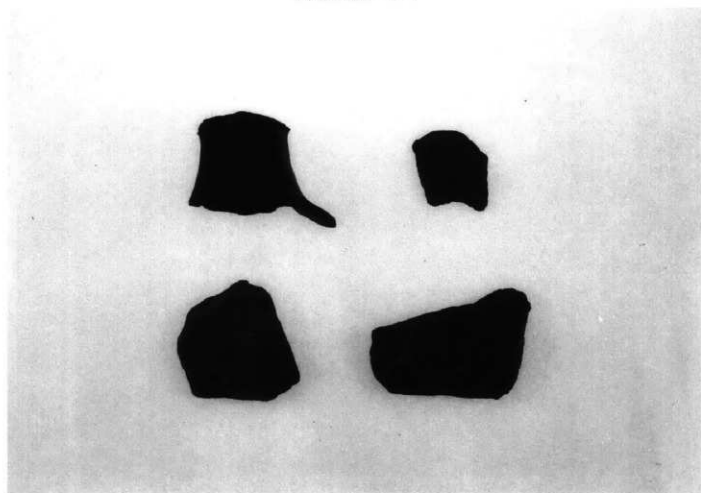
鉄鏃 (昭和32年出土) 1 : 1



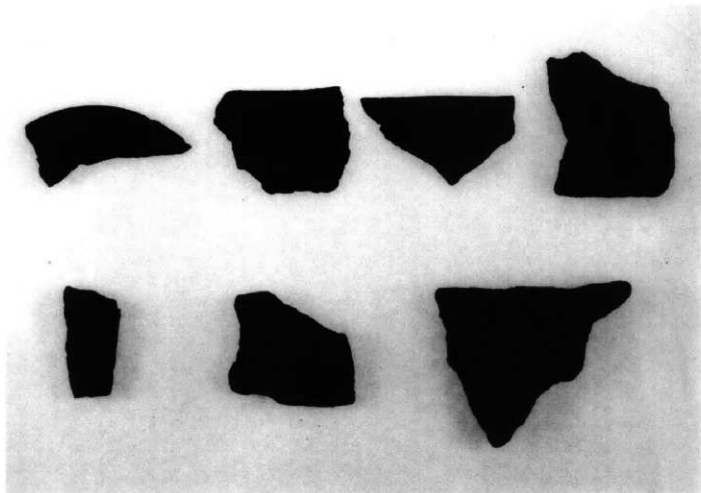
鉄錘 (平成6年出土) 1 : 1



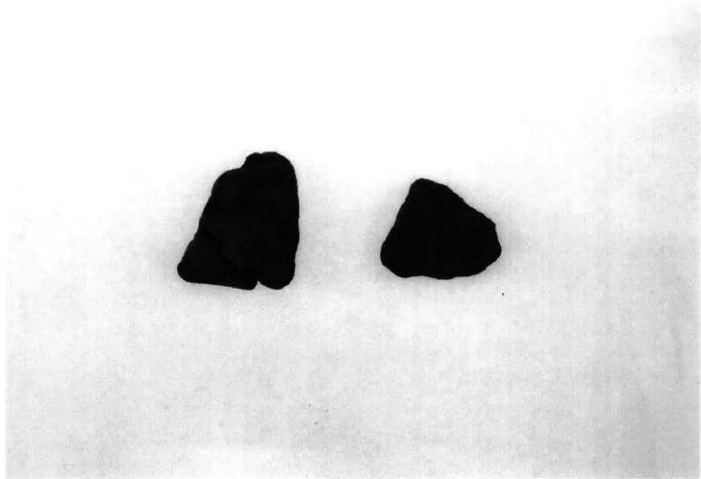
1号墳出土遺物 1/2



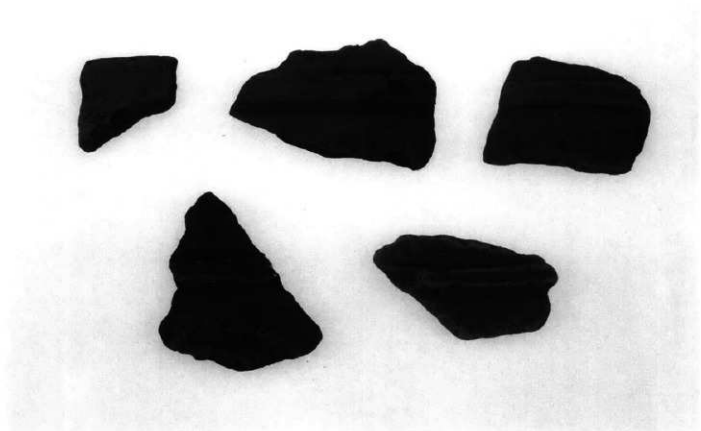
2号墳A・B・C・O・P・Qトレン子出土遺物 1/2



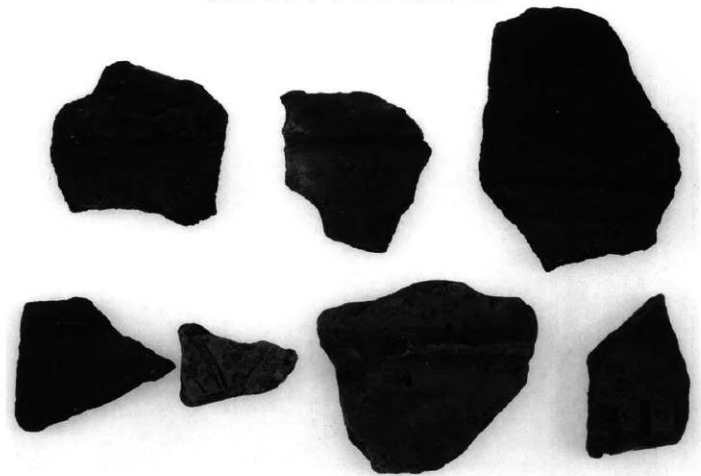
2号墳A・B・C・O・P・Qトレンチ出土遺物 1/2



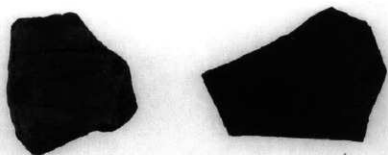
2号墳A・B・C・O・P・Qトレンチ出土遺物 1/2



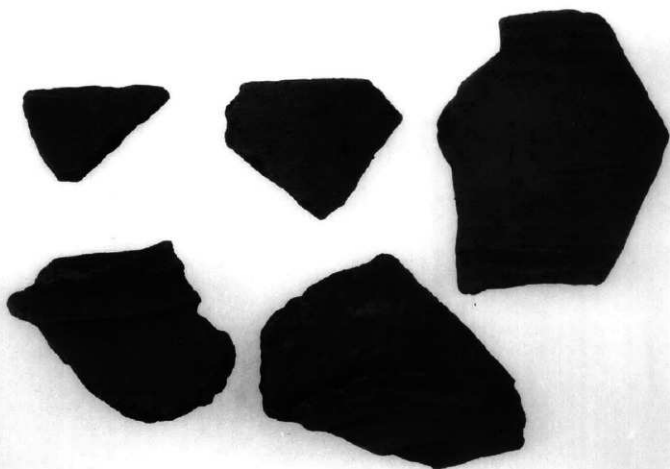
2号墳A・B・C・O・P・Qトレンチ出土遺物 1/2



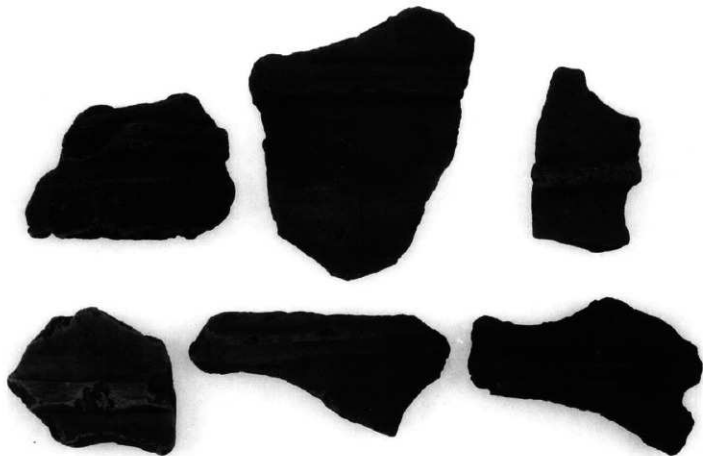
2号墳A・B・C・O・P・Qトレンチ出土遺物 1/2



2号墳A・B・C・O・P・Qトレンナ出土遺物 1/2



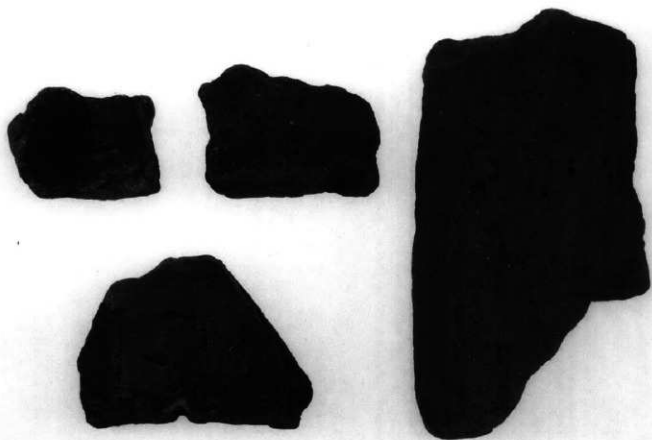
2号墳 墳丘裾（敷石帯）出土遺物 1/2



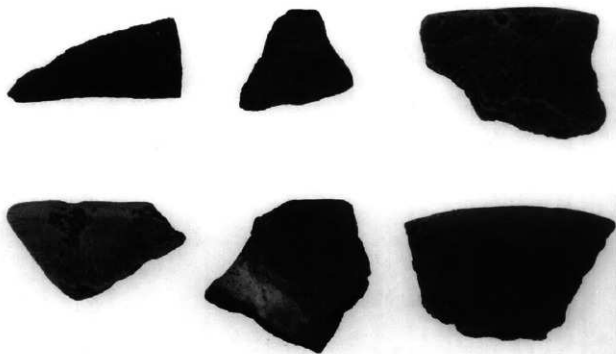
2号墳 墳丘裾(敷石帯)出土遺物 1/2



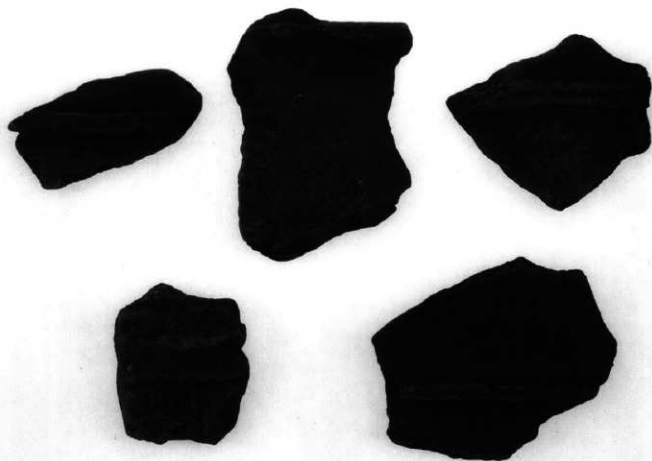
2号墳 墳丘裾(敷石帯)出土遺物 1/2



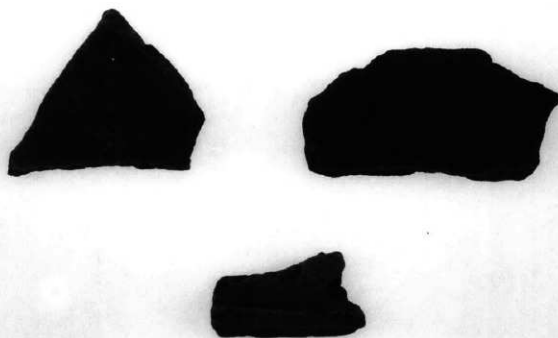
2号墳 墳丘裾（敷石帯）出土遺物 1/2



2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2

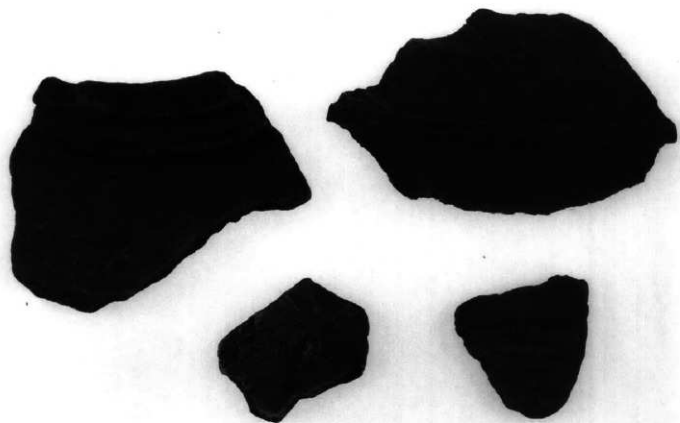


2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2

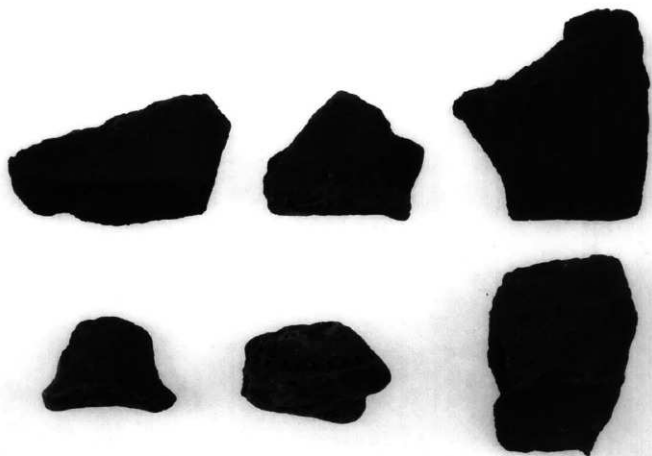


2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2

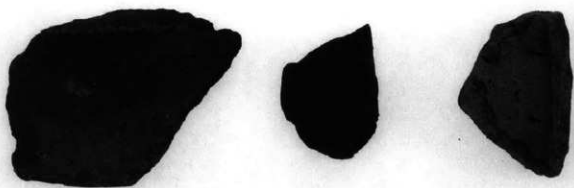




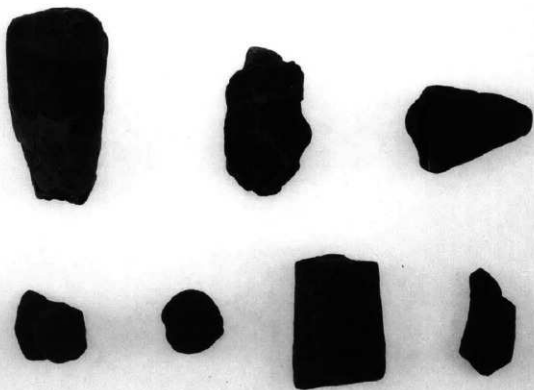
2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2



2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2



2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2



2号墳 墳丘トレンチ出土遺物 1/2



6号墳出土遺物 1/2



6号墳出土遺物 1/2

## 報告書抄録

ふりがな	ながのけんしせき はっちょうよろいづか							
書名	長野県史跡【八丁鎧塚】							
副書名	史跡公園整備に先立つ範囲確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	石野博信・泉森 皎・平尾良光・木下尚子・小林宇巻							
編集機関	須坂市教育委員会							
所在地	〒382-8511 長野県須坂市大字須坂1528番地1 Tel 026-245-1400代							
発行年月日	西暦2000年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
はつちようよろいづか 八丁鎧塚 いちごうふん 1号墳 にごうふん 2号墳 ろくごうふん 6号墳	すざかし 須坂市 おおあざはつちよう 大字八丁 285,287外	202070		36° 38' 18"	138° 19' 37"	西暦1994 平成6年 3月7日 5 7月15日	1,849	遺跡公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
1号墳	古墳	4世紀 後半	円墳・積石塚	貝銅・石銅・土師器片・須恵器片・埴輪片・鉄鏃・管玉・勾玉・方格規矩四神鏡片		昭和32年		
2号墳	古墳	5世紀 後半	張出付円墳・積石塚 組合式箱式石棺 敷石帯	帯金具・鈴杏葉・鉄鏃・円筒埴輪片・朝顔形埴輪片・形象埴輪片・器材埴輪片・鉄斧須恵器片		昭和32年・ 昭和60年調査		
6号墳	古墳	6世紀 中頃	円墳・葺石墳	土師器片・埴輪片		新発見の遺跡		

---

---

## 長野県史跡「八丁鍬塚」

—— 史跡公園整備に先立つ範囲確認調査報告書 ——

---

発行日 平成12年（2000）3月20日  
編集 須坂市八丁鍬塚古墳群範囲確認調査団  
発行 須坂市教育委員会  
〒382-8511 長野県須坂市大字須坂1528番地1  
☎（026）245-1400☎  
印刷 ほおずき書籍株式会社  
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5  
☎（026）244-0235☎

---

---

